

255-34-(3)



1200501344922

255

卷

34



始



武內義雄著

大教習家
文



陽明



○子夏川上曰逝者如斯夫不舍晝夜

去善故舍上者

三也 逝者如斯夫 逝者如斯夫 逝者如斯夫 逝者如斯夫 逝者如斯夫

三也 逝者如斯夫 逝者如斯夫 逝者如斯夫 逝者如斯夫 逝者如斯夫

三也 逝者如斯夫 逝者如斯夫 逝者如斯夫 逝者如斯夫 逝者如斯夫

鄉人來者每詢守文第多子
讀詩之甚也詩
天人書之以為子操切身念且
氣未定凡口須加謹慎弟自
聰明特達諒之不候吾子而
日所論之夫不亦事也來意
思如何得無之少意存否大
担人此也望其一不無所係美

（載轉本印影堂文博依）節一之簡手明陽王

はしがき

大教育家文庫の一冊として「朱子と陽明」の起稿をすゝめられたとき、この機會に宋明の儒學に對する理解を今少し深めたいと考へて快く承諾した。しかしその後月日は矢のやうに過ぎて雑冗は蝟集する、豫期の十分一も勉強し得ないで、たゞ脱稿を急がねばならぬ破目に陥り、這んな出來榮えのしない書物になつてしまつた。校正にあたつて讀みかへしてみると中心慙愧にたへないものがある。

本書の起稿にあつて、どんな態度で筆を進めようかと迷つた。もし教育學の造詣でも深くあつてなら批判的に面白い論文でもかき得たらうと思ふが、それは私には出來ない仕事である。私はたゞ自分に解つたことだけを素直に敘述するより外に途がないと考へた。

しかし同じく朱子と陽明を敘述するにしても二様の途があり得るであらう。第一は文集語録の中から精言を拾ひあつめ、之を類別整理することによつて、朱子の學説は斯々であり陽明の思想はかうであつたと説明することである。第二は言語なり文章なりを年代順に整理し

て早年から晩年に移るに従つていかに思想が進化してゐるかを明かにすることである。前者が平面的の敘述といひ得るならば、後者は歴史的の敘述といひ得るであらう。さうして前者の態度によつて敘述を進めるとすれば、朱子全書と傳習錄とだけでも一應の説明はつき得るが、後者の方法で進まうとすれば、傳記年譜の類を標準にして資料の前後を判別してかゝらねばならぬ。もし朱子や陽明が最初から定見をもつてゐて最後までそれは固守したとすれば、前者の態度で充分であらうが、多少でも思想の變遷があつたとすれば、是非とも後者の方法を選ばなければならない。さうして朱子が晩年に——恐らくは五十六歳から五十八歳頃までの間に——呂子約に興へた書簡中に「近日方に向日の支離さきのひを實見し得たり」といつて居り、陽明も亦その文録の編輯に際して門人に向つて「此編年月を以て次をなし後世の學者をして吾學ぶところ前後進詣同じからざるを知らしむべし」といつてゐるのを考へると、朱子も陽明も時代によつて思想が變つてゐることは明瞭であるから、矢張り第二の方法によつて講究するのが當然であらう。そこで私はこの小著においても年譜を中心に思想學說の推移を敘述して見たいと志した。たゞ私の學識がどの程度まで所志を貫徹し得たかは私自身としても頗

る疑はしく思つてゐる。もし聰明な讀者諸君の叱正を得て後日の改訂に資することができれば幸福である。

昭和十一年九月

武内義雄

目次

敍説 一

朱子 二

第一章 朱子略傳 附著作年表 二

第二章 其學說一、—周張二程の紹述 三

第三章 其學說二、—四書の表章 四

第四章 其學說三、—經學の改造 六

第五章 朱子晩年の學說 附讀書法 九

第六章 科學改革意見 二四

陽明……………一三三

第一章 王陽明略傳とその著作……………一三三

第二章 師承……………一三八

第三章 陸子の紹述—心即理說……………一四三

第四章 道德說一、—知行合一……………一五三

第五章 道德說二、—靜坐……………一六三

第六章 道德說三、—致良知……………一六九

第七章 大學の解釋……………一七六

第八章 朱子晚年定論に就いて……………一八三

第九章 教育說……………二〇一

餘論……………二〇八



朱子と陽明とは支那近世期に於ける代表的の儒者である。儒者とは堯舜を祖述し孔子を宗師として六經の教に従つて仁義の道を敷かうとする學者で、その淵源は司徒の官から出たといはれてゐる(漢書藝文志)。尙書堯典に「契が司徒となつて五教を敷いた」といひ、孟子滕文公章上に「契が司徒となつて教ふるに人倫を以てし、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」といふのは司徒が教育を掌つたことを物語るもので、儒家が司徒の官から出たといふことは儒家が教育を重んじたことを示すものである。後世儒家の祖と仰がる、孔子が文行忠信の四を以て教へたといはれ、孔子に私淑して其道の宣揚に努力した孟子が天下の英才をあつめて教育することを以て君子の三樂の一と信じたことは儒

家が最初から教育を以て自任してゐたことを立證するものである。殊に孟子は井田法を復活して税制を改革することと學校を設立して人倫を明かにすることとを政治の二大眼目と考へた人で、その主張の中心は教育の振作にあつたのである。さうして其後の儒者荀子の著作の卷頭に勸學篇があり、董仲舒の對策に大學を設立することを教化の原だと論じてゐるのも皆この主張をうけついでゐるもので、儒家と教育とは離るべからざる關係をもつてゐる。かうした儒家の中から教育に關する著作のあらはれるのは寧ろ當然である。しかし現在吾々のもつ古い文獻の中で教育に關する專著と見るべきものは僅かに禮記中に存する學記篇と大學篇とを數へうるにすぎない。

學記篇は禮記の第十八篇にあたり、大學篇はその第四十二篇にあつて、ともに作者を詳にせず、又その製作年代も明かでなく、長い間各々獨立した文獻として取扱はれて來た。然るに清朝の學者陳澧といふ人がこの兩篇の間に密接な關係があることを提唱した。

陳澧はその著東塾讀書記の中に、宋の司馬溫公が「學記・大學・中庸・樂記を禮記の精要だ」といつた語を引いて、溫公が學記の次に大學をおいてゐるのは注意すべきであると冒頭

し、學記と大學との内容を比較して兩者の間に離るべからざる關係があることを論證してゐる。公平に兩篇を對照すると陳氏の言が當つてゐるやうに思はれる。さうして此兩篇は朱子と陽明とに深い關係を持つてゐるからこゝに兩篇によつて支那古代の教育を一瞥しておかう。さて學記には「古の王者は教學を先とした」といつて教育の重んずべきことを力説し、次に「古の教には家に塾あり、黨に庠あり、術に序あり、國に學あり」といつて教育機關の完備して居たことを記し、次に大學の課程を説明して、

比年入學、中年考校、一年離經辨志を視、三年敬業樂群を視、五年博習親師を視、七年論學取友を視る。之を小成といふ。九年知類通達して強立反かはらず之を大成といふ。夫れかくること然くにして後以て民を化し俗を易ふるに足り、近き者説よちび服して遠き者之に懷く。此れ大學の道也。

といつてゐる。こゝに「比年入學」とあるは毎年入學を許す意であり、「中年考校」とあるは、隔年毎に試験する意である。試験の方法は第一年目には經書の讀み方と理解について試験し、三年目には勉學の程度と朋友の交際ぶりを視、五年目には學問の博さと師に對する親し

みとを考査し、七年目には判断力と朋友の選擇を試験する。こゝで一應教育は終るが、更に九年目に如何に知識が系統立てられ意志が固まつてゐるかを試験する。これが終れば教育は完了したもので、かくて初めて世に出で人の上に立つて民を感化し風俗を利導することができるのであつて、かうした課程で教育をするのが大學の道即ち教育法である。

學記にはかくの如く大學教育の道を説明してゐるが、大學篇には劈頭第一に、
大學の道は明德を明かにするにあり、民を親しましむるにあり、至善に止まるにあり。

といつて大學教育の目的をのべてゐる。さうしてその次に右目的を達成する順序階梯を説明して、

古の明德を天下に明かにせむと欲するものは先づ其國を治む。其國を治めむと欲するものは先づ其家を齊ふ、其家を齊へむと欲するものは先づ其身を脩む、其身を脩めむと欲するものは先づ其心を正しくす、其心を正しくせむと欲するものは先づ其意を誠にし、其意を誠にせむと欲するものは先づ其知を致す、知を致すは物を格するにあり。物格して后知至り、知至りて后意誠に、意誠にして后心正しく、心正しくして后身脩まり、身脩まりて后

家齊ひ、家齊ひて后國治まり、國治まりて后天下平なり。天子より庶人に至るまで壹に是れ皆身を脩むるを以て本となす。其本亂れて末治まるものは否ちか矣、その厚かるべきもの薄くして、その薄かるべきもの厚きは未だこれあらざるなり、此を本を知るといひ、此を知の至りといふなり。

といつてゐるが、學記に「大學の道なり」で終り、大學が「大學の道は」で筆を起してゐるのは兩者の關係の浅からぬことを暗示する。さうして學記の「知類通達」は大學の「物格しく知致れる」状態をいひ、學記の「強立かた反らず」は大學の「意誠に心正しく身脩まる」意に當り、學記の「民を化し俗を易へ近きもの説び服し遠きもの之に懐く」とは大學の「家齊ひ、國治まり、天下平なり」にあつて畢竟「明德を天下に明かにし民を親しましめる」ことに相當する。さうして學記の「離經辨志、敬業樂群、博習親師」は大學の「格物致知」の實際的修養の順序を示すものと見られる。之等によつて推測すると學記は大學教育の課程を説明し大學はその教育目的を記したもので兩者を對照して見て初めて古の大學教育が判然するといつてよい。

そこで兩者を綜合して考へる、大學教育は經書をよんで聖賢の教を學ぶことが最初で、次に之を行爲にあらはして、友に交り師に事へ、知識が系統立てられて如何なる事件に直面しても惑はなくならしめることに終るもので、これが物を格し知を致すの順序であり、意を誠にし心を正しくして身を脩める階梯である。さうして既に身が脩まつた上で社會に出て他人を感化して行くことが、明德を天下に明かにすることになるのである。従つて大學教育は經書によつて人格を脩養するといふことに歸する。しかし單に經書をよませるだけでなく之を身に體得せしめることに注意を拂つてゐる。そこで學記には、

大學の教ふるや、時教必ず正業あり、退息必ず居學あり、操縵を學ばざれば弦に安んずる能はず、博依を學ばざれば詩に安んずる能はず、雜服(雜事)を學ばずんば禮に安んずる能はず、其藝を興(喜)ばずんば學を樂しむ能はず、故に君子の學に於けるや、これを藏(莊)み、これを脩め、これに息ひこれに遊ぶ。夫れ然し、故に其學に安んじて其師に親しみ、其友を樂しみて其道を信ず、是を以て師輔(師友)を離るといへども反(變)らざるなり。今の教ふるものは其佔畢(書冊)を呻み其詛言を多くし、數進(速進)に及

(汲汲)めて其安を顧みず、人をして其誠によらしめず、人をして其材を盡さしめず、その之を施すや悖り、その之を求むるや佛る、夫れ然(如此)し、故に其學を隱(病)みて其師を疾み、其難を苦しみて其益を知らず、其業を終ふといへどもその之を去(忘)るゝや速し、教の刑(成)らざるはそれこれによるか。

といつて居る。こゝに「時教正業あり」といつたのは授業時間内の正課で、正課には詩書禮樂を教へるが、退息後の居學即ち放課後の自習時間内には操縵(雜樂)、博依(歌謠)、雜服(灑掃應對の雜事)及び其藝(射御書數等)を治めて實際的な脩養につとめしめて、多讀多聞の注入教育を排斥してゐる。そこで吾人はこれによつて古の教育が讀書と同時に實生活に即する生きた脩養につとめたことを觀取することができる。

學記篇や大學篇が何時作られたか明かでないが、それが前漢の學者戴聖の禮記の中に收められてゐることによつて晚くとも前漢の盛時には存在したものと認めなければならない。さうしてその中に教育の理想として稱揚してゐる記事は古の教育制度であるから、これらは漢以前恐らくは周代の制度として考へられて居たものであらう。

前漢の武帝が大學を起して五經博士を置いた當初は恐らく學記や大學の理想の下に計畫されたであらうが、その後經學はいつの間にか語學的の研究に傾き所謂訓詁學に成つてしまつた。さうしてその後多少の變遷はあつたにしても三國六朝を通じて唐初五經正義が編纂せられるまで訓詁文字の研究が經學の中心を占めて古の儒學に於けるやうな精神は失はれてしまつた。

然るに後漢の頃から支那に流れ込んだ印度思想佛教は次第次第にその勢力を扶植して隋唐の際に及んで智顛・嘉祥・玄奘・賢首等の名匠があらはれて天台・三論・法相・華嚴などの宗派が確立した上に善導の念佛宗や南禪北禪の宗風が一世を風靡して儒教はその學理に於いても實際的感化力に於いても佛教の下風に立たなければならぬ様な形勢を現出し、たまたま韓愈のやうな傑士があらはれ頽勢の挽回につとめて遂に狂瀾を既倒に支へることができなかつた。

唐が亡んでつぐに五代の亂を以てしたので暫くは學問の興隆を見なかつたが、宋が天下を一統するに及んで時勢は一轉した。宋の太祖は即位の初めに學舎を増修し先聖十哲の像と先

儒二十人の畫像を畫かしめ自ら先聖亞聖の贊を作り宰臣に命じて其他の贊を作らしめ、又しばしば大學に幸して學問を獎勵し、太宗も亦其志をついで崇文院を立てて書籍を蒐輯し、降て仁宗は天下に詔して州縣に學を興さしめた。かくて宋初の諸帝が學事に意を用ゐたため學校は四方に興り、學者は踵を接し輩出し、儒學の隆盛は前古無比といはれてゐる。宋初學者の代表者は范仲淹と歐陽修とで、范仲淹の系統から胡瑗・周敦頤・張載・二程子等の名儒が崛起し、歐陽修の門下から、曾鞏・蘇軾・蘇轍・王安石等があらはれ、前者の系統から儒學を思想的に改造する運動が起り後者の學派から文學の革新が叫ばれて、宋代文化の隆盛をもたらした。さうして朱子は周程の學をつぎ、又歐蘇の長所をも斟酌して所謂道學を大成した人で、朱子一生の業績は、(一)漢唐以來訓詁の一面に偏した經學の弊を改めて儒教を思想的に革新したこと、(二)儒教の道統を闡明して佛老及び儒中の異端と區別したこと、(三)かくて革新された儒教哲學を基礎に五經の解釋を改訂したこと等の三點にある。朱子の教育上の意見も結局この新儒教の哲學に一致するやうに人物を教育しようとしたもので、結局は大學篇や學記に新解釋を下したものにすぎない。さうして陽明も亦朱子の新解釋の上に更に新しい解釋を

朱子・陽明

下したものである。

朱子

第一章 朱子略傳 附著作年表

朱子名は熹、字は元晦、晦庵、晦翁、遜翁等の號がある。世々安徽婺源の人であつたが、父松蘿齋は秦檜の和議に反抗したため閩（福建）に謫せられ高宗の建炎四年（西紀一一三〇）四月十五日南劍（福建南平縣）の尤溪に於いて朱熹を生んだ。

紹興十三年（一一四三）韋齋病篤きに及び遺言していふ、「籍溪胡原仲と白水劉致中と屏山劉彥沖との三人は吾が親友で學問に淵源がある、吾は常に敬畏して來た、吾死なば汝は往きて事へよ」と。こ

朱子略傳

ここに於いて朱子はこの三人に師事することと成つた、時に年十四。

紹興十八年(一一四八)。年十八歳で郷試をうけ明年進士に及第して泉州同安縣の主簿となる。泉州同安縣は今の福建厦門道にある。

二十三年(一一五三)年二十四、業を李延平の門にうく。延平は文章齋の同門の友である。

三十二年(一一六二)。高宗即位し詔して直言を求む、朱子時に三十二歳封事を上る、其意は大略「陛下毓徳の初親しく簡策を御したまふも、文辭を諷誦して情性を吟咏するに過ぎず、比年以來大道を求めたまふも、又頗意を老子釋氏の書に留めたまふ。記誦詞藻は淵源を探り治道を出す所以にあらず、虚無寂滅は本末を貫きて大中に立つ所以にあらず、帝王の學は必ず格物致知を先として以て事物の變を極め、義理の存する所をして纖悉畢く照あきらかならしめば則ち自然に意誠にして心正しく、而して以て天下の務に應ずべし」と。帝之

を見て大に感動せられ武學博士に除し、樞密院編修官を授けられようとしたが、時の宰相が和議論者であつたため辭してつかなくつた。乾道五年(一一六九)四十歳、母を失ふ。此年帝また召して入對せしめられたが、喪が未だ終らないので辭した。

淳熙元年(一一七四)四十五歳、台州(浙江臨海縣)崇道觀主管となる。翌二年四月呂東萊の來訪をうけ、ともに鵝湖(江西鉛山縣の北方にある山の名)に至つて陸復齋陸象山兄弟に面會したが議論が合はずして分れた。

三年(一一七六)四十七歳、武夷山冲祐觀主管となる。武夷山は福建崇安縣の南方にある山。

五年(一一七八)四十九歳、知南康軍に除せらる。辭したけれども許されず、遂に任に赴き、利を興し害を除き、尤も意を教育に用ゐ、しばしば學に詣つて士子を引進し之とともに學を講じた。六年

同安縣論學者、諭諸生、諭職事、四齋銘(文集七十四)

紹興二十四年、同安縣學講座銘、經史閣上梁文(文集八十五)
二十九年、三十歳、謝上蔡語錄を校す。
三十二年、三十三歳、封事を上る、壬午應詔封事(文集十一)是なり。

隆興元年、三十四歳、論語要義、論語訓蒙口義成る。

乾道四年、三十九歳、二程全書成る。
八年、四十三歳、論孟精義、通鑑綱目、八朝名臣言行錄、西銘解義成る。
九年、四十四歳、太極圖說解、通書解、伊洛淵源錄、程氏外書成る。
淳熙二年、四十六歳、呂東萊と共に近思錄を編す。
四年、四十八歳、論孟集註及或問成る。又詩集傳、周易本義を著す、按ずるに詩傳及易本義は再び稿を改む、これ恐らくその初稿、現行本にあらず。

の秋雨が多くて水害が甚しかったので、坡塘の實地視察を行ひ廬山に行いて白鹿洞書院の舊址を發見した。白鹿洞は唐の李渤が隱居して學を講じた地であるが此時は榛莽にうづもれて見るかげもなかつたので、朱子は非常に慨嘆し、遂に書院を復興して學規を制定して學問の振作をはかつたので風教が大に起つたといふ。八年(一一八一)陸象山が其兄の碑文を頼むために朱子を訪れたので之を白鹿洞書院に招じて學生のために論語の義利章を講ぜしめ、又之を書物にかきあげて書院に藏した。朱子と陸子とは學問上の意見に於いて一致し得なかつたが、互に尊敬しあつてゐたものと見られる。

此年浙東に饑饉があつたので宰相王淮は朱子を提舉兩浙常平茶鹽公事に推薦してその處致にあたらしめた。朱子は帝の宸慮をなやましたまふを憂へ命を拜して即日赴任の道に上つた。さうして途上、書を他郡に發して米商を募りその租税を免除したので米舟が立どころに集まつて民は蘇生の思をしたといふ。その任地に至つた後も意

を民治に用ゐ、自ら輕車に乗じて境内を巡り、深山窮谷といへども撫存遺す所がなかつたので、官吏はその風采を想うて自ら惕厲して境内肅然としてよく治まつた。乃で宰相王淮は天子に向つて「朱子の荒政は學ぶ所を行つて民に實惠を施したものだ」と稱讚して徽猷閣に直せしめようとしたが、辭して命を拜さなかつた。

九年(一一八二)夏旱し秋蝗蟲があつたので徧く紹興府の屬縣を巡歴し、台州に至つて前知唐仲友の不法を發見し之を彈劾した。唐仲友は王淮と同じ郷里の人で姻戚の關係もあり、丁度江西提刑に轉任を命ぜられて居た時で、王淮は之を庇護しようとしたが、遂に事實が暴露したので帝は仲友の新命を奪つて朱子に授けようとせられた。朱子はこれ人の田を通つてその牛を奪ふやうなものだといつて辭つたが、これ以來王淮との間にもつれができて、遂に王淮は御史

六年、五十歳、白鹿洞書院學規を制す。白鹿洞策問(文集七十四)

七年、五十一歳、論孟精義を更定し要義と改稱、之を南康に刊す。(文集八十二)

鄭丙・陳賈等を使喚して道學を排斥するやうに成つた。そこで朱子は上書して現官を辭し、十年(一一八三)再び台州の崇道觀に奉祠を命ぜられた。そこで朱子は廬を武夷の五曲に結んで武夷精舍を建ててこれに住つた。次で十二年(一一八五)には華州(陝西關中道)の雲臺觀主管に轉じ、十四年(一一八七)南京鴻慶宮主管に遷された。顧みると浙東の役を辭してからこゝに至るまで崇道・雲臺・鴻慶の三觀に奉祠して杜門出でざること五年専ら學問の道に力をそゝいだので海内の學者の尊信が益々高まつて來た。官觀に奉祠することとは此時代の退職官吏優遇法では休職である。

十五年(一一八八)王淮が相をやめて周必大之に代るに及び朱子をすゝめて江西提刑に除した。そこで入奏し時弊を列擧して曰く、「陛下即位以來内に政事を修め外に夷狄をはらふを以て務としたまへること二十七年、而も尺寸の功あらざるは、天理未だ純ならず人

十二年、五十六歳、陸學陳學の非を辯ず。
十三年、五十七歳、易學啓蒙、孝經刊誤成る。
十四年、五十八歳、小學書成る。

欲未だ盡さざるによれり。今より以後宜しく敬みて天理を擴充し人欲を克服して凝滯なからしむべし」と。孝宗奏を見て善と稱し兵部郎に除せられたが辭して拜せず、因つて豫定の如く江西提刑たらしめたが又之を辭つたので直寶文閣に除して西京崇福宮の主管を命ぜられた。その後又召命をうけて封事を上つて「天下の大本は君心を正すにあること、及び今日の急務は、(一)太子を輔翼すること、(二)大臣を選ぶこと、(三)綱維を振擧すること、(四)風俗を化すること、(五)民力を愛養すること、(六)軍政を修明することの六事にある」ことを上奏した。この時孝宗は既に寢に就かれてゐたが、亟に起きて燭を秉つて之を讀まれたといふ。此一事によつて朱子が如何に孝宗に信任されてゐたかを察することができよう。かくして朱子はその翌日大乙觀主管に除せられ崇政殿説書を兼ねることになつたが、辭して拜せず、秘閣修撰に除せられた。

十六年（一一八九）孝宗は内禪して光宗が位に即かれた。此年朱子は漳州（今福建龍溪縣にあたる）の知に除せられ、再度まで辭つたが允されず、翌紹熙元年（一一九〇）を以てその任地について。當時漳州は風俗が輕薄で人民は禮儀を知らない、そこで朱子は古今の禮と法律とを説明してきかせ、又喪祭嫁娶の儀を揭示して土地の子弟に訓へしめた。又此地は佛教を崇ひ、男女が僧廬に會集するところが流行し嫁がない女が僧庵を作つてわび住居をする風習があつたので、かたく之を禁じ時々自ら學校に出懸けて諸生の訓誘にあたり、行義廉恥の士を教授にあげて學問を奨勵したので風俗が頓に改まつたといはれてゐる。此時にあつて忘れてならないことは朱子が郡の費用を以て四經四子を刊行したことである。

翌二年の朱子はその子を喪つたので奉祠を請ひ、秘閣修撰を以て南京鴻慶宮主管を命ぜられ、其翌三年（一一九二）には建陽（福建

建安道）に考亭を築いて之に住つた。此地は溪山清遠亡父章齋もかつてこゝを過ぎつて卜居の意があつたので、朱子は特に此地に居を定めたのである。

四年（一一九三）には潭州荆湖南路安撫使に除せられ、固辭したが許されず五年を以て鎮についた。會々洞獠の亂があつたので人を遣して之を諭しとゞめ更に武備を嚴にして姦吏をやめ豪民を抑へ、又嶽麓書院を復興して教育の振興を計つた。潭州は今の湖南長沙の地で、その西方嶽麓山下の書院は北宋の時朱洞の建立に係るものであるが、此に至つて復興されたものである。

五年（一一九四）寧宗即位、趙汝愚相となる。初め寧宗が太子であつたとき夙に朱子の名をきかれて講官としたい意志を持つて居られたので、この年朱子を煥章閣待制侍講に拔擢せられた。趙汝愚は宰相と成るとすぐ四方の名士を招いて朝にあつめたので、よい政治

紹熙元年、六十一歳、書臨漳所刊四經後、又書同四子後（文集八十二）。刊四經成告先聖文（文集八十六）。三年、六十三歳、孟子要略成る。

五年、六十五歳、玉山講義成る。

が行はれることと一般の信望を得たが、獨り朱子は韓侂胄を害あるものと考へしば汝愚に忠告した。汝愚は侂胄に易制の才あるを認めて朱子の言に従はなかつたが、その後侂胄は定策の功をたのんで漸く擅横になり、遂に内批を以て朱子の侍講を免じ、たゞ舊によつて煥章閣待制提舉南京鴻慶宮の名をとどめるだけにした。そこで朱子は再び考亭にかへつて竹林精舍を建てて諸生の教育を樂しむことと成つた。竹林精舍は後に滄洲精舍と改名されたものである。しかし韓侂胄の迫害は未だ止まず、慶元二年(一一九六)監察御史沈繼祖は侂胄の意を迎へ朱子の十罪を誣ひて落職罷祠を迫つた。此時朱子も亦齡七十に近かつたので致仕を乞ひ五年を以て許を得て茲に全然自由の身と成つたが、翌六年(一二〇〇)三月には病を得て歿した、時に年七十一。疾の革るに及んで其子及び門人黃幹等を枕元によび遺稿の整理と、將來の勉勵とを囑して、其翌日正坐して衣冠を整へ、枕について逝つたといふ。

五年、六十五歳、滄洲精舍告先聖文(文集八十一)。
滄洲精舍論學者(文集七十四)。
慶元二年、六十七歳、禮書を修めて未だ成らず。
三年、六十八歳、韓文考異成る。
四年、六十九歳、書傳を集む、未だ成らず。
五年、七十歳、楚辭集註、後語辨證成る。
六年、七十一歳、大學誠意章改訂。

右は宋史の朱熹傳と王白田の朱子年譜を合糅して抄録したもので頗る粗笨な略傳であるが、朱子の閱歴は大體判るであらう。即ち朱子は十八歳進士の試験に合格してからその易簣に至るまで凡そ五十年、その間地方官として活躍したのは唯、同安主簿、知南康軍・提舉浙東常平茶鹽・知漳州・知潭州の五回凡そ九年間で朝廷にあつて經筵に侍したのは僅か四十日に過ぎず、残りの四十幾年は大抵奉祠若しくは家居の日を送つたことが知られる。奉祠とは宋の時代に官吏を廢免する際、官觀に奉祠せしめて祿を與へた一種の優遇法で、現在我が國で休職を命ぜられたのと似たものである。従つて官吏としての朱子は寧ろ不遇といふべきであるが、然しこの奉祠生活の間に種々の著作が出来て學界を益し後世に不朽の功績を残して居るから、その不遇は一面からいふと幸福であつたともいへよう。さうして下欄に附記した著作年表を通覽すると、朱子の研究對象は大體三つの時期に區劃されるやうに思はれる。即ち四十六歳近思錄の編纂までは北宋先儒の著作編纂と註解とに終始して居るが、四十八歳から六

十歳までは論孟學庸の註釋が中心に成つて居り、六十一歳以後に成ると五經特に禮書の整理が中心をなして居るらしい。さうしてその教育に對する見解も時代によつて多少動きがあるやうに思はれる。

朱子の著作は既に上の表に示した通りで、今又之を収める必要もないが、朱子の文集と語類と全書とは、共に後世の編纂に係るものではあるが、朱子研究には是非とも參看しなければならぬ資料であるから、こゝにその概略を記しておかう。

晦庵先生朱文公文集百卷、續集十一卷、別集十卷。正集百卷は朱子の末子朱在の編纂に係り、續集十一卷は誰の手に集められたか明かでないが、別集十卷は余師魯の手であつめられたもので毎篇題の下にその出處を明記してゐる。いづれも朱子の詩文雜記をあつめたもので朱子研究に重要な資料である。

語類一百四十卷は宋の咸淳六年庚午、黎靖徳の編纂に係るもので朱子と門人との平生答問の語をあつめたものである。初め朱子の門人等は各自聞るところを筆録しておいたのである

が、嘉定八年乙亥（一二一五）李道傳が廖德明以下三十二人の記録をあつめて四十三卷となし、後又張洽の記録一卷を増して之を池州で出版した。これが朱子語録の權輿で之を池録と呼ぶ。次に嘉熙二年戊戌（一二三八）李道傳の弟性傳が黃幹等四十二人の記録をあつめて四十六卷となし、之を饒州で出版した、之を饒録といふ。次に又淳祐九年己酉（一二四九）に蔡杭が楊方等二十三人の記録をあつめて二十六卷となし、また之を饒州で出版した、之を饒後録と名づける。次に咸淳元年乙丑（一二六五）吳堅といふ人が以上三録にもれた二十九家の録に新しく四家の記録を加へて二十卷として建安で出版した、之を建録と呼ぶ。以上四種の語録の外にこれらの語を類別編纂した語類は嘉定十二年己卯（一二一九）黃士毅の手に成つて眉州で出版された蜀本語類百四十卷があり、淳祐十二年壬子（一二五二）王恂によつて續集せられ徽州で出版された徽本語類四十卷があるが、最後に咸淳六年庚午（一二七〇）黎靖徳によつて上擧の資料が合綵整理されて現存語類百四十卷と成つたのである。従つて現存語類は幾人かの努力の結晶で極めて豊富な材料を含んで居り、その内には朱子がまだ定論とするに至らなかつた思付なども含まれて居て興味ある書物である。しかしこの書はもともと

門人等の手記をあつめたもので時に聞誤りや記録の錯誤もないとは保證できない。現に陽明

の如きも語類は門人の記録で門人らが勝心を挾んで師説を誤り傳ふる所が多いといつてゐるが、語類をよむ人は此點に注意を要する。

朱子全書六十六卷は康熙五十二年李光地に勅して編纂せしめたところである。朱子の語類は百四十卷文集は百二十一卷非常に浩瀚なものであるが、その編纂は數々に改修せられ又幾人かの手をへたもので、編者が私意を以て潤色を加へたところも無いとは限らず、且つ朱子自身の考へも時代によつて變遷があるから、これら浩瀚な資料の中には矛盾する記事も少なく、後の讀者をして判断に迷はしめることが少くない。康熙帝はこの缺點を除去する目的で此書を編纂せしめたもので、李光地は文集語類の精粹を拾つて十九門に分類して改編したものである。従つてその内容は語類文集以外に出て居ないが、朱子を一應理解するには便利な書物である。

朱子年譜四卷、考異四卷、附録二卷は清朝の學者王懋竑の選述にかゝる。これより前朱子の年譜を作つた人に李方子があるがその本は今傳はらない。それについて明の正徳元年（一五〇六）に婺源の戴銑の朱子實記十二卷があり、嘉靖三十一年（一五五二）に建陽の李默の年譜五卷があり、清に入つて、婺源の洪氏本があり、建寧の朱氏新本、及び武進の鄒氏正譌本などがあつてその種類は頗る多いが中につき王懋竑の年譜が尤も精確とされてゐる。王懋竑は字を子中といひ、白田と號して康熙戊戌の進士、翰林院編修にまで進んだ人で、尤も朱子研究に力を注いでゐる。此年譜は李氏本と洪氏本を斟酌し語類文集の資料によつて訂補を加へたもので、考異にはその取捨の理由を明記して居て尤も信據すべき勞作である。朱子の研究に従事する人は宜しく此本を以て階梯とすべきである。附録二卷は朱子の論學の要語をあつめたものである。

第二章 其學說一、—周張二程の紹述

一 朱子の家學と師承

朱子の第一期の學問は北宋の先儒周張二程の學を紹述することにあつたことは上にのべた通りであるが、彼をしてかうした徑路を取らしめたのは、その家學と師承が然らしめたものである。

朱子の父章齋は羅從彦の門に學び、羅從彦は二程子の門人楊龜山に學んだ人で、二程子はまた幼時周茂叔に従學したといはれ、又張橫渠と親しかつた人であるから、此點から見ても朱子が周張二程の學をうけつゝいたことは當然である。

尤も章齋は朱子十四歳の時に世を去つて長く其子を教育し得なかつたが、その死に臨んで、其親友胡籍溪・劉屏山・劉草堂三人の教をうけるやうに遺言した。このことは劉屏山墓表に、先人疾病の時かつて顧みて熹に語つて曰く、「籍溪胡原仲・白水劉致中・屏山劉彥沖、此

三人は吾友にして其學皆淵源あり、吾敬畏する所、吾即し死なば汝往きて之に父事して唯其言を之れ聽け、吾死すとも恨みず」と。熹泣言を受けて敢て忘れず。既に没す、則ち奉して以て三君子に告げて學を稟く（文集九十）。

といひ、又籍溪行狀に、

先生（胡籍溪）の與に志を同じくせる所は、唯白水劉先生、既に與に俱に隱る。又屏山劉公彥沖先生を得て之と遊び、更に相切磋して以て其學を就す。熹の先君子も亦晩にして交を定む。既に病み且に没せむとするや遂に因て以て其子を屬す。故に熹三君子の門に於いて皆灑掃の役に供するを得て、先生に事ふる尤も久しとなす（文集九十七）。

といつてゐるので明かである。さうして籍溪はその從父文定公胡安國に従つて程氏の學を傳へたといはれ、又程門の譙天授に學んだといはれてゐて、胡文定は程門の遊薦山・謝上蔡・楊龜山に師友の交をもつた學者であり、譙天授は伊川の門人であるから、此點から見ても朱子が程學を祖述したのは當然である。

朱子はその後二十四歳同安に赴任するとき始めて李延平に見え、二十九歳の時再び復之に

見え、三十一歳同安の任満ちてかへるに及んで之に従學したといふが、延平は其父章齋の友人で楊龜山の高足羅從彦の門人であるから、此點から見ても朱子が程學を傳へたのは自然である。要するに朱子はその家學からいつても師承から考へても程學を祖述すべき人で、彼が二程子と二程子の師友周茂叔、張横渠との表彰に力めたのは其庭訓と師承にもとづくものといつてよい。

そこで朱子は周茂叔の太極圖説と通書と張横渠の西銘とに解を作り、二程遺書と外書とを編纂し、又其師李延平の問答を整理して延平答問を編纂し、又會恬及び胡安國のあつめた謝上蔡の語を整理して上蔡語錄三卷を編成した。さうして最後に呂東萊と協力して近思錄十四卷を作つた。近思錄の成立については、其後序に、

淳熙乙未^二年の夏、東萊呂伯恭東陽より來り余の寒泉精舍に過りて留止すること旬日、相共に周子・程子・張子の書を読み其廣大闊博津涯なきが若きを歎じ、夫の初學者の入る所を知らざるを懼る。因て共にその大體に關し日用に切なるものを掇取して以て此編を爲す。總て六百二十二條、十四卷に分つ。

といつてゐるので判る。想ふに此書は朱子が周張二程の研究に潛心した時代の最後の結論といふことができるであらう。

二 周張二程の學

周茂叔の著作は今太極圖説と通書との二つが残つて居て、朱子が解釋をかいてゐるが、朱子によるとこの二書は程氏の家から出て世に傳はつたもので、二程子の學問はこゝから出てゐるといふ（周子太極、通書後序）。

さて周子の太極圖説は「宇宙の本體を太極と呼び、太極が動いて陰陽の二氣に分れ、陰陽の二氣は更に動いて木火土金水の五行に分れ、この二氣と五行との分合交感によつて千差萬別の現象を生ずる過程を説明したもので、かくの如き過程によつて現象界の萬物を生々するところが宇宙の道であると説いてゐる。さうして通書には、更に、人間もまた宇宙生々の過程上に現れた一つの現象であるから、人間道徳も亦この理に順ふ事に外ならぬと説いて、所謂仁とは物を生々する力であり、義とは生々されたものを守つて完成して行く働きであると説明

してゐる。要するに周茂叔は宇宙萬象を一つの活物と見て、この活物の生成を賛けて行く道を人間社會の道德と考へたのである。

周茂叔の學問をうけついで大成したのは二程子である。二程子とは程明道（名は頤）と程伊川（名は頤）との總稱で、朱子は此二人の言行を、その門人等が書き止めておいた種々の記録を輯めて程氏遺書二十五卷を編纂し、又その行狀祭文の類を輯めて附録一卷を作つたが後又その遺漏を補つて外書十二篇を輯めた。此二人は共に周茂叔に師事し、僅か一年違ひの兄弟であるが、その性格は餘程異つてゐたらしく、朱子が之を評して「明道は徳性寛大にして規模廣濶、伊川は氣質剛方にして文理密察」といつた如く、兩者の性格には相當差異があつて自然その學說にも相違する所があるから、先づ明道に就て説明して後伊川に移らう。

明道
周子は太極が陰陽二氣に分れ、二氣の分合によつて萬物を生々することを宇宙の道と考へたことは上にのべた通りであるが、明道も亦「天地の大徳を生といふ、天地網羅して萬物化生す」といつて生々を宇宙の道と見たことは周子と同じである。しかし明道は陰陽を別々の存在と見ずして、之を一つのものの消長と考へ、この消長によつて萬物を化生することを天

理或は理と呼んでゐる點は周子と異つてゐる。さうして陰陽を對立した存在と見た周子は萬物の差違を二氣五行の分合の相違に歸してゐるが、これを一物の消長と見た明道は之を氣の偏正によるものと説明してゐる。此も亦周子と明道と見解を異にする點である。そこで明道は「人と物とは但氣の偏正あるのみ」といひ、又人に賢愚善惡の相違があるのも氣稟の偏正に本づくもので、本質的に異つたものでないから、人間の道德は氣の偏倚を矯め直して中正に歸せしめるにあると説き、又人が中正を離れて偏倚するのは私心と用智とが害をなすからであると考へて、私心と用智とをすて、廓然大公であることが修養の根本だと論じてゐる。かくの如く明道は種々細かい點では周子と異つてゐるが、その大なるところ即ち生々を以て宇宙の道と考へたことは同じであつてこの道に本づいて人間道德を説明した點も同じである。伊川は一面兄明道の考も受けついでゐるが、他面同時の先輩張横渠の影響を受けてゐるから、こゝに張横渠について一言する。

張横渠（一〇一九—七七）名は載、字は子厚、關中の人で其著述に易說三卷、正蒙十卷、經學理窟十卷等があるが、朱子は特に西銘一篇を註解して西銘解義をかいいてゐる。横渠は嘗て

頑訂・砭愚と題する二文を作つて學習の雙隔に掲げたが、伊川は其物議を生ぜむことを恐れ忠告して西銘東銘と改題せしめた、西銘は即ち頑訂の改題である。明道はかつて此篇を激賞して「頑訂の言は極めて醇にして雑なし、秦漢以來學者の未だ到らざりし所なり」といひ、又「頑訂一篇は意極めて完備す乃ち仁の體也、學者それ此意を體してこれを己に有せしめば其地位已に高し」といつて居り、伊川も亦此書「理一分殊」を明したもので孟子の性善養氣の論と功を同じくするものだと言讀して居る（近思錄卷二）。所謂理一分殊とは本體の理は元より一つであるが、現象界の萬物は各々その一分を得てゐるのみで自然差等があることをいふのである。

さて伊川は其兄明道と同じく本體を以て理と解し萬物即ち事象をその作用と見て、事理一致、體用一源と主張する。然し實際の事象は千差萬別で一として同じものはない、かゝる千差萬別の事象が如何にして一理の作用と見られるであらうか。此問題に答へるために伊川は横渠の説をとり入れて理一分殊を説いてゐる。さうしてこの理一分殊説に本づいて修養を説いた。「凡そ一物の上に一理あり須らく其理を窮致すべし」といひ、又「理を明かにせむことを求めて、たゞ一物上に於いて之を明かにせむとすれば亦事を濟さざるべし、須らく衆理を集めて後脱然として自ら悟る處あるべし」といひ又「一物を求めて萬殊に通ずることは顔子と雖ども敢てよくすといはず、夫れ亦積習既に久しくして即ち脱然として該貫すべし、然る所以のものは萬物一理なるが故なり」などといつてゐるが、これは皆理一分殊説に本づいて説かれた修養法である。要するに伊川は明道の天理説と横渠の理一分殊の考とを合せて一丸としたものである。

三 朱子の學說

以上のべた如く周張二程の學説は必ずしも同一とはいはれないが、人間道德と宇宙原理とを一貫した一の原理に歸して、この原理によつて道德を説明して居る點は同じである。さうして朱子は四子の中二程子殊に伊川を尊敬し私淑した學者で、伊川を基礎に他の三子を折中して一家の學を大成したのである。語をかへていへば朱子は伊川の哲學によつて周子の太極圖説と張子の西銘とを解釋して一家を成したものである。

そこで朱子は周子の太極を形而上の理と解し、二氣五行を形而下の器と解して、理は萬物に性を賦與し器はその形を決定するものと説き、萬物は各々太極をうけて其性を一にするが、形が違ふために差異を現じて居るのだと説明してゐる。さうして吾人の經驗する形而下の萬物はすべて形と性とを具備して居るが、論理的に推究すると物が生ずる前に物の生ずべき理があるべきであるから、理は萬物の前に存するもので、これが即ち萬物の本源であらねばならぬ。但しこれは唯論理的にかく考へられるだけで、實際に經驗し得る存在ではない。吾々の經驗は理と器とが密合する形而下のもののみだと説明して居る。従つて朱子によると現象界の差別相即ち分殊の原因は形而下の器即ち陰陽五行の氣にあつて理には關係なく、萬物は分殊するも理は絶對に一如で理から賦與された性も又一如であるといふことに成る。

朱子はこの考を以てまた張子を解釋して西銘解義を作り、その終に「天地の間理は一のみ、然れども乾道男を成し坤道女を成し、二氣交感して萬物を化生すれば則ち其大小の分、親疏の等、十百千萬に至りて齊しくする能はず、聖賢出づるにあらずんば、孰かよく異を合して共に反さんや、西銘の作意蓋しかくの如し、程子以爲らく、理一にして分殊するを明かに

すと、一言以て之を蔽ふといふべし」といつてゐるが、これ亦伊川哲學に本づいて張子を解釋したものである。

かくの如く朱子は程子を中心に周張二子を折中して自家の哲學を構成し、この哲學に本づいて修養を論じてゐる。朱子によると人間の本性は萬人皆平等で衆理を具へ萬事に應ずべき作用を持つてゐるがそれが形氣に拘束されてその本性を發揮し得ず、ために賢愚善惡の差等を現出してゐる。従つて人間の修養はこの形氣の拘束を脱して本性に復歸することと成るが、これを達成するには人々が毎日遭遇する事件事件をよく考察し、正しく理解し履行しなければならぬ。さうしてかくの如く努力して行くと次第次第に事々物々の理が我物と成つて我が知が擴充せられ、かくて積習日をふれば豁然貫通して吾心の全體大用が明かになるものと教へてゐる。

之を要するに朱子の修養論は彼の哲學に基礎をもつもので、哲學が即ち學問の根本である。勿論かうした傾向は必ずしも朱子に始まつたのではなく、その先輩周子も張子も二程子も同じであるが、これを繼承して大成したのは朱子である。宋以前の儒者は或るものは訓詁の末



節に拘泥して宇宙人世を通貫する哲理に暗く、或るものは佛老の空理に流れて實踐を顧みること知らなかつたが、北宋の先儒周張二程が崛起するに及んで茲に宇宙人世を通貫する哲理が究明せられ、之を繼承して大成したのが朱子である。従つて朱子が舊來の儒學に區別せられる特徴はその哲學の構成にある。さうして彼の教育上の意見も亦この哲學に重きをおいてゐるのを特徴とする。

四 朱子の教育説

この第一期に於ける朱子の教育に關する意見は、彼が同安縣の主簿であつたとき、學生職員に對して論した「同安縣論學者」、「論諸生」、「論諸職事」の三篇にあらはれてゐる。試みにその要點を抄録すると次の通りである。

夫れ學は己の爲めにする所以なり。而るに今の世、父の其子に詔ぐる所以、兄の其弟を勉めしむる所以、師の其弟子を教ふる所以、弟子の學ぶ所以は、科擧の業を舍きて則ち爲すなきなり。古人の學をして此の如きに止まらしめば、則ち凡そ志を科擧に得るあれば斯すなはち

やむべし、孜孜焉として日を愛みて倦まず、以て死して後已むに至れるもの、果して何の爲めに然るや。……諸君苟くも能く思を科擧の外に致して古人の學を爲むる所以を知らむは、則ち熹の企して望む所なり。(文集七十四、同安縣論學者)。

古の學者八歳にして小學に入りて六甲五方書計の事を學び、十五にして大學に入りて先聖の禮樂を學ぶ、獨り之を教ふるのみならず、固より之を養はむとするあるなり。……夫れの禮樂を學ぶ、獨り之を教ふるのみならず、固より之を養はむとするあるなり。……此の如し、故に學者材を成して庠序實用あり、此れ先王の教の盛なりし所以なり。學絶え道喪びてより今に至るまで千有餘年、學校の官あり、教養の名ありて、之を教へ之を養ふの實なし、……此れ教者の過なり。……今講問の法を増修する蓋し古の理義養心の術なり。諸君君子たるを欲せざらむか、則ち誰か能くこれを以て諸君に強ひん。苟も志あらば是れ未だ以て此を舍てて他に求むべからざるなり(文集七十四、論諸生)。

嘗て謂らく學校の政は法制の立たざるを患へずして理義の以て其心を悦ばすに足らざるを患ふ。夫れ理義以て其心を悦ばすに足らずして法制の末に區々として之を防がむとするは是れ猶湍水を千仞の壑に注いで徐に蕭葦を翳して其衝流を捍く如く亦必ず勝ざるべし。諸

生教養を蒙る日久し、而して行義未だ人に信ぜらるゝ能はざるは、豈法制の善からざるならむや、亦諸君子理義を以て之を教告せざればなり。……故に今講問の法を増修す。諸君子それ心を専にし思を致し漸を以て之を摩するあらむと務めよ、章句に牽るゝなく、舊聞に滞るなく、之をして飲食起居の間に正心誠意して之によりて聖賢の域に入る所以を知らしむることを畫れば豈美からずや（文集七十四、論職事）。

右三條の内最初の一條に於いて科擧を度外に措いて古人の學をなせといひ、第二條に於いて新たに講問の法を定めて古の理義養心の術を講ずといひ、第三條に於いて、法制の末に屑々たらずして理義を以て教導すべきをいひ、又章句に牽れず舊聞に滞らずして正心誠意聖賢の域に上らしめむことをつとむといつてゐるが、これらは皆上にのべた朱子の學說に本づくものであることは賢明なる讀者諸君の自ら首肯せられることであらう。即ちその中に科擧を度外に措けといつたのは利祿の爲めに學問する當時の宿弊を排したもので、章句に牽るゝ勿れ舊聞に滞る勿れといつたのは漢唐以來訓詁の末に屑々として大義に暗い儒家の舊弊を斥けたものであり、最後に理義を重視して正心誠意聖賢の域に志せと諭したのは、宇宙人世を一貫

する道理を理解して人物本位の教育を振起しようとしたものといひ得るであらう。さうしてこの理義を重要視したのは朱子の近思錄後序にその書の出來た由來を説明して、更に、

蓋し、凡そ學者の端を求め力を用ひ己を處し人を治むる所以と、夫の異端を辨し聖賢を觀る所以との大略は、皆梗概を見はす。以爲に窮郷晩進、學に志ありて明師良友以て之を先後するなき者、誠に此を得て心に玩ばゞ亦以て其門を得て入るに足らむ。

といひ、呂東萊の後序に、

近思錄既に成る。或ひと首卷陰陽變化性命の説は大抵始學者の事にあらざるを疑ふ。祖謙竊に嘗て次輯の意を聞けり。「後出晩進義理の本原に於いて驟かに語るべからずと雖も苟し茫然として其梗概を識らざれば則亦何くに底止すべき。之を篇端に列ねて之をして名義を知つて嚮望する所を知らしむるのみ」と。餘卷載する所に至りては、講學の方、日用窮行の實、具に科級あり、是に循つて進み、早きより高きに升り、近きより遠きに及ばゞ、纂集の指を失はざるに庶幾からむ。

といつて居ると合せ考へる、當時の朱子は學問根柢には理義の本原を知ること、語をかへ

ていへば宇宙人世を一貫せる哲學の理解がなくてはならぬと考へたことが窺はれる。同安縣學の諭告はこの期間に於ける朱子の教育方針を示すもので、近思錄はその教材内容と見るべきものである。そこで朱子は「近思錄好く看よ、四子は六經の階梯、近思錄は四子の階梯」(語類百五)といつて門弟子にその精讀をすゝめてゐる。

五 近思錄

朱子の題辭によると近思錄は淳熙二年(一一七五)朱子四十六歳の時呂東萊伯恭の來訪をうけて、相與に周程張子の書を讀んで之を編纂したもので、二人の共編と見るべき書である。そこで其書の前後には兩人の題辭があげられて居り、宋史の藝文志にも朱子呂祖謙類編と明記してゐるが、後に朱子學が榮えるやうに成つてから呂祖謙の名が没して朱子の著作であるかのやうに傳へられてゐる。語類百五卷によると、この書の内容は、一道體・二爲學大要・三格物窮理・四存養・五改過遷善・克己復禮・六齊家之道・七出處進退辭受之義・八治國平天下之道・九制度・十君子處事之方・十一教學之道・十二改過及人心疵病・十三異端之學・

十四聖賢氣象の十四項に區別せられたとあつて、朱子遺書中に收められた近思錄は凡て十四卷毎卷數の下に凡幾條と註記してゐるだけで、篇名を存しないが、葉采の集解本には、一道體・二論學・三致知・四存養・五克治・六家道・七出處・八治體・九治法・十政事・十一教學・十二警戒・十三辨異端・十四觀聖賢の篇名を設けてその下に各篇の内容を説明してゐる。恐らくは此等篇名は葉采の設けたもので原本はやはり遺書本の通りであつたらう。葉采は字を仲圭といひ平巖と號し、建安の人で近思錄を註釋した最初の學者であり、その集解は淳祐八年(一二四八)朱子歿後四十八年に出來たものである。

かくの如く篇名は葉采にはじまつたものであるが、その内容を窺ふに便利であるから、ここに其篇題下の解説を列記してこの書の梗概を示さう。

- 一、道體。此卷性の本原と道の體統とを論ず、蓋し學問の綱領なり。
- 二、論學。此卷爲學の要を總論す、蓋し徳性を尊ぶには必ず問學により、道體に明かにして指歸する所ありて斯に爲學の大凡を究むべきなり。
- 三、致知。此卷致知を論ず、知至りて後之を行ふあり、首段より二十二段に至るまでは致

知の方を總論す。然れども致知は讀書より大なるはなし、二十三段より三十三段に至るまで讀書の法を總論し、三十四段以後は乃ち讀書の法を分論す。

四、存養。此卷存養を論ず、蓋し窮格至るといへども涵養足らざれば、則ち其知も將に日に昏からむとす、何を以てか力行の地となさんや、故に存養の功は實に知行を貫く、而して此卷二者の間に編列するなり。

五、克治。此卷力行を論ず、蓋し窮理既に明かに涵養既に厚くして行己の間に及推する、尤も其克治の力を盡すべきなり。

六、家道。此卷齊家を論ず、蓋し克己の功既に至れば則ち之を家に施して齊ふべきなり。

七、出處。此卷出處の道を論ず、蓋し身既に修まり、家既に齊へば則ち以て仕ふべし、然ども去就取舍は惟義に従ふべきは當に審にすべきところなり。

八、治體。此卷治道を論ず、蓋し出處の義に明かなれば則ち治道の綱領之を講明せむことを求めざるべからず。

九、治法。此卷治法を論ず、蓋し治本立つといへども治具缺くべからず、禮樂刑政一にても備はらざるあらば以て極治の功を成すに足らざればなり。

十、政事。此卷政に臨み事を處することを論ず。蓋し治道に明かにして治法に通ずれば以て有効に施すべきなり。

十一、教學。此卷人を教ふる道を論ず。蓋し君子進みては則ちこの道を推して以て天下を覺し、退いては則ちこの道を明かにして以て其徒を淑くすべし、所謂英才を得て之を教育するなり、即ち新民の事なり。

十二、警戒。此卷戒謹の道を論ず、修己治人常に警省の意を存すべし、然らざれば則ち私欲萌しやすく善日々に消えて惡日々に積らむ。

十三、辨異端。此卷異端を辨ず、蓋し君子の學已に至ると雖も然れども異端の辨尤も明かにせざるべからざるなり。

十四、觀聖賢。此卷聖賢相傳の統を論じて諸子附す。

以上の葉采の解説は、朱子學完成後の眼を以て解説した嫌はあるが、これによつて近思錄の内容の大體を把握し得るであらう。その第二卷以後に於いて讀書によつてその知を致し、涵

養力行によつて身を治め家を齊へ國を治める道を指示したことは儒家一般の道であるが最初に道體一篇をおいて道の體統性の本原を説明しようとしたところは朱子の特徴で、宇宙人世を一貫する理義の窮明を高調した朱子の教育説と相應するもので特に注意を要する。語類百五卷に朱子の語をのせて、

近思錄首卷看がたし、某伯恭とともに商量しかれ他をして數語をつく做りて後に載せしめしはこれの謂なり。

といひ、呂伯恭の後序に後出晩身の人は義理の本原を急に理解することはできないが、梗概を知らしめておく必要があるから特に之を卷頭にかゝげたといつてゐるのを比較して考へると、如何に道體篇が重要視されてゐるかが判るであらう。

第三章 其學說二、—四書の表章

一 四書の研究

この期間は全體朱子四十八歳から六十歳頃まで十三年間を區切つたが、もとより明瞭な區劃があるわけでない。此期間に於ける代表的著作は四書の集註であつて、彼は淳熙四年に論孟の集註と或問とを著し、淳熙十六年に大學章句と中庸章句との序をかいてゐるから、大學や中庸の章句も此時までに完成したものと見られる。しかし此等の四書集釋も此期に入つて突如と出來上つたのではなく第一期の頃から着手せられて段々と整理されたものである。

年譜によると朱子は隆興元年三十四歳の時論語要義と論語訓蒙口義とを作つたと記されてゐる。この二書は今亡んで傳らないが、幸にその序が文集七十五にのせられてゐるのによつて大體を想像することができる。序によると「古い論語の註釋に魏の何晏の集解、梁の皇侃の義疏、宋の邢昺の正義があつて訓詁名物の解釋は詳しく記されてゐる。さうして宋に至つ

て河南の二程先生は孟子以來不傳の學を起し常に論語を用ゐて人を教導された。自分も十三四歳の時亡父からその説を受けたがまだ大義に通じ得ない前に父に別れ、其後諸家の説を集めて一書を編纂してみたが矛盾だらけで要領を得ない。そこで隆興元年一二友人とともに之を刪定して程氏の説を残した。もし文義名物の詳を知らうとすれば注疏によらなければならぬが、その要義はこゝに存する」(文集七十五)といつてゐる。

次に訓蒙は其序によると、要義編纂の後、初學者のために編纂されたもので、注疏によつて訓詁を通じ、釋文によつて音を正し、而して後諸老先生の説をあつめて童蒙の便を計つたものだといつてゐる(同上)。

これによると朱子の論語を讀みはじめたのは十三四歳の時で、三十四歳の時既に二部の註釋が作られたことが判る。さうしてその後乾道八年四十三歳の時又論孟精義が作られた。

精義三十四卷は二程子・張子・范祖禹・呂希哲・呂大臨・謝良佐・游酢・楊時・侯仲良・尹焞・周孚先等十二家の説をあつめたもので、其序文の意味と内容から考へると論語要義を修補改題したものに更に孟子精義を補つたものらしい。さうして論孟精義は最初建陽で上梓

されたが、その後淳熙七年に至り又遺漏を補つて南康縣學で出版し語孟要義と改稱したといひ(文集八十一、書語孟要義序後)、又精義は後に集義と改稱されたともいふが(文集七十五、語孟集義序)、現在朱子遺書中に刻されてゐる本は矢張り論孟精義と成つてゐる。その卷頭に乾道八年の序だけがあつて、淳熙七年改版の書後がないところから推すと現行本は建陽版本に本づくもので未だ増補されない以前のものであらう。

論孟精義が出来た後五年淳熙四年に至つて論孟の集註と或問とが作られた。蓋し集註は精義或は集義の要を撮り、或問は問答を設けて取捨の意を明かにしたものである。そこで朱子自らも「集註は乃ち集義の精髓」(語類十九)といひ、又「諸朋友若し先づ集義を看れば恐らくは分別しやすからず又多く工夫を費さむ、集註を看るに如かず」といひ、又「且に須らく集註を看て教熟し了りて更に集義を看るべし」(語類十九)などいつて集註が精義(集義)の要を取つて初學の入門であることをいつて居る。その「この書、某三十歳より便ち工夫を下す、今に到つて改猶了せず、是れ草々に見るものにあらず」といひ、又「某語孟集註、一字を添へ得ず、一字を減じ得ず」(語類十九)といふに至つては其苦心の程と自信のあつことも察

せられる。或問は集註の附録ともいふべきもので集註の取捨を加へた理由を説明するものであるが、現在の集註と或問とは時々矛盾する所もある。これにつき朱子は潘端叔の間に答へて、「此書久しく功夫修得するなし、且集註は屢改めて定らず、却て或問と前後相應せず」(文集五十)といつて居り、同じ意味を語類の中にもべて居る。これによると淳熙四年集註が完了した後も絶えず改定を怠らなかつたことが想像される。往年長尾雨山翁が燕京に於いて入手せられた朱子論語集註の殘稿を以て見ても其苦心の程が知られる。要するに論孟集註は最初論語要義に始まつて、其後精義と成り、後亦集註に成つたもので、集註完了後も幾度か改修されたもので、此期間に於ける朱子の著作中尤も心力を費されたものである。

論孟集註について大學章句と中庸章句とが作られた。この二書はいつ頃から着手されたか明瞭でないが、年譜に「答呂伯恭書」

中庸章句一本上納、(此は是れ草本人に示す勿れ)、更に詳説一書あり……後便ち寄去すべし。……大學章句も竝に往る、亦詳説あり、後便ち寄せむ(文集三十三)。

を引いて甲午(淳熙元年)に配し、又「與張敬夫書」

大學中庸章句、此に縁りて略修一過、再録上呈す、然れども其間更に刪るべき處あるを覺

ゆ(文集三十一)

を引いて乙未(淳熙二年)十二月に配當し、又「答詹帥書」

中庸大學二書、改むる所尤も多し(文集二十七)

を引いて乙巳(淳熙十二年)に配當してゐるのを綜合して考へると、既に淳熙初に草稿が出来て、その後十二年に至るも改修をつゞけて居たことが判る。さうして文集七十六に淳熙十六年二月甲子に作られた大學章句の序と、同年三月戊申に作られた中庸章句の序とがのせられて居て、現行本學庸章句にも此序がついてゐる點を考へると、恐らく此年に至つて初めて公にせられたものと思はれる。即ち大學と中庸の章句は淳熙の初年から十六年に至るまで少くとも十六年の苦心を拂つたもので尤も苦心を費した作と思はれる。殊に大學章句は年譜によると其死に先つ三日前まで改定に従事したといふから、朱子一生の努力に成つたものといつてよい。語類十四に「某大學に於いて用工甚だ多し、溫公は通鑑を作りて臣の平生の精力

盡く此書にありといへり、某の大學に於けるも亦然り、論孟中庸は却て力を費さず」と記してゐるのは、その苦心の跡をかたるものである。

淳熙四年に論孟集註が完了、十六年に學庸章句が出来上つて、後世これらを統合して四書集註と呼んでゐるが、朱子の當時は各、別の著作として取扱はれてゐる。そこで中庸章句の朱子の自序を讀むと、

某衆説を會して其衷を折ち既に爲に章句一篇を定著して以て後の君子を俟つ、而して一二同志復、石氏の書を取りて其繁亂を刪り、名づくるに輯略を以てし、且つ嘗て論辯取舍せし所の意を取りて、別に或問を作りて其後に附す（中庸章句序）

とあつて中庸章句と輯略と或問とが合せられて一部の書と成つてゐたことが判る。さうして所謂輯略は石密の中庸集解を變つたものである。石密は字を子重といひ、紹興十五年の進士で知南康軍と成つた人、嘗て周子・二程子・張子・呂大臨・謝良佐・游酢・楊時・侯仲良・尹焞らが中庸を解説した語を輯めて中庸集解といふ書を著し、乾道九年に朱子をして其序文

を作らしめた。其序文は現に文集七十五卷に收められてゐるが、これによると編纂の體裁は論孟精義と相似るものであつた。そこで其後朱子の章句が出来上つた際、朱子は此書を刪正して中庸輯略と名づけ、集解の舊序をそのまゝ、卷首にのせて章句の後に附し、更に章句が輯略所載の先儒の説を取捨した所以を記して或問を作つて又其後に附け加へた。これが中庸章句の最初の形であつたらしい。（因に輯略の卷頭にのせられた序には淳熙癸卯春三月新安朱熹序と署名されてゐて、これと同時に章句も出版された筈であるから中庸章句が一應脱稿して公刊されたのは淳熙十年で、其後十六年に至るまで屢々修補せられたのであらう。）従つて中庸章句は輯略或問と共に一部の書をなし、論孟集註は精義或問と別に一類の書をなし、而して大學章句は或問と又別に一類をなして居たものと想像せられる（四庫全書提要三十五參照）。然るにその後嘉定（一二〇八—一二四）の初に至り李道傳が上奏して論孟集註と中庸と大學の或問を大學に頒布すべきをいひ、同五年（一二一二）に劉焞が朱子の論語中庸大學孟子の説を學官に列すべきを上奏し、又四書の集註を刊行せむことを請ひ、更に下つて理宗の寶慶三年（一二二七）に至つて集註が學官に立てられるに至つて論孟集註と學庸章句とが統

合して出版せられ、又論孟或問と學庸の或問とが合せられて四書の或問として取扱はれて、後世は四書の名が一般に通用されるやうになつた。

二 道統の提唱

朱子自身は未だ論孟集註と學庸章句とを合して四書の集註といふ名はつけて居ないが、此四書は朱子の尤も心力を費した書物で、之によつて儒教に劃期的な革新を成したことは注意すべき點である。舊來の儒教は易書詩禮樂春秋の六經を經典としてゐて、論孟の如きは單にその註解の如くに取扱つてゐたが、朱子は論語を以て孔子の精神を傳へたもの、孟子は孟軻の著述として、更に程子の意をうけついで禮記中の大學と中庸との二篇を摘出し、前者を曾子の言を記録し且つ敷衍したもの、後者を子思の述作と見て、之を論孟とならべて、この四書が孔子・曾子・子思・孟子の正しい傳統を示すもので、上に溯れば堯舜禹湯文武の精神をうけついで闡明したものだ^{と考へた}。然るに此傳統は孟子以後之を紹述する人がなく千數百年間暗に沈んでゐたが、宋に成つて二程子があらはれるに及び、これら四書によつて千年不

傳の説を明かにしたのであつて、朱子は正に程子の學をついで之を闡明する任にあつて居ると信じたのである。この儒教の傳統説を尤も簡明にいひ表したのは中庸章句であるから左に之を譯出しよう。

中庸は何のために作られたる。子思、道學の其傳を失はむことを憂へて作れるなり。蓋し上古聖神天を繼ぎ極を立ててより道統の傳由て來るあり。其經に見はるゝは則ち「允に厥の中を執れ」とは堯の舜に授けし所以なり。「人心惟れ危く、道心惟れ微なり、惟れ精惟一、允に厥の中を執れ」とは舜の禹に授けし所以なり。堯の一言至れり盡せり、而して舜之を益すに三言を以てせるは則ちかの堯の一言必ず是の如くにして庶幾すべきを明かにする所以なり。……夫の堯舜禹は天下の大聖なり、天下を以て相傳ふるは天下の大事なり、天下の大聖を以て天下の大事を行つて、其授受の際丁寧告戒せる此の如きに過ぎずとせば則ち天下の理豈以て此に加ふるあらむや。是より以來聖々相承け、成湯文武の君たり、皐陶伊傅周召の臣たる若き、既に皆此を以てかの道統の傳を接し、吾夫子の若きは則ち其位を得ずと雖も而も往聖を繼ぎ來學を開く所以は其功反りて堯舜より賢れるものあり。然れ

ども是時に當りて見て之を知るものは惟顔氏曾氏の傳其宗を得たり。曾氏の再傳してまた夫子の孫子思を得るに及べば、則ち聖を去る遠くして異端起れり。子思夫の愈々久しくして愈々其眞を失せむことを懼る、是に於いて堯舜以來相傳の意を推本して質すに平日教師に聞ける所の言を以てし、更に互に演繹してこの書を作りて以て後の學者に詔ぐ。蓋しその之を憂ふるや深し、故にその之を言ふや切なり、その之を慮るや遠し、故にその之を説くや詳なり。その「天命率性」といへるは則ち「道心」の謂なり、その「善を擇びて固執す」といへるは即ち「精一」の謂なり、その「君子時中」といへるは則ち「中を執る」の謂なり。世の相後る、千有餘年にしてその言の異らざる符節を合するが如し。前聖の書を歴選し綱維を提挈し蘊奧を開示せる所以、未だ是の若くそれ明かに且つ盡せるものあらざるなり。これよりして又再傳して孟氏を得たり、能くこの書を推明して以て先聖の統を承くとすも、その歿するに及びて遂に其傳を失へり。……然り而して尙幸にこの書泯びず、故に程夫子兄弟出でて考ふる所ありて以て千載不傳の緒をつぎて據る所あるを得たり。蓋し子思の功是に於いて大なりとなす。而程夫子微りせば即ち亦能く其語によりて其心を得

る莫きなり。

右は中庸章句序の一節であるが、これにより所謂道統の傳なるものを明かにすることができ。即ち朱子によると堯舜傳授の「道心」は中庸の「天から賦命せられた性」にあたり、中庸の「性」は孟子の所謂「性善」で、大學の「明德」も亦此に外ならぬ。さうして人が形氣の累を脱してこの性命の本に復る方法を講究することが即ち學問であり修養であつてこれらの方法は論語大學中庸孟子の四書に尤も明瞭に説かれてゐる。そこで四書によつて道統を探つて修養に資しようとするのが朱子學問の立前である。

三 大學教育と大學篇

朱子が四書を尊んだことは上に述べた通りであるが、四書の内でも特に大學を尊重したことは、彼自ら「我平生の精力盡く此書にあり」（語類十四）と稱してその死に至るまで大學章句の改訂に苦心したことで知られる。彼は常に門生に對して先づ大學を讀むべきことをすゝめて、「學問は須らく大學を以て先となすべし、次は論語、次は孟子、次は中庸、中庸は工夫

密にして規模大なり」といひ、又「某は人の先づ大學を讀みて以てその規模を定め、次に論語を讀みてその根本を立て、次に孟子を讀みて以て其發越を觀、次に中庸を讀みて以て古人微妙の處を求めむことを要す」といひ、又「大學は是れ爲學の綱目、先づ大學に通じて綱領を立定すれば他經皆雜說裏許そのうちにあり」といひ、又「大學をもつて數月の工夫とくを用ゐて看去すべし、此書前後相因り相發明す、……他書は一時の言ふ所にあらず一人の記する所にあらず惟此書首尾具に備はる、以て推尋し易きなり」(以上皆語類十四)などいつてゐる。これらによつて朱子が如何に大學を重視したかを想像し得られる。然らば彼は大學を以て如何なる性質の文獻と見たのであらうか。

朱子は大學章句の序の初に於いて「大學の書は古の大學で人を教育する法」を記録したものだのだと喝破し、次に「三代の盛時には學校が完備してゐて王公より庶人の子弟に至るまで八歳になれば皆小學に入つて灑掃應對進退の節と禮樂射御書數の文とを學び、天子の元子と衆子より公卿大夫の適子に至るまでの人々と庶民の俊秀なる者とは十五歳になれば更に大學に入つて窮理正心脩己治人の道を學んだが、周の末世に及んで學校が頽廢して教化が衰へた。

そこで孔子は先王の法を取つて後世に傳へた、現在禮記の内にある曲禮・少儀・内則及び管子の内にある弟子職等の篇は即ち小學教育に關する遺文で、大學篇は即ち大學教育の法を記した文獻である」と説明し、最後に「此等の事實は孔門三千の諸弟子は皆之を聞いてゐた筈だが特に曾子が尤も精確なところを傳へてゐた、そこでその門人等は師傳を敷演して此篇を作つたが、孟子が死んで以來之を傳へる人がなくなつた。然るに天運循環して宋が興るに及び河南の二程子が現れて此篇に著目しその錯簡を正し其旨を明かにして之を表章したため、自分も亦其説を與かり聞くことができた。しかし程氏の書もやゝ散亡してゐるので自分がその闕略を補つて章句を作つた」といふ意味をのべてゐる。

右は大學章句序の内容の概略であるが、その中間に於いて古の大學と小學との區別を説いたのは大戴禮の保傅篇に「古は王子年八歳にして出でて外舍につき小藝を學び小節をふむ、束髮して大學に就き大藝を學び大節を履む」とあり、又白虎連に「八歳小學に入り、十五大學に入る」などあるのによつてのべたものであらうが、曲禮・少儀・内則・弟子職を以て小學教課の遺文と見、大學篇を以て大學教育の法を記載するものと明言したのは朱子の創説で

あつて、それが果して上古三代の制に當るか否かは俄かに決定し得ないが、朱子の教育意見がこゝに出發して居ることは明瞭である。

右序文の末段に於いて、朱子は程子が此篇を表章した後をうけついで、大學篇を改定し増補したことをのべてゐるが、朱子の大學教育に關する意見を明確にするためには、その改定本の内容を吟味する必要がある。そこで先づ朱子の改定にかゝる大學について一瞥しよう。

いふまでもなく大學篇は禮記中の一篇で、その作者も成立の年代も明示され居らず、又その章節も區分されてゐない。然るに朱子は程氏の言を引いて、

大學は孔氏の遺書にして初學徳に入るの門也、今に於いて古人爲學の次第を見るべきも獨り此篇の存するに賴る(大學章句)。

と斷定し、更に進んで大學篇を分析して十一章となし、最初の一章を經となし、後の十章を傳として、

經の一章は、蓋し孔子の言にして曾子之をのぶ。其傳の十章は曾子の意にして門人之を記する也。

と斷じて、傳は經の意を敷演説明したものと見てゐる。従つて朱子によれば大學一篇の要旨は最初の一章即ち經の一章につきてゐるものと見られる。さて大學の首章には、

大學の道は明德を明かにするにあり、民を親(新)にするにあり、至善に止るにあり。…古の明德を天下に明かにせむと欲するものは先づ其國を治む。其國を治めむと欲するものは先づ其家を齊ふ。其家を齊へむと欲するものは先づ其身を脩む、其身を脩めむと欲するものは、先づ其心を正しくす。其心を正しくせむと欲するものは先づ其意を誠にす。其意を誠にせむと欲するものは先づ其知を致む、知を致むるは物に格るにあり云々。

とあるが、朱子は(一)明德を明かにすること、(二)民を新たにすること、(三)至善に止ることの三つを大學の三綱領と呼び、次に(一)平天下、(二)治國、(三)齊家、(四)脩身、(五)正心、(六)誠意、(七)致知、(八)格物を八條目と呼んで八條目の中の(七)と(八)とを至善に止る方法、(四)(五)(六)の三つを民を新たにする方法、(一)(二)(三)を明德を明かにする方法を説いたものとしてゐる。蓋し明德とは人間の天性に具はつてゐる心の作用で、自己の本性を明かにして他人に感化を及ぼすことが民を新たにすることであり、この二つのことを實行するには至善即ち當然の事理に従うて誤ら

ない様に心懸けることである。至善に止ることは結局知を致め物に格ることであるから大學教育の目的は致知格物によつて自己の明德を明かにし他人を感化するやうにとめることだと考へたのである。さうして明德は中庸に所謂「天命の性」であり、堯舜授受の「道心」であり、朱子の哲學で説明すれば「理」のあらはれであつて、それは中庸に最も明快に説かれてゐるのであるが、之を明かにする方法は大學に於いて尤も簡明に説明されてゐるのである。大學の傳の十章は、第一章に於いて明德を明かにすることを、第二章に於いて民を新たにすることを、第三章に於いて至善に止ることを、第四章に於いて本末を、第六章に於いて誠意を、第七章に於いて正身と脩身とを、第八章に於いて脩身と齊家とを、第九章に於いて齊家と治國とを、第十章に於いて治國と平天下とをそれぞれ釋してゐるが、肝心の格物致知を説明する傳文が闕けてゐる。そこで朱子は程氏の意を推して之を補つて第五章とした。その文は次の如くである。

傳の第五章は蓋し格物致知の義を釋して今は亡びたり。このごろ嘗て竊に程子の意を取りて之を補ふ。曰く所謂知を致むるは物に格るにありとは、吾の知を致めむと欲すれば物に即

きて其理を窮るに在るをいふなり。蓋し人心の靈なる知あらざるなく、而して天下の物には理あらざるなし。惟理に於いて未だ窮めざるあるが故に其知も盡さざるあるなり。是を以て大學の始教は必ず學者をして天下の物につきて其己に知れる理によつて益、之を窮めて以て其極に至るを求めざるならしむ。力を用ふるの久しくして一旦豁然として貫通するに至れば則ち衆物の表裏精粗到らざるなく、而して吾心の全體大用明かならざるなし。

此を格物と謂ひ、此を知の至といふ也。

右は朱子大學補傳の全體であつて、その内容は朱子の哲學に本づいて作られて居る。即ち天地間萬物は各々太極の理を完全に備へてゐるが同時に氣を稟けて形相を現じてゐる。さうして萬物は其理に於ては平等であるが形氣の拘束によつて千差萬別の相を示してゐる。人も亦この萬物の一つで理からうけた心の本體は靈妙な作用知をもつてゐるが形氣の私に累せられてその妙用を發揮し得ない。そこで人は已知の知を推し及ぼして事物の理を窮めて自己の知を擴充して行くことによつて吾が知が完全に成る。かうした考の上にたつて此の傳が補はれたのであつて、之を補ふことによつて大學が朱子の哲學——周張二程の學を集大成した朱子

の哲學——と一致することと成つたのである。さうして朱子が周張二程の學を集大成したのは近思錄であるから、朱子は近思錄の思想で大學を改訂増補して、之を古の大學教育の理想だと考へたものである。朱子改訂の大學によると大學教育の目的は人間の本性即ち明德を發揮して人を感化し天下の治平をはかるにあつて、この目的に到達するためには先づ八條目の順序をふんで致知格物から着手しなければならぬといふのが要點である。

四 小學教育と小學書

大學教育の目的は大學篇にあらはれてゐると見たことは上記した如くであるが、その基礎階梯となるべき小學の教育を如何に考へたか。それは上に抄出した大學章句序の一節に「小學に於いて灑掃應對進退の節と禮樂射御書數の文とを學ぶ」といひ、又現存する「曲禮・少儀・内則・弟子職がその遺文」だといつてゐるのによつて略明かである。彼はまた「古者初年小學に入る、只是れ之に教ふるに事を以てす、禮樂射御書數及び孝弟忠信の事の如し。十六七より、大學に入り然して後之に教ふるに理を以てす、致知格物及び忠信孝弟をなす所以

のもの如し」(語類七)といひ、又「小學は此性を涵養す、大學は則ち其理を實にする所以なり、忠信孝弟の類は須らく小學中に於いて出すべし、然れども正心誠意の類は小學如何しかかり得ん、須らくその識あるの後に之を以て之を實にすべし」(語類十四)などいつて、小學に於いて道德的の事項を教へ、大學に進むに及んで其理を教ふるものと考へてゐる。さうして大學教育の何を教へ如何にあるべきかは大學篇で明かであるが、小學教育の文獻曲禮少儀等は餘りに局部的な斷簡である。そこで朱子は其門人劉子澄に託して四書蒙求の類から小學教育に必要な事項を拾ひ集めて小學書を編せしめた。

小學書の編成は淳熙十四年(一一八七)朱子五十八歳の時で、大學章句の序がかゝれた二年前にあたるから、大學の改定と相まつて教化の用にあてる心組であつたらう。その書の卷頭にあげられた題辭がよく之を語つてゐる。

古は小學人を教ふるに灑掃應對進退の節と愛親敬長隆師親友の道とを以てす、皆修身齊家治國平天下の本たる所以にして必ず其をして之を幼穉の時に講習せしめて、其習、智ともにも長じ、化、心とともに成つて、扞格勝へざるの患なからむことを欲するなり。今その

全書は見るべからずといへども傳記に雜出するもの亦多し、讀者往々たゞ古今宜を異にするを以て、之を行ふなく、殊に其古今の異なきものは固より始より行ふべからざるあらざるを知らざるなり。今や、蒐輯して此書を作り、之を童蒙に授けてその講習を資く、風化の萬一に補ひあるにちかゝらむ。

右の文を熟讀すると、朱子が大學と小學との教育を如何に考へて此書を編纂したかが判る。此書の體裁は全體を先づ内篇と外篇とに分ち、更に内篇には立教・明倫・敬身・稽古の四篇を分ち、外篇を嘉言・善行の二篇に分けて、凡て六篇から成つてゐる。内篇は主として四書禮記の内から、それぞれの篇題に相應する章節をあつめ、外篇の嘉言篇には多く北宋先儒の言を録し、善行篇には古今に互つて善行の模範をあげてゐる。朱子は恐らく之によつて幼童に人間としてふみ行ふべき道德法則を教へておいて、成長するに及んで、何の故にかく行ふべきかといふ理由の哲學を教へようとしたものである。さうして彼の哲學が周張二程を集大成したもので近思錄の内に要約されてゐるとすれば、小學と近思錄とは朱子教學の教科書とも見らるべき書である。そこで朱子は「脩身の大法は小學に備はり、義理の精微は近思錄之

を詳にす」(語類百五)といつて居る。しかし近思錄は第一期末の著作で周張二程の語を集録したものであるが小學書は四書の語が中心をなしてゐて、四書に中心が移つてゐることはこの期の特色である。

五 白鹿洞書院學規

朱子が實際の教學に手をそめたのは南康軍に知と成つた際である。彼は南康に着任するとすぐに教授司戸に命じて郷先賢の遺跡を調査せしめ周濂溪祠を立てて二程子を配祀し、又別に陶靖節・劉西澗・劉道原・李公擇・陳了翁のために祠堂を立てて五賢堂と名づけて教化の宣明と風俗の改善をはかつたといふから、彼が周程に私淑し郷先賢を崇尚して教育に意をそそいだことが察せられるが、その後廬山の五老峯下に臥龍庵を作つて諸葛武侯を祀り、次で唐の隱士李渤の講學の遺址をさぐつて白鹿洞と重修して新たに學規を制定してゐる。この學規は彼の教育意見の具體的表現と考へられるから左に全文を抄録して本章の結末としよう。

白鹿洞書院學規

其學說二、一四書の表章

父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、

右五教の目は堯舜契をして司徒となし敬んで五教を敷かじめし即是れなり。學とはこれを學ぶのみ。而してその之を學ぶ所以の序も亦五あり、其別左の如し。

博學之、審問之、謹思之、明辨之、篤行之、

右爲學の序、學問思辨の四者は理を窮むる所以なり。若し夫れ篤行の事は則ち修身より以て處事接物に至るまで、亦各、要あり、其別左の如し。

言忠信、行篤敬、懲忿窒慾、遷善改過、

右修身の要

正其義、不謀其利、明其道、不計其功、

右處事の要

己所不欲、勿施於人、行有不得、反求諸己、

右接物の要

熹竊に古昔聖賢の人を教へ學を爲さしむるの意を觀るに、之をして義理を講明して以て

其身を修め、然して後推して人に及ぼす、徒に其記覽を務め詞章を爲して以て聲名を釣り利祿を取るのみにあらざる也。今人の學を爲す者は則ち既に是に反せり。然れども聖賢の人を教ふる所以の法は具に經に存す、有志の士固より當に熟讀深思して之を問辨すべし。苟も其理の當然を知りて其身を責むるに必然を以てすれば則ち規矩禁防の具、豈に他人の設くるを待ちて而して後持循すべきあらんや。近世學に於いて規あるは、其學者を待つ已に淺しとなす、而して其法たる又未だ必ずしも古人の意にあらざるなり。故に今また以て此堂に施さずして特に凡そ聖賢人を教へて學を爲さしむる所以の大端を取りて條列する右の如く、而して之を相間に掲ぐ。諸君それ相ともに講明遵守して之を身に責むれば則ち思慮云爲の際その戒謹して恐懼する所以のもの必ず彼より嚴なるものあらむ。其然らずして或は此言の所棄に出づるあれば則ち彼の所謂規なるもの必ず將に之を取ることも固より得て略すべからざるなり。諸君それ亦之を念へ（文集七十四）。

以上は白鹿洞書院學規の全文であつて、その中にあげられた五項目の中、五教の目は孟子滕文公上篇に記された契の教條であり、次に爲學の要は中庸第二十章の文であり、修身の要

は論語及び易傳の語を合採したものであり、處事の要は董仲舒の賢良對策中の語ではあるが、その意味は孟子によつて既に力説されたところであつて、最後の接物の要も論語孟子に説かれた語である。従つて白鹿洞學規の内容は四書の語をならべたもので、四書を中心に考へた第二期の教育意見を代表するにふさはしいものである。さうしてその末段に入つて義理の講明を力説して「苟も其理の當然を知りて其身を責むるに必然を以てすれば、規矩禁防の具、豈に他人の設くるをまちて而して後持循すべきあらんや」といふに至つては、教育の目的が人間の本性を發揮するにあると信じたことを物語るもので前章にのべた朱子の哲學に基づくものといはなければならぬ。そこで第二期に於ける朱子の教育觀は第一期の講究によつて到達した彼の哲學を基礎とした四書によつて内容をもられたものといふことができる。

第四章 其學說三、—經學の改造

一 五經の研究とその註解

朱子かつて曰く「人自ら讀むべきの書あり、大學論孟中庸等の書の如き豈讀まざる可けんや。此四書を讀めば便ち人の學ばざるべからざる所以の道理と爲學の次序とを知る。然る後更に詩書禮樂を看よ」(全書六)と。又曰く「蓋し爲學の序己の爲にして後以て人に及ぶべし、理に達して然る後以て事を制すべし。故に程夫子人に教ふる、先づ論孟を讀み次に諸經に及ばしむ」(文集答呂伯恭)と。是は門人等に對して讀書の順序を論じた語であるが朱子自身も實に斯の如き順序をへて講究をすゝめたらしい。即ち第二期の朱子は四書を中心にして講究をつゞけて居たが、四書の研究が一段落をつけると次に六經の研究にうつつたやうである。尤も彼は或る程度に於いて六經は早くから讀んでは居たがその眞の研究にうつつたのは主として第三期に入つてからである。

朱子は紹熙元年（一一九〇）六十一歳で漳州の知となつたが、赴任匆々學業の振興に力をそぎ、人物を擇んで學職に列ね、郡の費用で四經四子を刊行した。其時刊行せられた四經は書と詩と易と春秋との四つで、四子はいふまでもなく大學・論語・中庸・孟子の四書であつて、その刊行の顛末は文集八十二に收められてゐる。「書臨漳所刊四經後」と「書臨漳所刊四子後」と題する二篇の文章にあらはれてゐる。彼は後者に於いて河南の程夫子が、先づ四書を學ばしめて然る後六經に及ぼしたことを力説して、「蓋し其難易遠近大小の序、固より此の如くにして亂るべからざるなり」と賞讚し、「故に今四經を刊するにあたりて此四書をも刊行する」といつてゐるが、正に四書の集註を完了した彼としては當然の事と思はれる。

然るに此と同時に刊行された四經は、書に於いては孔安國の序を西京の文に類しないと疑ひ、各篇の書序を篇首に冠するのは舊形を失ふものだとして、之をまとめて最後に附録してゐる。次に詩に於いても詩序に疑を挿み、之を刪つて詩の本文だけを刊行してゐる。これらは彼が詩書に對して時流を抜いた見識を示すものであるが、易に於いては、呂祖謙の定めた古文周易經傳十二篇に、呂氏の門人王華夷の音訓一篇をそへて上梓して居り、春秋に於いては左氏

の經文を刻して且つ三禮は未だ緒正するに及ばないとのべて居る。これによつて考へると朱子は此時詩と書に對しては既に立派な意見をもつて居ると思はれるが、易は呂祖謙に敬服し春秋はたゞ左氏の本文を取つたに止まつて居て、禮については未だ確乎たる考案が立つて居なかつたらしく考へられる。

尤も年譜によると朱子は四十八歳の時既に詩集傳と易本義とを作つたとあつて、詩易の研究は既に完了してゐたらしく見えるが、陳氏の書録解題によると、朱子の易の註釋は二つあつて、初稿は王弼本によつて註をかき、後には呂氏の古易によつて本義を作つたとあつて、語錄によると紹熙元年五月一日一門人が朱子に對して讀易の法を尋ねると朱子は答へて「易は未だ好く看ず、易は自ら看難し」と答へてゐるから、當時は未だ易の本義は完了してゐなかつたであらう。従つて四十八歳の時にかゝれた註釋は王弼本によつてかゝれた初稿本で、呂氏の古易によつて本義をかいたのは六十一歳臨漳に於いて呂氏の古文周易を刊行した後のことであらう。次に詩集傳にも亦二本があつたらしく呂祖謙の讀詩紀に引かれた朱子の詩説は現行本の集傳と違つてゐる。現行本は詩の小序を疑ひ之を排斥して詩そのものについて解

釋してゐるが、呂祖謙の引用文では矢張り小序によつて説をなして居る。又年譜によると集傳と同じ年に論孟の集註が完了してゐるが、その孟子の註には詩の柏舟篇を仁人不遇の作と説明し、又その翌々年に作られた白鹿洞の賦には詩の子衿篇を以て學校の荒廢を刺つたものとしてゐる、これらは皆小序によつた説明で現行本集傳と異なる點である。文集七十六に載せられた詩集傳の序は淳熙四年十月にかゝれてゐて朱子四十八歳の時にあたるが、其内には一言も小序に對して疑問を挿んでゐないから、これは恐らく初稿本の集傳序であつたらう。従つて朱子は四十八歳で詩の集傳を撰んだことは事實であるが、當時は未ださしたる卓識もなく先輩の註を集めた位の程度であつたらうが、臨漳四經刊行の時即ち六十一歳に成ると小序を衛宏の作として之を斥け、僅かに卷末に附録してゐる、さうしてその後鄭樵の詩辨妄を見るに及んで之に共鳴し彼自らも詩序辨を作つて小序の間違を非難してゐる程であつて、現行本集傳も小序から離れて解釋されてゐる。そこで現行本集傳は第二稿本で恐らく臨漳刊經の後に完了せられたものであらう（四庫全書提要十五參看）。

以上の想像が幸に大過なしとすれば、朱子が六經の註解に力作を残したのは大抵六十歳前

後から後のもので第三期に入つてから特に六經の研究に努力したものとひひ得る。そこで第三期の朱子を窺ふために其六經に對する考を一瞥しよう。

朱子は易に對して本義と啓蒙との二つをかいてゐる。一體易は上下經二篇と十翼十篇とから成つてゐるが、王弼が象傳象傳及び文言を經文の解釋と見て經文各卦の下に散入してから、後世の學者は多く王弼本によつて傳と經とを一つの意味に考へて説明してゐる。然るに宋の代に入つて呂大坊・晁說之・薛季宣などがあらはれて經文と十翼とを引はなして、これが易の古い形だと主張した。呂祖謙の古周易なるものも實は呂大坊等の考を襲うたものである。さうして朱子は古周易を臨漳で刊行したが、矢張り呂祖謙に共鳴して、

熹嘗て謂らく易經は本卜筮の爲めに作られ、皆吉凶によりて以て訓戒を示す。故に其言約にして包ぬる所甚だ廣し。夫子傳を作る、亦その一端をあげて以て凡例をあらはすのみ。然るに諸儒經を分ち傳を合せてより後、學者文について義を取り往々にして全經を玩心するに及ばずして遽に傳の一端を執りて以て定説となす。是に於いて一卦一爻僅に一事となりて易の用たる反りて局する所ありて天下の故に通ずる能はず。是のごときもの熹蓋し之

を病む、是をもつて伯恭父(祖謙)の書を三復みて發るあり。

といつてゐる。朱子が易の本義を作つたのは呂祖謙に啓發されたものである(四庫全書提要三 呂祖謙古周易條參照)。朱子によると易は本來卜筮の爲めに作つたもので、伏羲が八卦を畫した當時は無論のこと、文王が卦を重ねて繇辭をかけた時も、周公が爻辭を作つた際も猶卜筮の目的でかゝれてゐるが、孔子が十翼を作るに及んで初めて義理を説き出したものである。従つて易をよむには三段の區別を立てて見なければならぬ。伏羲は自ら伏羲の易、文王は自ら文王の易、孔子は自ら孔子の易で、孔子の十翼で文王の繇辭を解釋したり、又之を推して伏羲の易を論ずるのは間違つてゐる(語類六十六)。かうした考に立脚して、彼は其最も崇拜する伊川の易傳にさへ甘んぜず、呂祖謙本によつて先づ上下經を釋して文王周公の易を説明し、次に十翼を解して孔子の易を闡明し、別に啓蒙を作つて伏羲の易を論じてゐる。この様に時代を區別して易を解したのは朱子の識見であつて、呂祖謙の影響によるものである。

次に詩は漢以來一般に毛詩が行はれて來たが、この毛詩には篇毎に詩の作られた意味を説明した小序といふものがついてゐて、この小序は子夏の作だと傳へられてゐるが、唐の成伯

輿は毛詩指説を作つて、小序の初の一節だけが子夏の作で、残りの部分は毛萇の附け加へたものだと主張した。さうして其後宋に入つてから小序に對して種々の異論が起つた。即ち程子は小序を以て國史の舊文だと説き、王安石は詩人の自作したものだといひ、蘇轍はその最初の一句だけは孔子の作であるが、他は後漢の衛宏の續成したものだと言張し、更に下つて鄭樵は村野妄人の作だと排斥した。朱子は最初詩傳を作つたときは小序によつて解釋を試みたが遂に詩人の本意をつかみ得なかつたので、後には小序をすてて舊説を改めた。その詩序辨に曰く、「詩序の作、説者同じからず、或は以て孔子となし、或は以て子夏となし、或は以て國史となすも、皆明文の考ふべきなし。唯後漢書儒林傳に、衛宏毛詩序を作る、今世に傳ふ、といへば、序は乃ち宏の作たること明かなり。近世諸儒多く序の首句を以て毛公の作る所となして其下推説云々するものを後人の益す所となす、理或は之あらむも、其首句も亦已に詩人の意を得ざるものあり」といつて盡く詩序をすてて直ちに詩の本文に従つて解を試みてゐる。彼が「或は以て國史となす」といつたのは程氏の説であるが、彼は此に於いても程氏に従はず、鄭樵の説を採用して詩序を排斥した。彼は又蘇轍が首一句と後の部分とを區別



したのを理ありとして一分の贊意を表してゐるが、又「子由詩解好き所多く歐陽公詩本義も亦好し」といひ、又「歐陽文章を會す、故に詩意之を得るもの亦多し」(語類八十一)といつてゐるのを見ると、詩の本文を解釋するには歐陽修や蘇轍に取る所も多かつたことが知られる。要するに朱子は詩序を排斥したことは鄭樵に啓發せられ、詩其物の解釋については歐陽公の詩本義、蘇轍の詩解に負ふもので、程氏には寧ろ反對の意見をもつたものである。

年譜によると朱子は六十九歳の時書傳をあつめたとあるが、今唯文集六十五卷に堯典・舜典・大禹謨・金縢・召誥・洛誥・武成等に關する斷片が存するだけで、全書は傳つて居ない。恐らく成るに及ばずして終つたのであらう。しかし文集語類中に散見する言葉を拾ひ集めて考へると、書に對しても非常な卓見をもつてゐたことが判る。詩序を疑つた彼は又書序を疑つて「書序は恐らく是れ孔安國の做れるにあらじ、漢の文は蠹枝大葉、今の書序は細膩、只六朝時の文字に似たり、小序も亦斷じて是れ孔子の做れるにあらず」といひ、又「尙書小序何人の作なるかを知らず、大序も亦是れ孔安國の作ならず、怕らくは是れ孔叢子を撰べる人の作」といつてゐる。之によると彼は詩序と同じく書序を疑つたことが判る。單に書序を疑

つただけでなく、又孔安國の傳(註釋)をも疑つてゐる。曰く「尙書孔安國傳は恐らく是れ魏晉間の人の作りて安國に托して名を爲せる所、孔叢子のごときも亦然り、皆是れ那一時^{かのころ}の人のつくれる所」と。是れ正に所謂孔安國の註釋をも魏晉間の僞作と考へたものである。彼は又更に一步をすゝめて書の本文に古今文の別あることに注意して、「伏生の書多く難澁曉りがたし、孔安國壁中の書却て平易曉りやすし」といひ、その理由を説明して、「伏生の傳へた今文は伏生の口傳を龜錯が聞き書したものであるから、自然誤りがあるのだらう」といつてゐるが、朱子の歿後師の遺命をうけて作られた蔡沈の書經集傳には每篇題の下に「古文あり今文あり」とか「古文あり今文なし」とか註記して、孔安國所傳の古文本と伏生所傳の今文本との關係を示してゐる。是れは清朝に至つて閻若璩が出て古文尙書の六朝僞作説を唱へる先驅をなしたもので、朱子の讀書眼光が如何に犀利であつたかを示すものである。今でこそ尙書の古文に屬する部分と孔安國傳とはともに魏晉の際の僞作であることは學界の定論と成つて誰でも肯定する所であるが、當時早くもこの説を提唱したのは炯眼といはねばならぬ、さうして彼が屢々東坡書傳を賞めて「文義を解し得たる所多く、又文勢看得よし」といひ、

又康誥篇首四十八字を東坡の説に従つて洛誥の錯簡だらうと斷じ、而して康誥篇を武王の誥だと見て、書序が之を成王の誥と説明してゐるのを疑ひ、遂に進んで書序全體を否定するに至つた徑路を考へると（語類七十八、答徐彥章問）、書經に對する彼の卓見は東坡の讀書法から啓發されたものであらうと想像せなければならぬ。

春秋に關して朱子は之を明道正誼權衡萬世典刑之書と尊んでゐるが未だ之に對して特別な著作を残してゐない。樂經は秦の焚書にあつて亡んだため漢以來之を講究する材料がなく、自然朱子も之に手を染めることはできなかつたが、禮經に對しては相當深い研究をのこしてゐる。

禮經即ち儀禮は古來難讀の書とせられ、博學鴻聞の韓退之でさへ讀むに苦しんだ書物で、朱子も亦その壯年の頃は「禮は頭緒頗る多く恐らく精力短なるもの包羅し得ず」といつて居り、臨漳に四經を刊行したときも未だ之に手をつけてゐないが、その晩年には多大の勞力を拂つて整理を志したやうである。文集十四に載せてゐる「奏乞修三禮劄子」に、

臣聞く、六經の道は同歸にして禮樂の用を急と爲すと。秦の滅學にあひて禮樂先づ壞れ、

漢晉以來諸儒補緝せるも竟に完書なし、其や、存するものは三禮のみ。周官の一書は固より禮の綱領となす、其儀法數度は儀禮乃ち本經にして禮記の郊特性冠義篇の篇は乃ちその義説のみ。……故に臣この頃山林にあり嘗て一二學者と其説を考訂し、儀禮を以て經となし禮記及び諸の經史雜書載する所禮に及ぶあるもの、皆以て本經の下に附し、具に注疏諸儒の説を列ねて六藝の闕を補はむと欲す云々（文集十四、奏乞修三禮劄子）

といつてゐるのによつてその消息を窺ふことができる。さうして「答應仁仲書」に、
前賢常に儀禮の難讀を患ふ。今をもつて之を觀れば只是れ經章を分たず、記經に隨はずして、注疏各、一書を成す、故に讀者をして遽かに曉る能はざらしむるのみ。今此本を定めて盡く此諸弊を去る。恨らくは韓文公をして之を見せしむるを得ざることを（文集五十四、答應仁仲第四書）。

といつてゐるのはその抱負の大を物語るものである。朱子はかくの如き大抱負を以て此書の編纂に着手したが、僅かに家禮五卷・鄉禮三卷・學禮十一卷・邦國禮四卷、計二十三卷を終つただけで死んだので、其門人黃幹がその遺志をついで續成に努力した。しかし黃幹もまた

途中で歿したので楊復が更に補つて儀禮經傳通解六十六卷を完成した。語類八十五に此書の事に説き及んで「儀禮は是れ禮經、禮記は是れ儀禮を解す、儀禮冠禮あり、禮記冠義あり、儀禮昏禮あり、禮記昏義あるが如し、只儀禮に士相見禮ありて禮記士相見義なし、後來劉原父補つて一篇をつくる」といつてゐるが、かうした整理の方針は劉原父などから啓發されたのであらう。劉原父、名は敞、歐陽公の門人で七經小傳の著者である。

之を要するに第三期に入つて朱子は六經の研究に力を注ぎ、易の本義・詩の集傳を完成し、書傳と儀禮經傳集解とは遂にその完成を見ずして歿したが、其門人蔡沈と黃幹が其遺志をうけついで之を完了して、從來の經學に一種新しい成果をもたらした。さうして後世朱子の註釋が舊註に代つて學官に立てられるやうに成つたことは偉大な業績といはねばならぬ。しかしこれら四經の研究を刺戟したのは周張二程でなくして、易は呂祖謙に、書は蘇軾に、詩は蘇轍に、禮は劉敞に啓發されたところが多く、二蘇と劉敞とはともに歐陽修の門下であるから、朱子晩年の學問は歐陽修派の研究に負ふものが多いといはねばならぬ。さうして周程派の哲學と歐陽修派の讀書眼とを合せて一丸となしたところに朱子の偉大さが發揮されたものと考へられる。

因みに一言したいことは朱子の蘇氏兄弟特に東坡に對する態度の變化である。朱子がかつて雜學辨一卷を作つて蘇軾の易傳と蘇轍の老子解と張九成の中庸解と呂希哲の大學解とを批評駁撃してゐる。その蘇氏易解を批評するにあたり蘇氏は易傳が性命の理を説いてゐるのを知らずに臆度の説をなし、その上他人から指斥せられるのを恐れて毎に不可見不可言などいつて無學の人を惑はしてゐると非難し、老子解についても蘇氏兄弟は吾儒を釋老に合せて自ら高くかまへてゐるが、之は吾儒の學を亂つて人心の正を失はしむるものと憤慨して一々本文を引用して辯駁を加へてゐる。此書の末尾に附せられた何鏞の跋によると此書が出たのは乾道二年（一一六六）で朱子が三十七歳の血氣盛りの時である。然るに晩年尙書や詩の集傳を作る時に成ると二蘇の見解を常に賞讃して居る。この二つの事實によつて朱子は壯年兩蘇に反抗したが、晩年には之に敬服するやうに成つたことがわかる。蓋し壯年の朱子は周程の傳統をついで理窟づめに物を考へることをつとめてゐたが、晩年に成つて漸次讀書に努力

するやうに成り遂に兩蘇の讀書眼光に服せざるを得ないやうに成つたのであらう。

清儒陳澧の東塾讀書記には朱子の文集中から蘇東坡に關する評語をひろひあつめて、その早晩に異見の變化したことを論じてゐる。即ち文集中「答程允夫書」と「答汪尙書書」とはともに蘇氏を攻撃して居り、又呂伯恭が「蘇氏は乃ち唐景の流」と評したのに對し朱子の答書には「屈宋唐景の文は悲愁放曠の二端に過ぎず大に心の害となる」と贊意を表してゐる。さうして「答程允夫書」には「去冬湖湘に^ゆ歩き講論の益少からず、敬夫見るところ超詣卓然及ぶべき所にあらず、向^まきに論ずる所蘇學の蔽、吾弟相信未だ及ばず、今竟に以て如何となす」とあつて、朱子の張敬夫を訪ねたのは乾道三年（一一六七）三十八歳の時であり書簡中に「去冬」の二字があるのによつて推測すると此手紙のかゝれたのはその翌年朱子三十九歳の時でなければならぬ。又「答汪尙書書」と「答呂東萊書」はいつ頃の書か判然しないが汪玉山が淳熙三年（一一七六）朱子四十七歳の時に歿し、呂東萊は淳熙八年（一一八一）朱子五十二歳の時に卒してゐるからこの兩つの書簡は皆朱子五十二歳以前のものであるべきだ。然るに淳熙八年東坡の林子中に興へた帖に跋をかい「三たび其言を復^{くわ}へす」といつて居り、

其翌年五十三歳の時此帖を石に刻した際又跋をかい「仁人の言廣めざるべからず」といつて居り、又紹熙三年（一一九二）六十三歳の時楊深父家藏東坡帖に跋を作つて「楊深父子に示すに東坡公其先世と往來せる手書を以てす、二公相與に驩ぶ始終かはらざるを知る、又以て人心公論のある所刑禍を以て屈すべからざるを見るに足れり」と敬慕の意をよせて居り、又慶元三年（一一九七）六十八歳の時蘇東坡書李杜諸公詩に跋して「捧玩再三敬嘆にたへず」といひ、慶元五年（一一九九）七十歳の時張以道家藏東坡枯木怪石に跋を作つて「其風霆に傲り古今を閱するの氣猶其人を想見するに足る」といつて居るなど、五十二歳以後の朱子は東坡を推重したもので、その壯年東坡を痛詆したのと全く違つてゐる。又朱子はその晩年に楚辭の集註をかい「屈宋を推重してゐるが、これ亦その壯年に「屈宋唐景の文は悲愁放曠の二端に過ぎず大に心の害となす」といつてゐるのと相違する。かく東坡や屈宋を推重するやうに成つたのは晩年の心境變化であらう。

以上は陳澧の説の大體であるが、之を雜學辨時代の朱子と晩年詩書の傳をあつめた頃の朱子との態度の相違と對照して考へると陳澧の考證が當つてゐるらしく思はれる。それから朱

子は壯年の頃には屈原宋玉は勿論韓退之や柳子厚も單なる文人としてさげすんで居るが晩年には楚辭集註や韓文考異を作つて之を尊重し、特に玉山講義には韓文公の性説を賞讀し滄洲精舍諭告文には蘇老泉韓退之柳子厚の文章に苦心した意氣を以て聖賢の學に志せと激勵してゐるのを見てもその態度の變化が顯著である。恐らく彼はその晩年に六經の研究に當るに及んで兩蘇をはじめ歐陽修一派の經説を參考して、啓發せられたため、此方面に對する理解がまして壯年の偏狹をあらためたものであらう。

二 儀禮經傳通解にあらはれた教育説

儀禮經傳通解は朱子の絶筆で未完成の書物ではあるが、その内に學禮十一卷が備はつてゐて朱子晩年の教育に關する考を彷彿し得ることは悦ばしい。左に目次を掲げて大體を考へよう。

學禮一之上 學制

古此篇なし。今、家塾黨庠遂序皆鄉學となせば則ち其禮の次宜しく其設教道民の法を見

るものありしなるべし。故に諸經傳を集めて此篇を創立す。

學禮一之下 學義

此篇亦古なき所、今諸經傳の凡そ教法の意を言ふものを集めて之を補ひ以て上篇の義を釋す。

學禮二 弟子職

此管子の全篇、童子入學・受業・事師の法をいふ。

學禮三 少儀

此小戴記の第十七篇、少者事長の節をいふ。

學禮四 曲禮

此小戴記の第一篇、委曲禮儀の事をいふ。

學禮五 臣禮

古此篇なし。今按るに事親・事長・隆師・親友・治家・居室の法各、成篇ありて、獨り臣の君に事ふるは三綱の大にして其法尤も嚴、乃ち獨り聚る所なくして諸書に散出し學

共學說三、一經學の改造

者考ふる所なし。今其語を掇りて此篇を創爲す。

學禮六之上 鍾律

古此篇なし。今諸書の律呂相生長短均調の法をいふものを取りて此篇を創爲す。

學禮六之下 鍾律義

古亦此篇なし。

學禮七 詩樂

古亦此篇なし。今唐開元十二詩譜を取りて之を補ふ。

學禮八 禮樂義

古此篇なし。今小戴樂記中禮樂の大指を通論するものを取りて此篇を爲り以て禮樂の義

を通釋す。

學禮九 書數

古此篇なし。(此篇は後の補足で朱子の手になつたものでない。)

學禮十 學記

小戴第十八篇。古の學校教人傳道受業の次序と得失興廢の由る所とをいふ。蓋し大小學

を兼ねていふ。

學禮十一 大學

小戴第四十二篇。専ら古の大學人を教ふるの次第をいふ。

學禮十二 中庸

小戴第三十一篇。程氏以爲く、孔門傳授の心法と、其書子思に成り其言大抵大學と相發

明す。

學禮十三 保傅

大戴禮中第四十八篇。太子を教へ少主を輔くるの道をいふ。

學禮十四 踐祚

大戴第五十九篇。天子師傅を尊ぶ意をいふ。

右十二卷十四篇の目を通覽するに一より九に至る諸篇は主として郷學の制度・精神及び教

其學說三、一經學の改造

課を記したもので十より十二までは大學の制度と精神とをあらはし、十三、十四兩篇は帝王の輔導教化をのべたもので、本來は古の教學を説明するための編纂であるが、その中に自ら朱子の教學に對する理想が託されてゐる。即ち學制篇に於いては先づ學校の制度名義を説明し、次に民衆の教化の法を記し、最後に弟子の教育法につき古い記録をあつめて、然る後學義篇に入つて、書の阜陶謨及び孟子の文によつて教育の目的は五倫を明かにするにあるを示し、次に樂記の文を引用して禮樂によつて教導すべきことを説いてゐる。これは教育の目的は五倫を明かにするにあるが、教育の方法としては禮樂によらなければならぬことを示したもので、朱子の教育に對する大方針と見ることができぬ。

次に弟子職・少儀・曲禮の三篇は管子と禮記とを取つて幼童の心得なければならぬ禮儀を記してゐて、その中に父子の禮・師長に對する禮・朋友の禮・家庭内の禮法は大略説かれて居るが、たゞ君臣關係の禮が明記されてゐない。そこで諸書から君臣の禮をあつめて臣禮一篇を作つてゐる。さうして弟子職から臣禮に至る四篇で禮を終り、次に鍾律・鍾律義二篇を設けて樂律を説明し、又詩樂篇を立てて詩經中の禮教に適する詩をあげて樂經の闕を補ひ、

然る後禮記の樂記篇を抄録して樂義篇と題し、之によつて禮は民心を節することを目的とし樂は民情を和することを目的とするもので、此二者によつて人欲を制して天理を發揮せしめるのが、禮樂教育の極致であるとしてゐる。

古の教育には禮・樂・射・御・書・數を並べて六藝と呼んでゐて、既に禮樂を説き終つたから次に射御にうつるべきであるが、射については別に郷射及び下大夫射篇があつて他の部分で説明してゐるから重ねてこゝにあげることを略し、又御法に關しては記録が全然存しないから之を掲げ得ないとして、こゝに書數の篇を立てた。書とは文字の學問であり、數とは數學で此二者は平常生活に必須なものであるから、説文序によつて文字の大略を説明し、九章算術によつて數學の概念を興へようとしたのが書數篇である（尤も此篇は朱子の手定でなく、後に朱子の序題の意によつて補つたものである）。

以上九篇で幼學の大略を示し、次に第十篇學義篇に於いては禮記中の學記篇を整理して學校の制度・教授法・學習法等を明かにしてゐる。此篇に記された制度は朱子も明言してゐる如く大小學を兼ねて説いてゐるが、その主眼とするところは大學にある。そこで篇中しばし

ば「大學之道」「大學之教」「大學之法」「大學之禮」などが反覆されてゐる。朱子も恐らくこれによりて大學の教育を窺はしめようとしたのであらう。そこでその次に大學篇において大學教育の次第を明かにし次に中庸篇をもち來つて大學教育の奥の手を示すものとしてゐる。その大學篇と中庸篇とを關聯せしめて考へたことは第二期と變るところはないが、更に之を學記篇とむすびつけたのは此期の特色であらう。陳澧の東塾讀書記に儀禮經傳通解によつて朱子が學記を重んじたことを論じ、今人は朱子が學庸を註したことだけを知つて學記の補傳をかいたことを知らないといつてゐるが、それは第二期の朱子が餘りに著名で第三期が閑却されてゐるためである。

學禮の第十三と十四とは材を大戴禮から取つて太子少主の輔導と天子の師を尊び道を傳ふべきことを記してゐるが、これは大學に所謂明德を天下に明かにする理想の當然の歸結と見られる。

之を要するに儀禮經傳通解中の學禮は古典をかり來つて朱子の教育理想を表したものと見

られる。その内容精神に於いて差して第二期と變るものではないが、この中に特に六經の遺文がひろくあつめられてゐることは、六藝研究に努力した時代の著作として前二期に區別されるべき第一の特色である。次に此書の中に樂記を取り入れたことによつて禮樂の教育上に於ける意味が闡明されてゐるのは單に理義の悟入を第一義だと主張した前二期の思想と區別されるべき第二の特色である。最後に大學中庸が學記に結びつけられたことによつて從來抽象的に考へられた大學教育の理想が多少實際的の意味をもつやうに成つたこともまたこの期の特徴の第三に數へられよう。

三 滄洲精舍論告

以上は儀禮經傳通解の學禮を通じて考へた朱子晩年の教育意見であるが、これに應ずべき彼の實際的の意見書とも見られ得るのは「滄洲精舍論學者」の一篇である。此文は紹熙五年（一一九四）朱子六十五歳の時侍講を辭して郷里にかへつたとき、朱子を慕ふ人々があつまつて一精舍をたてた時學生に論した文章で、その作成は禮書の修編と相前後してゐる。彼はこ

の論書の初めに、「昔蘇老泉が初めて文章を稽古し始めた時、論語孟子韓子及び其他聖賢の文を取つて、終日之をよむこと七八年もつゞけた後で、一たび筆を執つて文を作ると渾々としてつきざるものがあつたといつてゐる。蘇老泉は單に古人の聲響を學んだだけで、極めてつまらぬことだが、これだけの勉強をしたればこそ人なみすぐれた文が作れたわけである。古來文章家と呼ばれる韓退之や柳子厚でも同じやうな努力をはらつて初めてあれだけの人になれたのである。單に名文を作つて人にほめられたいだけにこれ程長い歳月と澤山の精神を費つたことは惜しいことである。道を學ぶといふことは天下第一の至大至難の事であるのに、今時の人は旬月の勉強をして一書を熟讀することさへもなし得ず、人が漫然質問を發しても一二行の經傳の成文を引證して一二ヶ處の撞着を疏通することさへ出來ない。たまたま口のきける人があつても己の私意にまかせて臆説をたてるだけで聖賢の本意義理とは無干渉である。斯様なことでは己に反求して眞に理解し眞に實行することは到底できない。かゝる状態では遠方に師を求めることは無駄足である、寧ろ家に歸り門を杜して、老蘇の方法で二三年間、大學・論語・中庸・孟子及び詩・書・禮記・程張の諸書を熟讀して更に自己身上について存養

玩索して着實に實踐して見た上で、適當な師を求めてその所得をたゞし誤謬を訂正してもらつた方がよい。これが自分の諸君に望む所だ」と論じてゐる。

右の論告の中で特に讀書をすゝめて居ることと、讀むべき書物として四書及び程張の書の外に更に詩書禮記をあげてゐることは、儀禮經傳通解にあらはれた朱子の教育方針と一致する主張である。そこで私は第三期に入つてから、朱子は四書及び周程の著書以外に特に六經を尊重し、抽象的な理論の思索よりは書物を熟讀してそれをよく考へることによつて格物致知の實效をもたらさうとするやうに傾いてゐると思ふ。

第五章 朱子晩年の學說 附讀書法

一 晩年の學說——玉山講義

以上著作によつて三期に區劃して朱子の學問の變遷と教育に關する意見の推移を考へた。勿論餘り顯著な飛躍は認められないがそれでも初期と晩年との間には多少の懸隔がある。然るに文集や語録にのせられた文章や記載には年月の判らないものが多く、これらを無造作に分類して見ても却つて曖昧な結論に導く心配が少くない。現に朱子の早晩の學說について異論が存するのを見てもかうした整理法が意味をなさないことが判らう。乃で私は廣く材料を彙類して立論の根據にすることを差控へ、その晩年の口述になる玉山講義によつて朱子晩年の考を紹介することとする。玉山講義は紹熙五年（一一九四）朱子六十五歳の時玉山縣（今江西豫章道に屬す）の邑宰司馬邁の請によつて縣庠で行つた講義で朱子晩年の親切をきはめた教訓だとせられて居る。試みに其要點を抄譯すると次の通りである。

蓋し聞く、古の學者は己のためにし、今の學者は人の爲めにすと、故に聖賢の人を教へて學をなさしむるは是れ人をして言語を綴緝し文辭を造作して、たゞ科名爵祿の計をなすのみにあらず。須らく是れ格物致知、誠意正心、身を修めて、之を推して以て齊家治國に至り、以て天下を平治すべし。方には是れ正當の學問と冒頭し、次に人性論に入りて、

大凡そ天の物を生ずる各、一性を付す。性とは物あるにあらず、只是れ一箇の道理の我にあるもののみ。故に性の體たる所以は只是れ仁義禮智の五字にして天下の道理は此に出でず、韓文公の「人の性たる所以のものは五つ」といへる、其說最も之を得たりとなす。五者の中所謂「信」とは是れ箇の眞實無妄の道理にして、仁義禮智の如きも皆眞實にして無妄なるもの也。故に信の字は更に説くを須ひず。只仁義禮智の四字中に於いて各、分別あるは辨ぜざるべからず。蓋し仁は則ち是れ箇の溫和慈愛の道理、義は則ち是れ箇の斷制裁割の道理、禮は則ち是れ箇の恭敬節文の道理、智は則ち是れ箇の分別是非の道理、凡そ此四者の人心に具はれる、乃ち是れ性の本體なり。其未發にあたりては漠然として形象の

見るべきなきも、其發して用をなすに及んでは則ち仁は惻隱となり、義は羞惡となり、禮は恭敬となり、智は是非となりて、事に隨つて發見し、各々苗脈ありて相殺らざるもの所謂情なり。故に孟子曰く「惻隱の心は仁の端也、羞惡の心は義の端也、恭敬の心は禮の端也、是非の心は智の端也」と。之を端といへるは猶物中にあるありて見るべからざるも、必ず其端緒外に發見するによりて、然る後得て尋ねべきがごときなり。

蓋し一心の中仁義禮智各々限界ありて其性體用又各々分別あり、須らく是れ見得て分明、然る後此四者の中について又自ら仁義の兩字は是れ箇の大限界あるを見得べし。天地の造化に四序(四季)流行するも其實一陰一陽に過ぎざるが如きのみ。是に於いて見得て分明、然る後此について又自ら仁の字は是れ箇の生の意思にして、四者の中に通貫同流することを見得べし。仁は固より仁の本體也、義は則ち仁の斷制也、禮は則ち仁の節文也、智は則ち仁の分別也。正に春の生氣の四時に貫徹するが如し。春は則ち生の生也、夏は則ち生の長也、秋は則ち生の收也、冬は則ち生の藏也。故に偏言すれば則ち一事にして專言すれば則ち四者を包ぬるなり。孔子只仁といへるはその專言を以て之をいふなり、故に但仁とい

ふも仁義禮智皆その中にあり。孟子兼ねて義をいへるはその偏言を以て之をいふなり、然れども是れ孔子の言へる所の外に一箇の義の字を添入せるにはあらず、たゞ一理の中に於いて分別し出し來るのみ。その又禮智を兼言するも亦此の如し。蓋し禮も又仁の著、智も又是れ義の藏にして仁の一字は未だ嘗て四者の中に流行せずんばあらざる也。

といつて、仁義禮智の四徳が人性の體であつて、この四徳は更に仁の一つに攝せられるからこの仁或は仁義禮智の四つが即ち人性に備はる道理で、この道理は即ち宇宙の原理たる一理の人間に與へられたものであることを説いてゐる。玉山講義はもともと口述を筆録したもので、敘述がやゝハッキリしない點があるが、陳器之がこれにつき質問をした朱子の答書が文集の五十八卷にのせられてゐて、この答書によると朱子の意味が更に明瞭になる。それによると「性は太極渾然の體で言語文字で説明できないが、其中に萬理を含具してゐる。此理の綱目ともいふべきものが即ち仁義禮智の四端である。この四端が未だ發れない間は性は寂然として不動であるが、而も其中に條理があり、間架があつて、一物なしとはいへない、故に外から刺戟が起れば中からこれに應じて四端が發現する。譬へば赤子が井に陥ちようとする

を見れば惻隱の情が直に起り、朝廷に参内したり宗廟に参拜したりすれば恭敬の情がすぐあらはれる如きである。かくの如く外界の刺戟にあつて中に四端の起るのは、中に衆理が渾然として具備してゐるからである。吾人の渾然たる性の中に燦然たる條理が存することを知らぬのも、畢竟この四端の發現があるからその根源があるに相違ないと逆推するのである。孟子が「乃ち其情に若^{したが}へば則ち以て善となすべし」といつた情は即ち惻隱羞惡恭敬是非の四端で、この四端のあらはれることによつて、その根源たる仁義禮智の四端があるに違ひないと逆推して人性の善なることを断定したのである。さてこの四徳は仁は慈愛の道理、義は斷制の道理、禮は節文の道理、智は分別の道理と區別されてゐるが、禮は仁の著れであり、智は義の斷裁の道理の中に藏まるから、仁と義との二つと考へることもできる。例へば春夏秋冬の四時を區別するが、春と夏とは陽の屬で、秋と冬とは陰の屬で、陰陽の二つに攝せられる如きである。かくの如く四徳は仁義の二つの對立に歸するが、更にこの對立は仁の一に一つに歸し得る。即ち禮は仁の節文であり、義は仁の斷制であり、智は仁の分別でいづれも仁の本體の一面である。例へば春夏秋冬の四時を分けるが、夏は春の長ずる時であり、秋は春の收め

る時であり、冬は春の藏する時で、春は生ずることを徳とする、長收藏は畢竟生の變化にすぎない如くである。そこで四から二、二から一に統攝されるのである。これは天地の理が、五行は一陰陽、陰陽は一太極と太極の一つで包ねられるのと同じである。」といつてゐる。さうして仁は慈愛の道理であるが慈愛によつて萬物は生ずるのであるから仁は生の徳ともいへる。そこで玉山講義には「仁は是れ箇の生の意思だ」といつてゐる。そこで玉山講義と陳器之への答書とを綜合して考へると、朱子は宇宙萬物の生成は太極の一理が動いて陰陽の兩儀を生じ、兩儀が更に五行を生じ、二氣五行の交感によつて萬物化生するもので、人もこの生々過程の一現象で人の本性の中に太極の理が具備してゐるものと考へ、人に惻隱・羞惡・恭敬・是非の四端が存することによつて逆つて人に仁義禮智の四徳が存するものと推定し、更にこの四徳を仁義の二つに、又更に仁の一字に還元して之を太極の理の現れと見たものだと考へられる。さうして宇宙の生々はこの仁即ち慈愛のあらはれと見て仁を「生の意思」と解釋したもので、この生々の理を完成するために如何にあるべきかを判斷することが義の斷制であり智の分別であつて、社會に處して調和を保持しつゝ自らを全くする所以が禮の節文

であつて、四徳は畢竟仁即ち愛の理、生の意味に外ならぬと考へたのである。かくのごとく宇宙の理は生であり仁であるが、然しこの生の理があらはれて物を生ずる際には理と同時に氣が働いて形を興へる。さうしてこの形氣の拘束によつて物欲が起つて理を蔽ふことに成る。そこで玉山講義にはいふ。

天のこの人を生ずるや、之に與ふるに仁義禮智の理を以てせざるなし。但しこの物を生ぜむと欲すれば必ず須らく氣ありて、然して後此物以て聚りて質をなすあるべし。而して氣の物たる清濁昏明の不同あり、其清明の氣をうけて物慾の累なければ則ち聖となり、其清明を稟けて未だ純全ならざれば則ち微ましく物慾の累あるを免れざるも能く克ちて之を去れば則ち賢となる。其昏濁の氣を稟け又物慾の蔽ふ所となりて去る能はざれば則ち愚となり不肖となる、是れ皆氣稟物慾の爲す所にして性の善は未だ嘗て同じからずんばあらざるなり。堯舜の生ずるや受くる所の性も亦是の如きのみ、但其氣稟清明、自ら物慾の蔽なし、故に堯舜たるのみ、初めより性分の外に増益する所あるにあらざるなり。

といつて理性に對し氣稟性を説いてゐる。この理と氣との關係につき、朱子は又「天地の間、

理あり氣あり、理なるものは形而上の道也、物を生ずるの本也、氣なるものは形而下の器也、物を生ずるの具也、是を以て人物の生ずる必ず此理を稟けて然して後性あり、必ず此氣を稟けて然して後形あり、其性と其形と一身をはなれずと雖ども、然れども道器の間分際甚だ明かにして亂るべからず」(文集五十八、答黃道夫書)といつてゐて理と氣とは全然別の存在であるが如くに見られる。そこで朱子の哲學は理氣二元論だと主張する學者もある。然し又一方では「所謂理と氣とは此れ決かたず是れ二物、但し物上にありて看れば則ち二物渾淪として分開すべからず、然れども二物の各一物たるを害せざる也、若し理(論)上に在つて看れば則ち物はあらざるも已に物の理はあるべし、然れども亦た其理(論)としてあるのみにして未だ嘗て實(際)にこの物あらざる也、大凡此等の處を看むとすれば只太極圖の熹が解する所の第一段を看れば即ち意思(意味)を見む」(文集四十六、答劉叔父書)といつてゐて、太極圖說解には「太極は形而上の道也、陰陽は形而下の器也、是を以て其著あるもの(現象)より之を觀れば則ち動と靜と時を同じくせず、陰と陽と位を同じくせざるも、太極はあらざるなし。其微なるもの(太極)よりして之を觀れば則ち冲漠無朕なるも、動靜陰陽の理は已に悉く其中に具

るべし。然りと雖ども之を前に推せば、其始の（理と氣との）合するを見ず、之を後に引けば其終の（理と氣との）離るゝを見ざるなり」といつてゐるのを綜合すると、朱子は形而下の器即ち現象界の萬物にはすべて理と氣とが密合してゐて離れることはないが、かゝる現象の存在するためには之を前に推して原因に溯ると、先づ其始に現象の生々される理由があるべきで、此理由は即ち形而下の形をとらない前のものであるべきだから、單なる理としての存在で氣と結合しないものだ^{と考へてゐるものと解釋すべきである}。従つて朱子は矢張り理一元論者で理と氣との二元對立は形而下に下つた現象についていつた言葉である。然しこの一元の理なるものは實際上吾人の經驗以上のもので、たゞ論理的に逆推した理論的の結論である。この逆推法は玉山講義に於いて惻隱・羞惡・恭敬・是非の四端から仁義禮智の四徳の固有を逆推して人性を善なりと結論し、更に四徳を仁義の二徳に還元し、又之を仁の一理に還元して遂に太極の理と仁とを一つと見たのと同じ論法で、朱子の推論はいつも斯の如きものであつたものと思はれる。さうしてその推論の形式から見ても、又人性を仁の一字に包括し得ると見た結論と對照して見ても、朱子の宇宙觀は理一元論でなければならぬ筈である。但し純

粹の一理がどうして理氣の對立する現象になるかは満足な説明が與へられて居ない。恐らく朱子は形のない水が氷と成つて固形體に成るやうにでも考へて居たのであらう。それは兎も角も形をとる現象には理と氣とが密合して居て離れることがない。人間も亦此現象の一つであるから理をうけた理性或は本然性と氣をうけた氣稟性とがあつて氣稟の拘束によつて本然の性がくまされてゐるから、氣稟の拘束を脱して天理の本然にかへさなければならぬ。ここに朱子の道徳説が起る。そこで玉山講義はまたいふ。

蓋し古今聖愚此一性を同じくすれば則ち天下固より二道あるべからず、但篤信力行すれば則ち天下の理至難なるありと雖ども猶必ず至るべし。況や善は乃ち人の本より有せる所にして之を爲す難からざるをや。然れどももし氣稟昏愚にして物慾深固なれば則ち其勢順且つ易しと雖ども亦須らく勇猛力を著け痛切功を加へて然る後以て其初に復るべし。……諸君宜しく日用の間につき便ち著實に功夫を下して始めて得べし。中庸にいはゆる「徳性を尊ぶ」とは正に之をいふ也。然れども聖賢の人を教ふる、始終本末循々序あり精粗巨細遺すあるなし。故に才ちかに徳性を尊べば則ち箇の「問學に道みちる」の一段の事あり。中庸に曰

く「君子は徳性を尊びて問學に道る、廣大を致めて精微を盡す、高明を極めて中庸に道る、故を濫ねて新しきを知る、厚きを敦へて禮を崇ぶ」と。蓋し道の體たる其大外なく其小内なく一物としてあらざるなし。故に君子の學は既に能く徳性を尊んで其大を全くすれば便ち須らく問學に道りて以て其小を盡すべし。その「廣大を致め、高明を極め故を濫ねて厚きを敦ふ」といへるは則ち皆徳性を尊ぶの功なり。その「精微を盡し、中庸により、新しきを知りて禮を崇ぶ」といへるは則ち皆問學に道るの事なり。學者こゝに於いて固より當に「徳性を尊ぶ」を主となすべし、然れども「問學に道る」ことも亦其力を盡さざるべからず。要するに當に之をして交、相滋益し互に相發明せしむれば則ち自然に該貫通達して道體の全に於いてかくるところなかるべし。

之によると朱子の修養法は「徳性を尊ぶ」と「問學に道る」との二端をいでない。「徳性を尊ぶ」ことは我心固有の性を保持することで、語をかへていへば「存心」である。「問學に道る」とは學問研究をすることで、他の語でいへば「致知」である。そこで中庸章句の註には「徳性を尊ぶとは心を存して道體の大を極むる所以也、問學に道るとは知を致めて道體の

細を盡す所以也」と註してある。

そこで朱子は「存心」の重んずべきを説いて「心若し存せざれば一身便ち主宰なし」(語類十二)といひ又「聖賢千言只人の本心を失はざらむことを要す」(同上)といつてゐる。さうして又「存心とは別に事物を以て心を存するにあらず、孔子の居處恭しく、事を執るに敬しみ人と與に忠あるといへる便ち是れ存心の法」(同上)といひ、又「敬あれば則ち天理常に明かにして自然に人慾懲窒して消治す」(同上)などといつて敬を以て存心の工夫としてゐる。

次に「致知」とは大學の「格物致知」のことで、大學章句の補傳に之を説明して「凡て天下の物について已に知れる理によつて益、之を窮めて其極に至らしむる」ことだといつてゐるが、天下の事物にはすべて一理が存して之を窮極して我知を擴充することが致知であるから、致知の對象は頗る廣汎で、日常吾人が遭遇するすべての事件が皆その對象と成り得る筈であり、讀書も亦その一と見らるべきである。然るに讀書に對して朱子に二様の意見があらはれてゐる。即ち語類卷十には、

學問は自家身上切要の處について理會すれば方に是し。那の讀書は已に是れ第二義。

讀書已には是れ第二義、蓋し人生るれば道理合下まさ完具すべし。讀書にもとむる所以は、蓋し是れ未だ曾て經歷し見ざる多し、聖人は是れ經歷し見得たる許多し、所以ゆゑに冊上に寫して人に看せしむ。今書を讀みて許多の道理を見得むことを要もとむるも、理會し了すれば又皆是れ自家身上に合下まさ元より有るもの、是れ外面より旋添し得來れるにあらず。

などいつて讀書を第二義といつてゐるが、文集六十三答孫敬甫書には、

大學いふ所の格物致知は只是れ箇の題目を説き得たるのみ。もしその實に従事せむことを欲せば須らく更に博く經史を考へ事實に參稽し、吾胸中をして毫髮の疑なく、方に知止まりて定まれる地位あるに到らしむべし。然らずんば只是れ箇の通ぜざるなきの意象を想像するのみにして、其の實は未だ必ずしも通ぜざるなり。近日禮書を修めてこの意を見得て頗る分明なり。此れ禮書を修むることは是れ格物致知にして尤も切實なるを以てなり。

といつてゐて、前者が讀書を第二義だといやしめて居るのに對し後者は讀書研究を格物致知の尤も切なるものと稱揚してゐる。これは誰が考へても明瞭な矛盾といはねばならぬ。さうして後者に於いて「近日禮書を修めてこの意を見得た」といつてゐるのは、彼が六十七歳禮書を修めた時にあたることも想像されるから、前者は比較的若い時代の考へで後者はその晩年の考へであらう。凡て學問は理義を悟ることが大切だと主張した第一期の思潮は前説にあてはまり、六經の研究に潜心して禮書の修纂に孜々として居た第三期の傾向は後者にあてはまる、この點から考へても致知の工夫として、讀書を重視したのはその晩年説であるに相違ない。

二 讀書法

たとひ早晚によつて程度の差はあるとしても朱子が始終讀書を重んじたことは争はれない。さうして屢々讀書法について語つてゐる言葉が文集や語録にあらはれてゐる。そこで朱子學説を敘し終つたついでに朱子の讀書法について一言しよう。

朱子が讀書法を説いたところは非常に數多いがその要は文集七十四にのせられた讀書之要と題する一篇につきてゐる。これによると讀書の法は、(一)順序に循つて漸進すること(二)熟讀して精思することとの二項に歸する。順序に循つて漸進するといふのは順序を逐うてよむ

ことで、易きより難きに向つて進むことである。そこで彼はこの次第を諭して先づ近思録をよみ、次に四書、次に六經に進めと教へた。

近思録好く看よ、四子は六經の階梯、近思録は四子の階梯（語類百五）。

といったのがそれである。彼は近思録について四書をよむことをすゝめたが、四書の中にも又順序がある。そこで彼は又いふ。

學問は須らく大學を以て先となすべし、次に論語、次に孟子、次に中庸（語類十四）。

某は人の先づ大學を讀んで其規模を定め、次に論語を讀んで其根本を立て、次に孟子を讀んで其發越を觀、次に中庸を讀んで古人微妙の處を求めむことを要す（語類十四）。

既に四書をよめば次に六經を治むべきであるが、六經の内でも易と春秋とは讀みがたいとして先づ四經をよむべしと教へてゐる。

上古の書、易より尊きはなく、中古書を得る、春秋より大なるはなし、然れども此兩書は未だ看易からず（學的上）。

孔子晩にして易を好む、見るべしこの書卒に理會しやすからざるを。春秋易の如きは都て

是れ極めて看難きの文字。聖人人を教ふる詩禮より起る。詩は是れ性情を吟詠し人の善心を感發す。禮人をして箇の定分を知らしむ、これ都て是れ身に切なる工夫。書のごときも亦看易し、大綱亦詩に似たり（全書引語類）。

之に類する語は屢々くりかへされてゐるが今一證をあげるに止める。以上は經書をよむ順序次第を教へたものであるが、それらをよむにあつて註解をいかにみるかにつき、

書をよむ順らく文義上より尋ね、次に則ち註解をみるべし（語類十一）。

學者書を讀む、先づ正文を讀み得、註解を記し得、成誦精熟して、……方に能く翫味反復して向上透る處あるべし（同上）。

といつて先づ正文をよみて、次に註解をよむべきことを教へ、更に進んで、

傳註たゞ古註は文を作さざるも却てよく看れば、只經句に隨つて分説して經意を離れず最も好し、疏亦然り（同上）。

といつて古註を推賞してゐる。朱子とその門下生に向つて自分の集傳をよむよりは先づ古註をよめとすゝめたこと（語類八十）及び五經註疏中特に周禮の疏がよいとほめたこと（全書六）

などは彼が如何に古註及び註疏を重んじ之を精讀してゐたかを物語るものである。彼は當時の註解が學者をして自ら翫味し熟考する機會を與へないほどに説明しすぎてゐるのを疾んで、先づ古註によつて文義を解し自ら翫索することをすゝめたものである。朱子が讀書法の第二として熟讀精思をすゝめるのもその意に外ならぬ。

熟讀精思とは又分けて二項と考へることができる。熟讀とは多讀をさけて叮嚀によむことであり、精思とは深くその意味を考へることである。朱子はまたこの二項を虚心涵泳と切己體察ともいつてゐる。

學者書を讀む、須らく斂身正坐、緩視微吟、虚心涵泳、切己體察すべし（語類十二）。

讀書須らく是れ虚心切己なるべし。虚心なれば方によく聖賢の意を得べく、切己なれば則ち聖賢の言虚説と爲らず（同上）。

虚心切己、虚心なれば則ち道理を見る明かにして、切己なれば則ち自然に體認得べし（同上）。

などあるのがそれである。虚心涵泳とは先入見をすてて文章を味ふことであり、切己體察と

は己の體驗に照し省察することである。前者は文學を味ふ態度であり、後者は道德的に考察することである。この二項につき清儒曾國藩は巧に之を説明してゐる。曰く「朱子の讀書法はこの二語が最も精妙である。自分がかつて孟子の離婁章に『上道に揆るなく、下法を守るなし』といふ句を讀んで一向興味を感じなかつたが、近年色々の體驗を得てから之をみると『上に立つ役人は常に道に合するや否やを揆り考へて事を處理しなければならぬが、下の人はたゞ法を順守すべきものだといふ意味がよく解つた。もしすべての人が道に合ふか否かを考へて議論ばかりするやうでは世は治まるものでない』。かういふ風に自己の體驗に照して文章をよむことが切己體察である。次に涵泳の二字は悟りにくい語であるから譬を以て説明すると、涵とは春雨が花を潤し河水が稻に漑ぐ様なものである。もし雨が多すぎれば花を破り少なすぎればしみ込まない、丁度よい加減に降れば花は生々としてくる。河水も多すぎれば稻を害ふし、少なすぎれば稻は枯れる、丁度よい加減の水が漑がれると稻はよく生成する。泳とは魚の水に遊ぶが如く人が足を濯ふやうな氣持をあらはす、もし讀者が自己の心を花の如く稻の如く魚の如く足を濯ふが如くに考へ書を雨の如く河水の如く又水の如く考へら

るれば涵泳の氣持が判るであらう」(曾文正公家訓上)と。以上は曾國藩の説明であるが、これ
でよく「切己體察」と「虚心涵泳」との意味が判る。即ち「切己體察」とは己の體驗に照し
て文章の意味を會得することであり、「虚心涵泳」とは自己を虚くして上スベリもせず又穿
鑿にも陥らず文意をありのまゝに味ふことである。朱子は實に、(一)讀書の順序を間違へない
こと、(二)自己の體驗に照して考察すること、(三)自己を虚くして文章を如實に味ふことの三方
法によつて讀書し研究をすゝめた人であつた。朱子の著作を年代順に排列して見ると彼は自
ら主張した通りの順序で研究をすゝめて居り、大學や中庸の解釋に新しい見方をしたのは切
己體察の結果であり、又詩の集傳に於いて詩人の心持と序との撞着を觀破して序をすてて解
釋を試みたり、尙書を讀んで孔傳が西京の文に似ないこと、今文と古文との間に文體の一致
を闕いてゐることを發見したのは恐らく虚心涵泳の結果であらう。これらは彼が實際に右の
三方法を行つた證據であるが、彼は又これを以て其門弟子を教へたらしい。甲寅行宮便殿奏
劄に、

學を爲すの道は窮理より先なるはなく、窮理の要は必ず讀書にあり、天下の理を窮めむと

欲して經訓史冊に即いて之を求めざるは則ち牆に向ひて面して立つが如きのみ……此數語
は皆愚臣平生學を爲し艱難辛苦して己に之を試みて效あり。竊に意ふに聖賢復生するも人
を教ふる所以は此の如きに過ぎざるなり。

といつてゐるのは、實に自ら欺かざる告白である。

第六章 科舉改革意見

以上朱子學説の大略を敍し終つたから、こゝに科舉に關する意見についてのべる。科舉とは官吏登用の試験で其制度の善否は世道人心に關係すること頗る大きなものがあつて、其改革意見は直ちに教育意見の一端と見らるべきである。宋は國初以來詩賦論及び帖經墨義を以て官吏登用の試験にしてゐた。然るに仁宗の慶曆年間に范仲淹が科舉の試験を改正して詩賦を退けて策論を主とし帖墨をやめて大義を問ふことにしようとした。蓋し范仲淹の考へでは文學の士をして政治に注意し經學の士をして譜記學問をすてて精神を把握せしめるやうに欲したのである。然るに當時一般の人々は舊慣にとらはれて變更を喜ばず、實施を見ないうちに范仲淹が職を辭してそのまゝと成つてゐた。

其後神宗が即位するに及んで科舉の弊害を痛感し矯正の法を計つた。そこで熙寧元年（一〇六八）程顥は請修學校尊師儒取士劄子を奉つて改正意見を具陳した。程顥の意見は、天子

が先づ近侍の賢儒朝廷の官吏及び州縣の官吏に命じて學徳兼備の學者を搜訪せしめてこれを學校に配置し、然るのち毎歲學校の師と地方官吏とが立會ひて學問ができ行の立派な人物を推薦して州の學校に升して之を二年間教育し、州の學校では又師と郡主とが立會ひて經義性行材能の三面から有能の人を大學に推薦せしめ、大學では各州から集まつた人物を一年間教育して、其中の賢能者を朝廷に於いて論選して之を選士と名づけ、朝廷ではこれら選士に經義を以て其學問を試験し、更に職事を見習はしめて其材を觀、然る後その差等を論じて官吏に採用する。さうしてその成績のよくないものは推薦者に責任を負はしめるやうにすれば本當の人材が集められて教化が明かになり風俗も改まるといふのである。一體宋は國初以來學校を立てて教育の振興に力をそゝいでゐるが、仕進の道は科舉にあつたので學校はたゞ太平を修飾する飾り物といつた傾があつた、程顥の此の改革案は學校と科舉とを結びつけて頗る名案であるが實施はされなかつた。さうしてその翌年王安石が參知政事と成るに及んで、新法を立てて庶政の改革を斷行したが、同時に科舉の制度にも手をつけ、所謂三舍法が立てられた。三舍法とは大學を増修して三舍を設け、初めて入學したものは之を外舍に入れ、毎月

試験を行つてその成績によつて次第に上舍にうつし、上舍の試験も又三等に分ち、上等は殿試をせず官吏となし、中等は禮部の試験を免じ下等は解試を免ずるといふ組織で、教科書には王安石及び其子王雱、及び呂惠卿の編纂にかゝる詩書周禮の三經新義及び字說を課することにしたのである。安石の三舍法も科擧と大學とを結びつけて大學の意義を重からしめた點はよかつたが、その三經新義及び字說なるものが自家獨特の僻說に満ちてゐて學者の反對が多かつた。

そこで哲宗の元祐元年（一〇八六）王安石が卒するとすぐ三舍法が廢止されて新たに十科擧士法が立てられた。十科擧士法とは、師表・獻納・將帥・監司・講讀・顧問・著述・聽訟・治財・能讞の十科に分けて、侍從以上の人をして毎歲各三人づつを保擧せしめ詩賦經義の兩科につき試験したものである。此時程頃は徒に試験で競争せしめることは人物を教養する所以でないから試験を廢して課目となし成績の高下を定めず禮義を以てお互に尊敬せしめるやうにしなければならぬといつてゐるが、これによつて想像しても十科擧士法が必ずしも缺點なき制度とは思はれない。そこで其後間もなく神宗の舊制を紹述せよといつた議論が出て三舍法が

復活されたが、徽宗の宣和中に至つて之が廢せられ、南宋の高宗の代に入つて復十科擧士法となり、次で秦檜の活躍した時代になるとまた三舍法が用ゐられた。かくの如く科擧は教育上に重大な意味をもつものであるが、宋の時代には朝令暮改殆ど定見がなかつたやうに見える。これには勿論其半面に於いて學派朋黨の争ひも原因をなしてはゐるが、又一面からいへば科擧の制度の缺陷によるものといはねばならぬ。さうして朱子も亦之に對する意見を持つて居た。

朱子の意見を最も詳しくかいて居るのは文集六十九に收載されてゐる「學校貢擧私議」と題する一篇である。朱子は其劈頭に於いて、

古の學校選舉の法は郷黨に始まり國都に達するまで之を教ふるに徳行道藝を以てして其賢者能者を興す、故に士定志ありて外慕なく蚤夜孜孜として唯徳業の脩まらざるを懼れて爵祿の至らざるを憂へず、夫子の所謂「言尤寡く行悔寡く、祿其中にあり」、孟子の所謂「其天爵を脩めて人爵之に従ふ」ものは蓋し此をいふなり。若し夫れ三代の教は藝を最下となせるも、然れども皆猶實用ありて闕くべからず、その法制の密又以て治心養氣の助となし

て道德の歸に進ましむるに足れり。此れ古の法の能く人材を成して風俗を厚くし世務を濟ひて太平を興せし所以なり。今の法は然らず、郷舉ありと雖も其人を取るの額均しからず、又大學を設くるも利誘の一途にして、監試漕試附試は詐冒の捷徑、以て其奔趨流浪の意を啓く。其教ふる所以のものは既に德行の實に本づかずして所謂藝なるものも又皆無用の空言、是を以て人材日に衰へ風俗日に薄く、朝廷州縣一事の疑ふべきあるときは則ち公卿大夫官人百吏愕眙相顧みて出づる所を知らず、是れ亦其教を爲すの得失を驗すべし。

と當時の學校科擧の制度を攻撃した後、その改革案を提示して、

嘗て之を思ふ、必ず時に乗じ制を改めて先王の舊に復して今日の俗を善くせむと欲すれば則ち明道先生熙寧の議の如くにして然る後大に其本を正して盡く其末流の弊を革むべし。若し未だ暇あらずといはば則ち諸州の解額を均くし以て其志を定め、德行の科を立てて以て其本を厚くし、詞賦をやめて諸經子史時務の年を分ちて以て其業を齊へ、又治經者をして必ず家法を守らしめ、命題者をして必ず章句によらしめ、答義者をして必ず經文を通貫し衆説を條擧して斷ずるに己が意を以てせしむべし。學校は則ち實に道德ある人を遴選し

て専ら教導以て實學の士を來さしめ、解額舍選謬濫の恩を裁減して以て利誘の塗を塞がしめば則ち定志ありて奔競の風なく實行ありて空言の弊なく、實學ありて用ふべからざる材なからむ。此れ其大略なり。

といひ更にその下に改革の理由を詳説してゐる。第一に諸州の解額を均等にするのは各地方の應試者の便宜を均等にして遠方へ受験に出懸ける弊を矯めようとしたもので、第二の德行科を立てるのは有徳の人をあげる精神で、その方法は解額の四分の一をさいて其定員となし、地方の縣令等をして人物のよい人を搜訪せしめて大學に入れ、其學費を支給して修養につとめしめ、然る後大小の職事を見習はしめて其尤異なるものを選んで直ちに官をさづけ、その餘は殿試に應ぜしめ、猶及第しないものは更に大學にとゞまらしめて勉強せしめ、次年の試験をまたしめるといふ方法で、その教育方針は實行を貴んで空言をさけしめることを主とする。第三に詞賦を廢する理由は詞賦は空言の尤も甚しきもので設教取士の精神にかなはないからである。この科はかつて王安石によつて廢せられたが後又復興された。それは詞賦を廢したのが悪いのでなくそれに代つた王氏の三經新義が不可なかつたのである。第四に諸經子

史時務の年を分つのは、六經が缺けて完全しないから之を諸子及び歴史で補ひ、更に當時に必要な時務を加味して完全を期するのであるが、それは期年の間に學びつくすことが出来な
いから、經書を分つて、(一)易書詩科、(二)周禮儀禮及二戴禮科、(三)春秋及三傳科の三科となし、
各科共に學庸論孟を附屬せしめ年を定めて試験し、次に諸子を分つて四科となして其一を選
んで論を作らしめ、諸史及時務について策をかゝしめるといふ方針であつて、經學には家法
を重んずべきことをのべ如何なる註釋によるべきかを詳論し出題答案に關して細かな注意が
拂はれてゐる。その、

古大學の教は格物致知を以て先となし其考校の法又九年知類通達強立反らざるを以て大成
となす。

といつて大學と學記を結びつけて考へてゐる點、及び經典の缺佚を諸子史籍によつて補はう
としてゐる點は彼の儀禮經傳通解の編纂と同一精神に本づくもので、詞賦の空言を排して徳
行科の設立を主張してゐるのは大學の先づ其身を脩めて後天下國家を治めるといふ考に本づ
くもので、朱子學說の具體的實現法と見るべきであらう。

この科舉制度の改革案は朱子一家の私議で勿論實行にうつされたわけではない。況して朱
子の晩年は王淮の道學排斥があり、韓侂胄の僞學排斥があつて其職をさへ褫脱せられ、其卒
するに及んでは僞徒が僞師の葬を送るものとして會葬者さへ檢束された程で、その意見が行
はれる筈もない。しかしその後韓侂胄が誅せられるに及んで文公と謚せられ、其四書集註は
學官に列せられ、次で理宗の世に及んで周張二程とともに孔廟に従祀せられて、朱子の地位
が次第に高まるとともに、その門人蔡沈は朱子の遺業をうけついで書經集傳を完成し、黃幹
は儀禮經傳通解を補足し、黃幹の門人何基再傳の弟子金履祥は論孟集註考證を著し、又黃幹
門下饒魯の再傳弟子陳澧は禮記集説を著し、又朱子の門人詹體仁の學をついだ眞德秀は大學
衍義を作り、其他の門人後生もその著作に實踐に朱子の發揚につとめたので朱子學は遂に一
世を風靡するやうに成つた。殊に蔡沈の書經集傳と陳澧の禮記集説とは、朱子の周易本義、
詩集傳及び胡安國の春秋傳と合せて五經の新註と稱せられ、舊註に代つて尊重せられるやう
になつた。其後宋が亡んで元が起り、元が亡んで明が起り、王陽明の學が一時を風靡するま
で朱子學は儒教の嫡傳として尊重せられ、貢舉學校皆之によつて試験をすることに成つて其

朱子

影響は實に大きなものがあつた。

陽明

第一章 王陽明略傳とその著作

一 略傳

王陽明、名は守仁、字は伯安、陽明はその號である。浙江餘姚の人で、其祖先は晉の王羲之から出てゐる。明の憲宗の成化八年（西紀一四七二）に生れ、五歳の頃まで言ふことができなかったが諳記力がつよく、言ひはじめるとすぐその祖父が讀んでゐた本を諳誦して家中の人をおどろかしたと傳へられてゐる。又幼少の頃から學書を嗜み、後に彼自ら人に語つて「吾始めて書を學ぶ、古帖を對模してたゞ字形を得たるのみ、後筆輕々しく紙に落さず、凝思靜慮、形を心に擬すること久しくして始めて其法に通ず、その後明道先生の書を讀んで吾

王陽明略傳とその著作

字を作る甚だ敬、是れ字の好きをもとむるにあらずといへるを見て古人つねに心上にありて學ぶ、此心精明なれば、字も亦自ら好かるべきを悟れり」といつてゐるのを見ても餘程骨を折つて習つたものと思はれる。今其家書の残つてゐるものを見るに書法遒麗文徵明の壘を摩して流石に王羲之の裔孫だと肯かされる。

孝宗の弘治二年（一四八九）十八歳の時婁一齊に師事して宋儒格物の學をきゝ聖人も學んで至り得るものだと知つて日夜勉強したが、後に聖賢は自ら天分があつて勉強だけで到達し得ないだらうと考へるやうに成り、遂に辭章の學に轉じた、かくて詩文に力を入れること數年、弘治十一年に至つて、文學では本當の道に通ずることができないのを曉り、再び講學に心をよせるやうに成つた。或る日朱子が光宗に上つた疏を讀んで「敬に居り志を持するを讀書の本となす、序に循つて精を致すを讀書の法となす」といふ句に至り、從來の講求が徒らに博渉をつとめて順序を誤つてゐたことを悟り、これから特に朱子の讀書法に従つて勉強した。さうしてその翌十二年春には會試に第二位を以て及第し、十三年に刑部雲南司主事を授けられたが、矢張り聖賢は天分によるもので努力では達せられるものでないといふ考が起り、

遂に山に入つて仙道を修業して見たいと考へ出した。

十四年（一五〇一）命を奉じて江北の獄を讞はいてかへるさに九華山に遊び無相、化城諸寺に宿る。この時道士蔡蓬頭にあつて教を請うたが、まだ早いといつて教へない、再三之を請ふと汝は未だ官相を忘れ得ないから駄目だといつて笑つて居る。翌十五年病と稱して越にかへり、陽明洞中に室を築いて導引術を行つてみたが、結局精神をもてあそぶのみで益のないことが判つた。そこで世をすて、隠逃しようと思つたが祖母のことが忘れられない、色々考へた揚句この感じこそ子供の時から存するもので、人間の本性だと悟つた。明年錢塘の西湖にうつつて南屏虎跑の諸刹を往來して禪僧と交つたが得るところがない。そこで遂に仙釋の非を悟つて之を絶ち、再び心を儒教に潜めるやうに成つた。

武宗の正徳元年（一五〇六）封事を上つて言路を開くべきをいひ、權宦劉瑾の忌む所となつて、遂に龍場驛丞に貶謫せられた。龍場は貴州の西北萬山叢棘の中にある瘴癘の地で、當時未だ文化が開けず、常に夷人の間に居つて言語さへ通じない。そこで自ら石塚を作つて之に住し、日夜その中に端坐して精神修養につとめ、もし聖人がかういふ地位におかれたら何

をなすだらうと考へて見た結果、遂に格物致知の旨が判つた。乃で自己の悟得を五經の言に照し合せて見ると一々脗合する。之に因つて遂に五經臆説を著した。その後龍場に居ることしばらくで土人も段々心服して來たので遂に龍岡書院を建て、之にすまつたが、後に又提學副使席元山の聘を容れて貴陽書院の主となり、こゝに始めて陽明の知行合一説が唱へ出された。之が陽明學問の出發點である。時に正徳四年、陽明は三十八歳であつたといふ。年譜によると初め席元山は陽明に對し朱陸の異同について意見を叩いたが、陽明は之に答へずその悟る所をつげた、翌日又知行の本體を説明して、五經諸子の文を引いて之に諭すと、席元山は大に省悟する所があつて遂に師禮を以て之に事へ書院を修葺して之を聘したのだといふ。陽明の弟子徐愛が知行合一の訓を尋ねたのも此頃のことだとされてゐる。

正徳五年（一五一〇）劉瑾が誅せられるに及んで再び起用せられて廬陵縣の知となり、其後累進して九年四月には南京鴻臚寺卿となつた。此間特に湛甘泉と親密に成つて互に相切磋し、門生に對して靜坐をすすめたらしい。年譜に彼の言を引いて「昔貴陽にありて知行合一の教を擧げしも紛紛異同入る所を知るなし、茲來乃ち諸生とともに僧寺に坐して性體を自悟

せしむ」といひ、又辰中諸生に與へた手紙に「前に寺中にありて云へるところの靜坐の事は坐禪入定を欲せしにはあらず、蓋し吾輩平日常物のために紛拏せられて未だ己を爲むることを知らず、此を以て小學の放心を收むる一段工夫を補はむと欲せるなり」（文錄一）といつたのはその證左である。

正徳十一年（一五一六）都察院左僉都御史となつて南贛を巡撫し、翌年漳南の賊を平げ、次で横水桶岡の諸賊を平げ、又其翌十三年（一五一八）には三泐を征し、大帽洲頭の諸寇を平げて、兵馬倥傯寧處する暇もなかつたが、薛侃歐陽德等二十餘人の門人は常に左右に侍して講習を怠らなかつた。陽明が社學を立て、「訓蒙大意」を著し、古本大學を刻し、朱子晚年定論を著し、門人薛侃が傳習錄三卷を刻したのも皆この十三年ごろの事である。

十四年（一五一九）敕を奉じて福建の叛軍を戡定せむとして豊城に至る。偶寧王宸濠の反くをきいて直ちに吉安に反り義兵を起して之を討つて、其捷を上奏した。然るに權臣太監張忠と許泰とは其功を嫉んで捷書を抑へ、帝をして親征せしめようとした。そこで陽明は上書して親征を諫止したが二人はまた之をも抑へて陽明が反しようとしてゐると讒言した。併し

幸に太監張永の辯護で免れることができて江西巡撫の官をつゞけることができた。これは陽明生涯中特筆すべき事件で彼は戦陣の間にあつても猶門弟子とともに講學修養を懈らず、象山文集に序文をかき、又象山の子孫を表彰し、聖賢子孫の例にならつて其差役を免じ、俊秀なる子弟は之を大學に送つて勉學せしめるやうにした。さうして彼は此間に得た體驗によつて致良知の説を唱へ出した。この致良知説は陽明最後の歸結であつて「この三字こそは眞に聖門の正法眼藏で、往年未だ多少疑ひを持つてゐたが、今は多くの事件に遭遇して只此良知の具足せざるなきを知つた。譬へば舟を操りて舵さへ得れば平瀾淺瀬は意の如くならざるなく、たとひ颯風逆浪にあつても舵柄さへ手にあれば没溺を免れ得るが如くである」といひ、又「某此良知の説に於いて百死千難中より得來る」といひ、又「我がこの良知の二字は千古聖聖相傳の一點の滴骨血なり」などいつてゐるのを見てもその自信抱負の大きいことが知られる。

陽明が始めて致良知を唱へ出したのは正徳十六年（一五二一）陽明五十歳の正月であるが、この年の四月には孝宗が崩じて世宗が立つに及び陽明の功が認められて南京兵部尙書に陞さ

れ、新建伯に封ぜられた。かくて陽明の名は天下に轟き門人も多く集まつたので、嘉靖三年（一五二四）正月には稽山書院をひらいて講を起し、八月には門人らを天泉橋上にあつめ宴を張つた。時正に中秋月白きこと晝の如くで、門人百餘人席に侍して頗る盛宴であつたといはれてゐる。さうして此年の十月には南大吉が傳習録の續篇を作つて之を上刻し、翌年十月陽明書院が越城に建てられ、その翌翌六年四月には門人鄒守益によつて陽明文録が出版された。この數年間が陽明に取つて最も花やかな時代であつたらう。

しかるにその年の五月には原官に都察院左都御史を兼ねて思田の賊を平定するやうに命ぜられ翌年之を平げたが、その凱旋の途上病を得て江西の南安に至つて遂に絶命した、時に嘉靖七年（一五二八）年五十七歳であつた。年譜にその臨終を記して、

十一月丁卯、先生南安に卒す。是月二十五日梅嶺を踰えて南安に至る。舟に登る時南安推官門人周積來り見ゆ。先生起ち坐して咳喘やまず、徐ろに言ひて曰く、近來進學如何と。積政を以て對へ遂に道體恙なきかを問ふ。先生曰く、病勢危亟なり、未だ死せざる所のものは元氣のみと。積退いて醫を迎へて診藥せしむ。二十八日晚泊す。何の地たるかを問ふ。

侍者曰く、青龍鋪なりと。明日先生積を召し入れ、しばらくにして目を開き視て曰く、吾去せむと。積泣下り、何の遺言ぞと問ふ。先生微哂して曰く、此心光明亦復何をかいはん

と。頃之にして瞑目して逝く。二十九日辰刻なり。

偉人の最後を叙し得て目に見るやうに思はれる。

二 學説の變遷

以上は陽明先生年譜及び傳記を合採した略傳であるが、之によつて陽明の學説が年とともに次第に發展して來た徑路が看取できる。陽明の門人錢德洪は尤も簡明にその變遷を説明してゐる。

先生の學凡そ三變、其教をなすも三變せり。少時辭章に馳騁し、已にして二氏に出入し、繼いで乃ち夷に居り困に處して豁然聖賢の旨を得るあり、是れ三變して道に至れるなり。貴陽に居たる時は、首として學者とともに知行合一の説をなし、貴陽より後は、多く學者に靜坐を教へ、江右以來始めて單に致良知の三字を掲げて直ちに本體を指し、學者をして

言下に悟あらしむ、是れ教も亦三變せるなり（文録序説）。

之によると陽明の一生を學の時代と教の時代とに二分して、學の時代に於いても思想が三變して居り、又教の時代に於いてもその主張が三變して居るといふのである。即ち二十一歳から二十七歳まで七年間は辭章の學に心を寄せた時代であり、二十八歳から三十三歳まで六年間は釋老の學に迷つた時代であつて、三十四歳湛甘泉とともに聖學の倡明を以て自活するやうに成つてから以後は歸儒の時代である。さうして歸儒の後、三十七歳の時龍場にあつて格物致知の義を攻究して知行合一論を唱へ出した以後が立教の第一期で、三十九歳の時京師の大興隆寺に止宿して湛甘泉らとともに靜坐の修養を唱導した以後が立教の第二期で、五十歳の時江西にあつて致良知説を唱へだした以後が立教の第三期である。そこで以下章を改めて知行合一論から靜坐説、致良知説の順序でその學説の變遷の過程を説明しようと思ふが、それに先だつて陽明の著作について一言しておかう。

三 著作

王陽明の撰述は明末に種々の選輯本が出てゐるが、その尤も完備したのは王文成全書三十八卷である。此書の内容は傳習錄三卷、文錄五卷、別錄十卷、外集七卷、續編六卷、年譜五卷、世德記二卷、合計三十八卷でもと各、別行本であつたのを明の隆慶六年（一五七二）新建の謝廷傑が浙江に巡按たりし時之を合梓して學者に嘉惠したものである。

傳習錄は正徳十三年（一五一八）陽明四十七歳の時、門人薛侃が、陽明の妹婿で高弟といはれた徐愛の書きとめておいた語錄一卷と陸澄錄一卷と、自己の筆録一卷とを上梓して傳習錄三卷と題したのが抑の初である。その後嘉靖三年（一五二四）陽明五十三歳の時、門人南大吉は陽明の學を論じた書翰五卷をあつめて、薛侃の傳習錄に附加して之を續刻した。南大吉の序に「是錄は門弟子陽明先生問答の辭と討論の書とを録し刻して以て天下に示す者なり、吉宮牆の下に従遊して其この錄に於けるや朝に觀て夕に玩し口に誦して心に求む……故に逢吉弟に命じて校書して之を重刻せしめて天下に傳ふ、……嘉靖三年冬十月紹興府知府門人南大吉謹序」とあるのによつて其由來を知ることができる。薛侃の原刻本も南大吉の續刻本も現在存否を詳にせないが、一齋の傳習錄欄外書によると、一齋は嘉靖二十三年德安府に於いて再版に成つた南大吉續刻本を見てゐる。之によると南大吉の續刻本は上下二冊に分たれ、

上冊には一徐曰仁錄、二陸原靜錄、三薛尙謙錄、四答歐陽崇一書一篇及答聶文蔚書二篇の四卷に分たれ、下冊も又四卷に分たれて、第一卷には答徐成之書二篇、答儲柴墟書二篇、答何子元書一篇、答羅整庵書一篇を、第二卷には答人論學書一篇を、第三卷には答周道通書一篇、答陸原靜書二篇を、而して第四卷には示弟立志說四則、及び訓蒙大意六則を收めてゐるといふ。恐らく上冊の初三卷が薛侃の原刻の内容で、その第四卷と下冊の四卷と合せて五卷が南大吉によつて續集された論學者であらう。然るにその後嘉靖三十五年（一五五六）陽明歿後二十七年目に至つて、錢德洪は更に續錄を附加して傳習錄三卷を刊行した。錢氏の跋によると、昔し陽明の死んだとき門人等の間に語錄編纂の議が起つて各人の手録が錢德洪の手元に集まつたので之を整理しておいたが、未だ受梓されるには至らなかつた。然るに嘉靖三十四年に同門の曾才漢といふ人が錢氏の手録本に多少の増補を行つて安徽寧國の水西精舍で出版したが、その翌年夏錢德洪が湖北の蘄州に至るに及び同地の人の請をいれて、舊稿を取捨し更に中巻にも手を入れて出版するに至つたのである。續錄の内容は陳九川錄二十九條、黃直

録十五條、黃修易錄十一條、黃省曾・錢德洪・曾才漢三人の録六十九條、合計百十六條であつて、中卷の改定は南大吉續刻本の上冊の第四卷と下冊とを合併して、その内から徐成之・儲柴墟・何子元に答へた手紙五通を刪去して順序を改めたものである。現行本傳習錄は皆この錢氏の續録本の系統に出たもので、更に最後に朱子晚年定論が附加されてゐる。

文録五卷。嘉靖六年（一五二七）門人鄒守益が先生の文を輯めて出版の許可を乞うた。陽明は容易に之を賛成しなかつたが、鄒守益の熱心に動かされて遂に之を承諾し、集められた文章の三分の一を選んで之に年月を記入し錢德洪に命じて次第をたてさせ且つ手紙を遺つて自分の文章は講學明道を目指すものであるから文體を區別する必要はない、たゞ年代順にならべて意見の發達をたどり得るやうにすればよいと注意した。そこで錢德洪は之を整理して四卷となし、更に數篇を補つて附録一卷となし、すべて五卷を陽明の裁定の下に安徽の廣徳で出版した。廣徳板文録と稱するものが即ちそれであると年譜に記して居る。然し此版本は寡聞な私の目には入つてゐない。

文録五卷、別録十卷、外集七卷、計二十二卷。文録初刻本が出来た翌々年嘉靖八年陽明が

歿したとき、より完全な文集の出版が門人間の問題となつて、その後三年嘉靖十一年（一五三二）錢德洪が文録二十二卷を姑蘇で出版し、鄒守益が序文をかいてゐる。此序によると錢德洪は之を正録・別録・外集の三部に區別してゐるが、正録には陽明の講學明道の文をあつめ、別録には奏疏公移の類をあつめ、外集には詩賦及び應酬の文字をあつめたと記してゐる。現在王文成全書に編入された文録別録外集は正しく鄒守益の記する所と一致してゐるから恐らく嘉靖十一年刻本から出た本を取つたのであらう。廣徳版文録は年月順に次第して文體の區別をしなかつたらしいが、この本には文體を區別してゐるから、陽明の檢閲をへた本を多少改修したものであらうが、文章の一々に製作年代を註記してゐて、陽明の思想變遷の徑路を正確に考へ得るのは喜ばしい。

文録續編六卷。文録出版後三十年程へて嘉靖四十五年（一五六六）に又文録續編が出版された。年譜によると此書は文録が出てから後に同志の人々から遺された文をあつめて六卷を得たので、嘉興府守徐必進に屬して之を上梓せしめたもので、大體からいふと上記文録の遺漏をあつめたにすぎないが、その第一卷には大學問龍場教條など注意すべき資料を含んでゐる。

る。

年譜三卷、年譜附録二卷。陽明歿年門人等が謀り各々年と地とを區劃して資料をあつめ、鄒守益を總裁として、年譜の編纂に着手したが、その後同志は次第に凋落し、鄒守益も途中で死んだので嘉靖四十二年（一五六三）錢德洪が之を完成し、遂に胡松・羅洪等によつて考訂出版された。

世徳記一卷附録一卷。王陽明一家の傳記碑銘祭文などをあつめたもので、これ亦錢德洪王畿等の編纂に成つたものである。

以上諸書は元來は各單行本であつたが明の隆慶六年に謝廷傑が之を集刻して主文成全書と名づけた。

王文成全書は陽明文獻の集大成といふべきものであるが清の康熙十二年俞樾によつて重編せられた王陽明先生全集と名づくるもの二十二卷がある。その第一卷より第二十一卷までは文録及傳習中卷の論學書を文體によつて類別編纂したもので、此書の凡例に「先生文集舊本

講學明道する者を以て正録となし、詞章酬應する者を以て外集となし、奏疏公移を以て別録となす、……予集中に於いてたゞ體裁を分ちて支節を分たず」といつてゐるのによつて考へると錢德洪の文録を改編したものだと言へられる。但し二十二の傳習録は薛侃録だけで二十四の語録は錢德洪の續成の部分だけを殘したものである。さうして卷首に年譜一篇が附加されてゐるが、錢德洪本とは全く別のものであるから參考に價ひする。猶此外に種々選集本があるが特に紹介を要しないであらう。

第二章 師 承

陽明學說の變遷を考へる前に吾人は先づその師承について一言しなければならぬ。

年譜によると陽明は十八歳の時吳康齋の門人婁一齋に學んだ。吳康齋（西紀一三九一—一四六九）は名を與弼、字を子傳と呼んで、撫州崇仁の人、夙に程朱の學を奉じて、耕稼の傍ら諸生を教育した人で、其門人は甚だ多かつたが、特に有名なのは胡敬齋・婁一齋・陳白沙の三人であつた。中に於いて胡敬齋は其師説を墨守して異説を立てなかつたらしいが、婁一齋と陳白沙とは別に一家をなして胡敬齋と合はなかつたらしい。

婁一齋（西紀一四二二—一四九一）は本名を諒といひ字は克貞、一齋と號した。廣信上饒の人で、吳康齋につかへ入室の弟子と呼ばれ、康齋が他の門人に教へなかつたことも婁諒は盡く受け傳へてゐたといはれて居る。其著は相當數多くあつたらしいが今は傳はらぬから其學說の詳細を知るよしもないが、明儒學案には、其學は「放心を收むるを以て居敬の門とな

し、何思何慮勿助勿忘を以て居敬の要旨となした」といふから、婁一齋も亦純然たる朱子學の傳承者であつたらう。さうして陽明は最初婁一齋に學んだといふから、其學問は朱子學から始まつてゐることは疑ひを容れない。年譜に「陽明十八歳婁一齋に謁して宋儒格物の學を學ぶ」といひ、「廿一歳京師にあつて徧く考亭の遺書を求めて之を讀む」といひ、「二十七歳晦翁の光宗に上れる疏を讀み前日探討の序に循ひて精を致さざりしを悔ゆ」とあるなど、皆陽明が朱子學を治めたことを裏書するものである。

然るに陽明は三十四歳の時京師にあつて湛甘泉と相知り互に聖學の唱明に努力したといふ。甘泉は吳康齋の門人陳白沙の弟子である。

陳白沙（西紀一四二八—一五〇〇）は新會の白沙里の人で、本名は獻章、石齋と號し、初め吳康齋に學んだが後に其郷里にかへつて一家を立てた學者である。彼れ自らの言に徴すると、白沙は吳康齋の門を辭して白沙にかへるに及んで杜門出でず、靜坐につとめた結果「吾心の體」を悟つたといつてゐる。さうして彼が悟つた「吾心の體」とは如何なるものであるかといふと、彼は「人は天地と同體」といひ、又「君子の一心萬理完具す、事多しといへど

も我にあらざるなし」といつてゐて、陸象山の考に似てゐる。さうして婁一齋が彼を評して「白沙は陸子の比にあらず、陸子は理を窮めざるも、白沙は卻つて理を窮む」(明儒學案二)といつてゐるのによつて想像すると、白沙は陸象山の哲學と朱子の格物窮理説とを折中して一家をなした人の如くに見られる。

湛甘泉(西紀一四六五—一五六〇)は廣東增城の人で名を若水、字を元明と呼んで、白沙の高足である。弘治乙丑進士に及第して翰林庶吉士に選ばれ累遷して嘉靖初年には侍讀に陞り、ついで南京國子監祭酒禮部侍郎にまで進んだ人で、足跡の至る所必ず書院を建て、白沙を祠り又衡山に至つて白沙書院を立て、田五頃を寄附した程の白沙崇拜者で、其學説は自然を以て本體となし、勿忘勿助を工夫となして大抵師門に得たものが多いといはれてゐるから(理學宗傳卷二十)、大體陳白沙の學説を承けついでのもので、自然陸象山の影響があるものと考へられる。さうして陽明は甘泉が翰林庶吉士にあげられた年、京師で落ちあつて親密になり、爾來互に意見を交換して切磋し兩者の間に密接な關係が存するものと考へられる。正徳六年甘泉が南安に奉使した際、陽明が別序を作つて、

某幼にして問學せず邪僻に陷溺するもの二十年、始心を老釋に究む、天の靈に頼つて覺る所あるに因つて始めて乃ち周程の説に沿つて之を求めて得るあるが如し。顧ふに一二同志の外予を冀くるなく、岌々乎として外れて復興る。晩に甘泉湛子を得而して後吾の志益々堅く、毅然として退むべからざるが如し、則ち予の甘泉に資れる多し。甘泉の學は務めて自得を求むるものにして、世未だ能く知らず、其知れる者も且其禪たるを疑ふ。誠に禪たるは吾猶未だ得て見ず、ましてその志す所卓爾たる此の若くなれば則ち甘泉のごときは聖人の徒にあらずや云々(文錄四、別湛甘泉序)。

といつてゐるのを見ると兩者の關係の淺からぬことが判る。さうして陽明は湛甘泉と交りはじめてから朱子學をはなれて次第々に陸學に向ひ、遂に陸王學と併稱されるやうに成つた徑路を考へると、陽明を陸學に導いたのは湛甘泉であらう。そこで陸學と陽明學との關係について一瞥を試みよう。

第三章 陸子の紹述—心即理説

陸象山（西紀一一三九—一一九一）名は九淵、字は子靜、江西金溪の人で朱子と同時の後輩である。朱子の學が程門の楊龜山から出てゐるのに對し、陸子の學は程門の謝上蔡に淵源し、前者が理氣を並べ説いて宇宙の生成を説明して居るのに對し、後者は宇宙の現象を一理だと考へて居る。陸子が宇宙現象を一理の顯現と見たのは明道の考をうけついでのものであるが、彼は更に一步を進めて理を又心だと説明して心即理と説いてゐる。「宇宙は即ち是れ吾心、吾心は即ち是れ宇宙」（全集三十六、年譜）といひ、又「心は一心也、理も一理也、至當は一に歸し、精義は二なし、この心この理實に二あるべからず」（全集一、與曾宅之書）といひ、又「人皆この心あり、心皆この理を具す、心は即ち理也」（全集十一、與李寧書）といひ、又「宇宙は便ち是れ吾心、吾心は即ち是れ宇宙、千萬世の前聖人出るあるも此心に同じく此理に同じき也、千萬世の後聖人出づるあるも此心に同じく此理に同じき也」（全集二十二、雜説）

などいつたのは、皆宇宙の理を吾心と同一と考へたもので心即理の哲學觀を示すものである。蓋し宇は四方上下即ち空間を示す語であり、宙は古往古來即ち時間を意味する語で、時間と空間とに結びつけられてゐる現象のすべてを彼は吾心の表象と考へてかくいつたのであらう。彼が「宇宙内の事は己れの分内の事、己れの分内の事は乃ち宇宙内の事」（年譜）といつたのは即ちその證據である。かくの如く陸子は宇宙現象を吾心の表象と見て吾心の判斷即ち條理を宇宙の理と解し、更に之を道德的に考へて、吾心の仁、或は仁義、或は仁義禮智の四端が即ち此理の顯れだと見てゐる。「蓋し心とは一心也、仁は即ち此心也、此理也」（全集一、與曾宅之書）といひ、「仁義は人の本心也」（全集一、與趙監書）といひ、又「四端は即ち此也、人皆この心あり、心皆この理を具す、心は即ち理也」（全集十一、與李寧書）といつたのはその意味である。従つて陸子によると宇宙の理も吾心の判斷以外に存するものでないことになる。吾心の判斷は宇宙の理であるが、然し「愚不肖者は物欲に蔽はれてその本心を失ひ、賢智者は意見に蔽はれてその本心を失つてゐる」（全集一、與鄧文範書）、そこで人は先づ其志を立てて實踐躬行して其本心を明かにしなければならぬといふのが陸子學問の要旨である。理氣

を並べ説いた朱子は人間の本性には勿論理が完具してゐるけれども、同時に人は形氣の拘束をうけて本性がくらまされてゐるから、格物窮理の工夫をつんで形氣の累を脱し本性を明かにしなければならぬと教へてたが、宇宙間只一理のみ存すと主張した陸子は「人情物理の變化は到底窮めつくすことができない、一物の不知を恥ぢて格物窮理に熱中するのは恥づべきでないものを恥ぢて終身支離の學を逐うて本心を汨没するものだ」(全集一、與邵叔誼書)といつて朱子を排斥してゐる。そこで朱子の學と陸子の學との相違點は哲學的には前者が理氣の對立を認めて居るのに反し後者はたゞ一理を認めてゐることであり、道德的には前者が格物窮理を力説して學問を尊重してゐるのに對し、後者はたゞ吾心の理を悟ることを重んじて學問よりは履踐實行を進めてゐる點にある。朱子がかつて其門生に書を與へて「陸子靜は専ら徳性を尊ぶべきことを以て人を誨ふ、故に其門に遊ぶもの踐履の士多し、然れども問學の處に於ては缺けたり。某は人を教ふるに問學に由るの處や多し、故に某の門に遊ぶものは踐履は多く之に及ばず」(象山全集三十四)といつたといふが、之は中庸の「徳性を尊び問學に道_よる」といふ二句によつて極めて簡明に朱陸道德説の相違をいひ現はしたものといつてよい。

後に黄宗羲が二家を評して「陸子の學は徳性を尊ぶを以て宗となし、先づ其大なるものを立て、然して後天の我に與ふる所以のものをして小者に奪はれざらしむ、苟も本體明かならずして徒らに功を外に致すは是れ源なき水を索むるなり。朱子の學は問學に道_よるを主となし格物窮理こそ吾人の入聖の階梯、苟も心を信じて自ら是とすれば惟置思に従事するのみにして是れ師心を用ふる也。」(宋元學案五十八)といつたのも同じ意味をいひ現はしたものである。

さて陽明は最初朱子學を學んだが後に一家をなすに及んでは哲學的には陸子の心即理説を採用してゐるが道德説では朱陸を止揚して別に一家の見を立てゝゐる。さうしてその道德説に於いては、知行合一説、靜坐説、致良知説と時を逐つて推移してゐるが、心即理の哲學説に於いては始終一貫して居つたやうに見える。彼が象山文集に序して次の如くいつてゐる。

聖人の學は心學なり、堯舜禹の相授受して「人心惟れ危く道心惟れ微なり、惟精惟一、允に厥中を執れ」といへる、此れ心學の源なり。中なるものは道心の謂なり、道心精一之を仁といふ、所謂中なり。孔孟の學これ仁を求むることを務む、蓋し精一の傳なり。而して

當時の弊固より已に外に之を求むるものあり、故に子貢「疑を多く學びて識る」に致して「博く施し衆を濟ふ」を以て仁となす、夫子告ぐるに「一貫」を以てし教ふるに「能く近く取りて譬る」を以てす、蓋し之をして其心に求めしめたるなり。孟氏の時に迫んで墨氏の仁をいふ「摩頂放踵」に至りて、告子の徒又「仁内義外」の説あり、心學大に壞る。孟子義外の説を闢きて「仁は人心也」、「學問の道は他なし其放心を求むるのみ」といひ、又「仁義禮智は外より我を鑠るにあらず我固より之を有す思はざるのみ」といふ、蓋し王道息みて伯術行はれ、功利の徒外天理の近似せるものを假りて以て其私をなして以て人を欺き「天理固より是のごとし」といふ、既に其心無みず、尙何ぞ所謂天理なるものあらむや、是よりして後、心と理とを折りて二となして精一の學亡ぶ、世儒の支離なる、外刑名器數の末を索めて以て其所謂物理なるものを明かにせむことを求めて、吾心即ち物理にして初より外に假る無きを知らざるなり。佛老の空虚なる、其人倫事物の常を遺棄して以て其所謂吾心なるものを明かにせむことを求めて物理即ち吾心にして得て遺るべからざるを知らざるなり。宋の周程二子に至りて始めて復孔顔の宗を追尋して「無極にして太極、

之を定むるに仁義中正を以てして靜を主とする」の説、「動も亦定、靜も亦定、内外なく將迎無き」の論ありて精一の旨に庶幾し。是よりして後象山陸氏あり、其純粹和平は二子に逮ばざるが若きも、簡易直截眞に以て孟子の傳を接ぐあり、其議論開闢時に異なるあるは乃ち其氣質意見の殊なれるのみにして、其學の必ず心に求むは則ち一のみ。故に吾嘗て斷じて以へらく陸氏の學は孟子の學なりと（文錄四、又、象山全集卷首）。

これによると陽明は聖人の學は心學で、心と理とを一つとしてゐて、孔子孟子はこれをうけつぎ宋に至つて周程二子が又之をうけついで、陸子が又これを闡明したものと見てゐることが判る。さうして陽明が門人の質問に答へて、

諸君我立言の宗旨を識り得ることを要す。我は如今箇の「心即理」をとく。只世人心と理とを分つて二となすがために、故に便ち許多の病痛あり。……故に我は箇の「心即理」を説き心理は是れ一箇なるを知らしむることを要す、此れ我立言の宗旨（傳習錄下）。

といつてゐるのを思ひ合はすと、陽明の心即理説は陸子のそれをうけついでものと考へなければならぬ。さうしてこの心即理説こそ陽明學問の宗旨といふべきところのもので、陽明が

一家言を立てはじめてからその晩年に至るまで一貫して變らなかつたものである。そこで陽明の比較的早い時代の言葉をあつめてゐる徐曰仁錄の中にも、

先生曰く、心即理也、天下又心外の事心外の理あらむや。

又曰く、心即理也、此心私欲の蔽なければ即ち是れ天理、外面一分を添ふるを須ひず、この天理に純乎たる心を以て發して父に事ふれば便ち是れ孝、發して君に事ふれば便ち是れ忠、發して友に交はり民を治むれば便ち是れ信と仁となり（傳習錄上）。

といつてゐるが、又正徳八年（一五一三）陽明四十二歳の時王純甫に與へた書簡中にも、

夫れ物にありては理となし、物を處しては義となし、性にありては善となす、指すところに因りて其名を異にするも實は皆吾の心也。心外物なく、心外事なく、心外理なく、心外義なく、心外善なし（文錄一、與王純甫第二書）。

といつて居り、又嘉靖三年（一五二四）陽明五十三歳の時諸陽伯のために書いた文章にも、妻姪諸陽伯復學を請ふ、既に之に告ぐるに格物致知の説を以てす。他日復請ふ、復之に告げて曰く、心の體は性也、性は即ち理也、天下寧ぞ心外の性あらんや、寧ぞ性外の理あら

んや、寧ぞ理外の心あらんや、心を外にして以て理を求むるはこれ告子義外の説也。理なるものは心の條理也、この理親に發すれば則ち孝となり、君に發すれば忠となり、朋友に發すれば信となり、千變萬化窮竭すべからざるに至るも吾の一心に發せざるなし（文錄五、書諸陽卷）。

といつてゐて、陽明が道德實踐の法として知行合一、靜坐、致良知を説いた三時期を通じていつも心即理説が唱へられてゐることが判る。實にこの心即理説は陽明學説の根幹で、傳習錄、文錄の諸所に言及してゐる所で、知行合一の説も靜坐の工夫も致良知の説も皆この哲學を背景とした道德説であり修養論である。さうして或る人が朱子の大學或問の一節を引いて、晦庵先生曰く、「人の學を爲す所以のものは心と理とのみ」と此語如何。と問うたのに答へて、

心は即ち性、性は即ち理、（心と性との間に）一の「と」の字を下すは、恐らく未だ二と爲すを免れず、此れ學者にありてよく之を觀るべし。

といひ又、朱子が大學章句に「虚靈不昧、衆理を具して萬事を出す」といつた語を補足して、

虚靈不昧、衆理具して萬事出づ、心外理なく心外事なし（已上傳習錄上）。

といつてゐるのを綜合すると、陽明は朱子の學說中理と心とを分けて考へた點を最も不満足に思つて居るらしい。

かくの如く陽明は陸子の心即理説には終始一貫して信奉してゐたが、その道德説には不満を抱いてゐたらしい。

象山の學、簡易直截、孟子の後一人のみ（然れども）其學問思辨致知格物の説は亦未だ沿襲の累を免れず（文錄二、與席元山書）。

といつた一節はよくその心持をいひあらはしてゐる。さうして彼は朱子が心と理とを二つに見て主觀と客觀に分けた點には全然反對を唱へてゐるが、彼はもともと朱子學から入つた人で、朱子に對する尊敬と愛着を全然離れることができなかった。「僕晦庵に於いて罔極の恩あり、豈戈を操つて室に入るを欲する者ならんや」（外集三、與徐成之書第二）といつた一語はよくその感情をいひ表はしてゐる。さうして殊に朱子が大學を表章して修養の順序を教へた點には賛同したらしく、茲に心即理の哲學によつて如何に大學を解釋するか彼の苦心の存

する所で、陽明學の發展はこの苦心の所産であるといつても過言でない。

第四章 道德説一、—知行合一

年譜によると陽明は正徳三年（一五〇八）三十七歳の時龍場にあつて始めて格物致知の意を悟り覺えず呼躍して「聖人の道は吾性を悟ればよい、これまで事物について理を求めて居たのは間違ひであつた」と喜び、この悟證に本づいて五經の要所を解釋して五經億説四十六卷を作つたといつてゐる。この五經億説は晩年に至つて意に満たなかつたらしく、其門人錢德洪が拜見したいとたのんでも夙に秦火に付してしまつたと笑つてゐたといふから、誰にも出し示さなかつたらしく、今その完本を見ることができず僅かに文録續編にその斷簡十三條のこつてゐるにすぎない。従つて吾々はこれによつて陽明の悟つた格物致知説を考へることはできないが、その後五年正徳八年（一五一三）に歸郷の途上舟中に於いて徐愛と大學の宗旨を論じた語が傳習錄上曰仁録の中に存してゐるから、之によつて彼の格物致知の考を窺ふことができる。恐らくこれが龍場に於いて悟つたといはれる格物致知説であらう。そこで傳習の語を摘出すると次の如くである。

一、先生曰く、至善は是れ心の本體、只是れ明德を明かにして至精至一に到れる處便ち是なり。

愛問ふ、至善を只心に求むれば恐らくは天下の事理に於いて盡す能はざるあるべし。

先生曰く、心は即ち理也、天下又心外の理心外の事あらむや。

二、愛曰く、父母に事ふるの孝、君に事ふるの忠、友に交るの信、民を治むるの仁の如き、其間許多の理あるあり、恐らくは亦察せざるべからず。

先生嘆じて曰く、此説の蔽久し、豈一語の能く悟すところならむや。今姑く問ふ所について之を言はむ。且父に事へて成らず父の上にゆきて箇の孝の理を求め、君に事へて成らず君上にゆきて箇の忠の理を求め、友に交りて成らず民を治め成らず友の上民の上にゆきて箇の信と仁との理を求むる如きは、都只此心にあり。心は即ち理也。此心私欲の蔽なければ即ち是れ天理、この天理に純乎たるの心を以て、發して父に事ふれば便ち是れ孝、發して君に事ふれば便ち是れ忠、發して友に交はり民を治むれば便ち是れ信と仁

となり。只心上にありて人欲を去つて天理を存する上に在つて功を用ふる、便ち是なり。
 三、愛問ふ、昨先生「止至善」の教をき、已に功夫力を用ふるの處あるを覺ゆるも、但朱子格物の訓と合する能はず。

先生曰く、格物は是れ止至善の功、既に至善を知れば即ち格物を知るべし。

四、愛曰く、昨晚思ふに格物の物の字は即ち是れ事の字、皆心上より説くべきか。

先生曰く、然り、身の主宰は便ち是れ心、心の發する所は便ち是れ意、意の本體は便ち是れ知、意の在る所は便ち是れ物、もし意事親にあれば即ち事親便ち是れ一物、意事君にあれば事君便ち是れ一物、……所以に某は説く、心外の理なく心外の物なしと。大學明德を明かにする功は只是れ箇の誠意、誠意の功は只是れ箇の格物。

五、先生又曰く、格物とは孟子の「大人は君心を格す」の格の如し。是れ其心の不正を去つて以て其本體の正を全くするなり。但意念在る所即ち其不正を去つて其正を全くするを要す。即無時處として天理を存せざるなければ即ち是れ窮理、窮理は即ち是れ明々徳なり。

六、愛舊説に汨没するに因つて、始めて先生の教をき、實是駭愕定らず入頭の處なし。其後之をきく既に久しくして漸く身に反みて實踐することを知り、然して後始めて先生の學を信じて孔門の嫡傳と爲す。……格物は是れ誠意の工夫・窮理は是れ盡性の工夫・道問學は尊徳性の工夫、諸の此の如きの類、始は皆落々として合し難かりしもの其後之を思ふ既に久しくして手の舞ひ足の蹈むを覺えず（傳習錄上目仁所録）。

右の諸條を熟讀玩味すると陽明の格物致知の意を了解することができる。即ち朱子は格物致知を外界の事物の理に窮め至ることによつて己の知を擴充する意味に解してゐるが、陽明は格の字を正す義（第五）物の字を意の在る所換言すれば意念の發動してゐる事件の義（第四）と解して、吾人の意念が動いて爲さうと思ふ事件事件を私欲を去つて吾心の條理即ち天理の指示するままに正しく行ふことだ（第二）と主張して、かく行ふことが即ち誠意の工夫、同時に又止至善の工夫だ（第三及び第四第六）と解釋し、かくて意を誠に止まるることが即ち意の本體たる知を明かにすることで、これが明德を明かにする手段だと考へたのであつて、朱子の解釋と全然別に成つてゐる。蓋し朱子は知を自己内の知、事を外界の事物と見て、内

外を分けて考へた説であるが、陽明は心即理の哲學に本づいて内外を一と見て格物を吾心の判斷條理のまゝ行ふことゝ解したのであつて、此の解釋によつて大學の修養過程が陽明の哲學と一致することに成つたのである。さうして陽明の哲學は陸子のそれをうけつぎ、大學によつて修養の過程を説くのは朱子學の本領であるから、陽明の格物致知説は陸子と朱子とを止揚して一家をなした新學説と見ることが出来る。

陽明は龍場謫居の初にあつて新しい格物致知説を唱へて陸子學と朱子學とを止揚したが、更にその翌年には知行合一説を唱道してその内容を一層明確にした。年譜によると正徳四年（一五〇九）貴陽の提學副使席元山といふ人が陽明に對して朱陸の異同について質問したが、陽明は直接朱陸の評論をさけて、自己の悟證によつて知行の本體を説き聞かせた、これが知行合一説の提唱された最初であるとしてゐる。席元山名は書、字は文同といつて陸子の學を尊信した人であるが、之に對しても朱陸の論評をさけ、その翌々年に王興庵と徐成之との二人が朱陸の優劣を論じて判斷を陽明に乞うた際にも、「晦庵と象山とその學をなす所以の者同じからざるあるがごときも、要するに皆聖人の徒たるを失はず」（外集三、答徐成之書）とい

つて、常に朱子に對して調停的態度を取つてゐるが、この知行合一説も朱陸を止揚した彼の格物致知説の知の性質を一層明確に説明しようとしたもので、固より朱子に反抗する意志に出發したものではないらしい。

所謂知行合一説とは一般に區別して考へられてゐる知と行とを一つのものの両面と説明してやゝもすると一方を偏重して他方を輕視する弊を矯正しようとしたものである。即ち、

知は是れ行の主意、行は是れ知の功夫、知は是れ行の始、行は是れ知の成、若し會し得る時は、只一箇の知を説けば已に自ら行のあるあり、只一箇の行を説けば已に自ら知のあるあり（傳習錄上）。

知は行の始、行は知の成、聖學は只一箇の工夫、知行は分つて兩事となすべからず（同上）。といつたのは知行が本來一箇のもので、兩つに分つべからざる意をのべたものであるが、陽明は更に兩者の一と見らるべき理由を説明して、

大學に「好色を好むが如く、惡臭を惡むが如し」と説く。好色を見るは知に屬し、好色を好むは行に屬す、只かの好色を見る時已に自ら好む、見了りて後又一箇の心を立て、好に

ゆくにあらず。惡臭を聞くは知に屬し惡臭を惡むは行に屬す、只かの惡臭をかぐとき已に自ら惡みて、かぎりて後に別に一箇の心を立て、惡むにゆくにあらず……又痛みを知るは必ず已に自ら痛みて方に痛みを知るが如し。知行如何ぞ分開するを得ん、是れ便ち是れ知行の本體(同上)。

といひ、又兩者の竝進して分ちがたきことを例證して、

夫れ人必ず食はむと欲するの心ありて然る後食を知る。食はむと欲するの心は即ち是れ意にして即ち是れ行の始なり。食味の美惡は必ず口に入るをまちて後知る、豈口に入るをまちたずして已に先づ食味の美惡を知るものあらむや。必ず行かむと欲するの心ありて然る後路を知る。行かむと欲するの心は即ち是れ意、即ち是れ行の始なり。路岐の險夷は必ず先づ身親しく履歷するを待ちて後知る、豈身親しく履歷するを待たずして已に先づ路岐の險夷を知るものあらむや。則ち知行の合一竝進する亦自ら疑なかるべし(傳習錄中)。

と説き、遂に、

知の眞切篤實の處即ち是れ行、行の明確精察の處即ち是れ知、知行の工夫は本離すべから

ず(同上)。

と斷じてゐる。以上は知行の合一と見らるべき理由を説明したのであるが、公平に考へると彼はつとめて自説に都合のよい例のみをあつめて説明した嫌があつて、僻説を弄する感じもする。

然らば彼は何故にか様な僻説じみた閑葛藤に力をそゝいたのであらうか。彼が「古人は知行を二つととき自分は之を一つととくが、もし立言の宗旨を考へてもらはなければ一といつても二といつても無用の論だ。蓋し古人が知行を二つとして教へたのは、世間には一方に何も考へずに振舞つて居る人がある、これらの人には特に學問をして知を窮めよと教へる要がある。又一方には考へてばかり居て行はない人がある、これらには力行をすゝめて論す必要がある。古人が知行を二つとして教へたのはこれら兩様の人の弊をためるための教へであるが、現在は却つて知つてから行ふべきものだ」と考へて、徒らに講習討論に日が暮れて行はないで世を終る人が多い。そこで自分は知行合一説を唱へるのであつて、これは病に對する一つの藥だ」(傳習錄上取意)といつて居る。これによると知行合一説は問學を重んじた朱子の

學と徳性を尊んだ陸子の學との弊を救ふために兩者止揚して新道德説を立てたものと見られる。

然し又彼は或時「この知行合一説は時弊を救ふための緊急動議であるが決して自分勝手な詭辯を弄して一時の效を苟むものではない。蓋し物理は吾心と別な存在でなく心は即ち理である。然るに晦庵は心と理とを分けて二となして説いたがために、後世たゞ本心をのみ是れ求めて物理を遺れる弊（暗に陸子の後學を指す）と、心を外にして物理を求める弊（朱子の後學を指す）とがあらはれた。知行を二つと見るのはこの心即理の哲學が判らぬためで心と理とを一つと悟れば自然知と行とも合一と考へらるべきだ」（傳習録二、答人論學書）と説明してゐる。これによると陽明知行合一説は心即理の哲學に本づいて組織された道德説といひ得る。

そこで私は陽明の知行合一説なるものは、心即理の哲學に本づいて、當時對立的形勢を示してゐた朱子の問學偏重の修養法と陸子の徳性偏重の道德説とを止揚して綜合された道德説であるといひたい。彼の顧東橋が陽明に與へた書中に、

知行並進して前後を分別すべからずとせば、即ち中庸の「徳性を尊び問學に道る」の功、交養互發して内外本末一以て之を貫くの道なるべし（傳習録中）。

とある一節は陽明の目標意圖を簡明に評し得た語といつてよい。

然らば陽明はこの知行合一説を以て如何に修養の用にしようと思つたのであらうか。それは次の一條の問答が尤もよく説明する。

知行合一を問ふ。

先生曰く、此れ須らく我立言の宗旨を識るべし。今人學問只知行分つて兩件となすによるが故に、一念の發動不善なりといへども然も卻て未だ會て行はざれば便ち禁止し去らざるあり。我今箇の知行合一を説く、正に人の一念發動の處便ち是れ行なるを曉り得せしめて、發動の處に不善あらば就ちこの不善の念を以て克倒せしめむことを欲するなり。須らく根に徹し底に徹するまでかの一念の不善をして潜伏して胸中にあらしめざらむことを要むべきなり。此は是れ我立言の宗旨なり（傳習録下）。

これによると彼は世人が知行を兩件と見てゐる結果道德は行にさへ現はれなければよいもの

と考へ、惡念の起ることを克伏しようと思ふのを憂へて、既に惡念が起れば惡に一步ふみ入れたもので程度の差こそあれ惡行爲と見るべきであるから、念頭萌起の際に於いて之を克伏せしめようと思へたもので誠に眞面目な主張であるといはねばならぬ。想ふに陽明は知行の合一或は並進を強調することによつて格物と致知との關係を緊密にして致知即格物、格物即致知と解釋することによつて知に實行性を持たせたもので、之が一步をすゝめたのが後に提唱される致良知説である。

第五章 道德説二、—靜坐

年譜によると陽明は正徳八年（一五一三）四十二歳の時滁州に行つて馬政を督べることゝなつた。滁州は山水の景色もよく事務も閑散であつたので、門人等と琅耶に遊遊して吟風嘒月の間に諸生を教導したので從遊の士が頗る多かつたと記して居るが、傳習録下卷には、先生曰く、吾昔滁に居たりし時、諸生多く知解口耳の異同につとめて得に益なきを見て姑く之に靜坐を教ふ。一時光景を窺見して頗近效を收む。久しくして漸く靜を喜び動を厭ひて枯槁の病に入り、或は玄解妙覺を爲して人の聽聞を動かさむことを務む。故に爾來只致良知を説く（傳習録下）。

といつてゐて、陽明が致良知を唱へ出したのは正徳十六年（一五二二）からだとされてゐるから、正徳八年から十五年まで凡そ七年間は主として靜坐をすゝめたものと解せられる。

儒家が靜坐を説くに至つた淵源を探ると、周子の主靜説、程明道の定性説に兆して、程門

の謝上蔡その後をうけた陸象山に溯ることができ、明に入つて特に之を尊重したのは陳白沙及び其門人湛甘泉であらう。さうして陽明が湛甘泉と親密であつたことは上にのべた通りであるから、彼が靜坐をすゝめたのも外面的には湛甘泉の影響であらうが、又内面的には從來唱へ來つた知行合一説がやゝもすると理窟になつて議論仆れとなる弊があらはれたからである。彼の靜坐が如何なる意味のものであつたかは次の諸條が之を暗示してゐる。

九川問ふ、近年泛濫の學を厭ふにより毎に靜坐して念慮を屏息せむことを求めむと要むるも、たゞ能はざるのみならず愈々擾擾を覺ゆるは如何。

先生曰く、念如何してか息むべけん、只これ正を要めよ。

曰く、自ら無念の時あるべきか否や。

先生曰く、實に無念の時なし。

曰く、此の如くんば却ち如何してか靜と言ふ。

(先生) 曰く、靜は未だかつて動かずんばならず、動も未だ嘗て靜ならずんばならず、戒愼恐懼即ち是れ念、何ぞ動靜を分たむ。

曰く、周子何を以てか「之を定むるに中正仁義を以てして靜を主とす」といへる。

(先生) 曰く、無欲の故に靜なり、是れ「靜も亦定、動も亦定」の定の字、本體を主とするなり。戒懼の念は活潑地、此はこれ天機息まざるの處、一たび息まば便ち是れ死なり。本體の念にあらざるは即ち是れ私念なり(傳習錄下)。

孟源問ふ。靜坐中思慮紛雜、禁絶する能はず。

先生曰く、紛雜せる思慮は亦禁絶し得ず、只思慮萌動の處について省察克治して天理精明に到れば、自然精專紛雜の念なし、大學にいはゆる止まるを知つて後定まるあるなり(年譜一引)。

寧靜存心の功夫を問ふ。

(先生) 曰く、只人欲を去りて天理を存するを要むる方に是れ功夫。靜時も念念人欲を去りて天理を存し、動時も念念人欲を去りて天理を存し、寧靜不寧靜に管せざれ。若しかの寧靜にたよらば惟漸くにして靜を喜び動を厭ふの弊あるのみならず、中間許多の病痛只是れ潜伏しありて終に絶去する能はず、事にあへば舊によりて滋々長ぜむ。理に循ふを以て

主となさば何ぞ嘗て寧靜ならざらむ。寧靜を以て主となさば未だ必ずしも理に循ふ能はず
(傳習錄上)。

などを綜合して考へると陽明の靜坐は思慮萌動の際にあたりて人欲を去つて天理を存するた
め的手段で之によつて放心を收斂して天理を存するやうに導かうとしたもので、知行合一説
と同じ目的の下に唱道された修養手段である。従つて陽明の靜坐は佛教の坐禪と形式に於い
ては似てゐるが、その精神に於いては同じでない。然し靜坐を説く儒家はいつも釋氏に流れ
たのだといふ批評をうけてゐる。象山然り、白沙然り、甘泉然りで陽明も亦同じ批評をうけ
たのである。そこで彼は象山文集の序中に於いて象山を辯護して、

陸氏の學は孟氏の學なり、而れども世の議する者遂に詆りて以て禪となす。夫れ禪之説は
人倫を棄て物理を遺れて其歸極を要め、以て天下國家を治むべからず、苟くも陸氏の學に
して果して是のごとくならば、乃ち以て禪となすべし。今禪の學と陸氏の説と其書ともに
存す、苟くも取りて之を觀れば其是非同異當に辯ずるを待ざるべし(文錄四)。

といひ、又別湛甘泉序には、

甘泉の學は務めて自得を求むるものなり、世未だ能く之を知らず、其知れる者もまた疑つ
て禪と爲す。誠に禪なるは吾猶未だ得て見ず、況や其志す所卓爾たる此のごとければ則ち
甘泉の如きは聖人の徒にあらずや(文錄四)。

といつて辯護してゐるが、この辯護はやがて彼自身の自家辯護にもなり得る筈である。さう
して彼は儒釋の別を論じて、

或人問ふ、釋氏も亦養心を務む、然れども之を要するに以て天下を治むべからざるは何ぞ
や。

先生曰く、吾儒の養心は未だ嘗て事物を離卻せず、只其天則自然に順ふこと就ち是功夫。
釋氏は卻て事物を盡絶し心を把りて幻相と看做し、漸く虛寂に入り去り、世間と些^{すこ}子の交
渉無きがごとし。天下を治むべからざる所以(傳習錄下)。

といひ、又、

問ふ、釋氏は世間一切情欲の私に於いて都て染着せず、私心なきに似たり。但し人倫を外
棄するは卻て未だ理に當らざるに似たり。

曰く、亦只是れ一統の事、都て只是れ他一箇の私己を成就す（傳習錄上）。
 といつて、儒釋を區別してゐる。しかしその門弟中にはいつしか玄解を喜んで禪に流れるものがあらはれ出した。蕭惠王嘉秀らが仙釋を悦んで陽明から叱られて居るのも此頃の事である。そこで陽明は靜坐をやめて致良知を唱へたのである。

吾昔滁に居りし時姑く之に靜坐を教ふ。久しくして漸く靜を喜び動を厭ひ流れて枯槁の病に入る。邇來只致良知を説く。良知明白なれば隨たひ儼かん靜處にゆいて體悟するも好く、隨ひ儼事上にゆきて磨鍊するも又好し。良知の本體は原是れ動もなく靜もなきもの、此れ便ち是れ學問の頭腦、我がこの話頭は滁州より今に到るまで亦幾番いくたばも較過あたらたるも只この致良知の三字のみ病無し。醫は眩を折るを経て方に能く人の病理を察すべし（傳習錄下）。

といつてゐるのは此間の消息を語るものである。致良知説は陽明學最後の結論であつて、三たび眩を折つて初めて醫術の妙を得たやうなものだと彼自身も自負してゐる。

第六章 道德説三、—致良知

致良知説は大學の「格物致知」の知の字を孟子の「良知」と解釋して唱へ出された道德論で、年譜によると正徳十六年（一五二一）陽明五十歳の時始めて提唱された説であると記してゐるが、傳習錄を通覽すると徐愛が南中に於いて聞いたといふ語録の中に既に致良知の三字が出てゐるから、必ずしも此年から始まつた教訓だとは斷ぜられない。但しこの三字を學問の宗旨として説き出されたのは此年以後のことである。彼自身の言に、

區區論ずる所致知の二字乃ち是れ孔門の正法眼藏、之を知るもの方に道を知るといふべく、之を得るもの方に有徳と稱すべし（文録二、與楊仕鳴書）。

比家ひけの多難に遭ひて工夫極めて力を費す、因りて良知の兩字を見得たり、舊にくらべて愈、親切を加ふ、眞に所謂大本達道、之をすて、更に學問の講すべきなし（文録三、寄鄒謙之書）。

某近來卻て良知の兩字を見得たり、日に益々、真切簡易、朝夕朋輩と講習する只この兩字を發揮す（文錄三、同上）。

近時四方來遊の士頗衆し、其間甚だ魯鈍なりと雖ども良知の説を以て、略々點撥を加ふれば即ち開悟あらざるなし、是を以て益々信じ得たり、此二字は眞に吾聖門の正法眼藏なるを（文錄二、與鄒謙之書）。

とあつて或は聖門の正法眼藏だといひ、或は大本達道だといひ、又朝夕此兩字を發揮すといひ、良知の説を以て點撥を加ふれば開悟あらざるなしなどいつてゐるのを見ても、陽明が如何に致良知の三字に自負してゐたかと思像せられる。さうして、

夫れ心の本體は即ち天理なり、天理の昭明靈覺は所謂良知なり（文錄二、答舒國用書）。

心は天地萬物の主なり、心は即ち天、心をいへば天地萬物皆之を擧ぐ（文錄三、答季明德書）。

良知の人心にある則ち萬古一日の如し、苟も吾心の良知に順つて之を致せば則ち所謂「足

を知らずして履を作るも我その躰を作らざるを知るなり」（文錄三、寄鄒謙之第二書）。

などいつてゐる語を熟讀玩味すると致良知説にもまた心即理の哲學が背景をなして居ることが首肯せられる。従つて陽明の道德説は時期によつて推移したが、その背景に成る哲學は終始一貫してゐる。

致良知説は陽明最後の道德説で傳習錄文錄の各處に散見してゐるが、傳習錄の改修者錢德洪は致良知説が最も明白に説明されてゐるのは答聶文蔚書であるといつてゐるから、こゝに聶文蔚に答へた書簡によつてその梗概を紹介しよう。聶文蔚名は豹、雙江と號し、江西永豊の人で御史として閩越地方を按察したとき態々道を枉げて陽明に見えて教をうけたが、未だ弟子にはなつてゐなかつた。陽明が思田の征伐を終へて歿した際文蔚は蘇州に官吏として居たが、其生前に弟子の禮をとらなかつたことを悔いて、位牌の前で錢德洪を證人として入門の禮をとつたといふ。

傳習錄中卷に聶文蔚にあてた手紙が二通のせられてゐる。その第一信は年譜には嘉靖五年（一五二六）八月にかけてゐるから陽明五十五歳の書簡である。其内容は先づ文蔚が道を迂回して倦々の情をよせたことを謝し、次に良知の説明に入つて、

夫れ人は天地の心にして、天地萬物は吾一體なり、生民の困苦荼毒は孰れか疾痛の吾身に切なるものにあらざらんや、吾身の疾痛を知らざるは是非の心なきものなり。是非の心は慮らずして知り、學ばずして能くす、所謂良知なり。良知の人心にある、聖愚を問つるなく天下古今の同じきところなり。世の君子惟其良知を致さむことを務むれば則ち自らは非を公にし好悪を同じくし、人を視ること己のごとく國を視ること家のごとくにして天地萬物を以て一體となす。天下の治まるなからむことを求むるも得べからざるなり。

といひ、次に良知を唱へるに至つた徑路と其社會的反響をのべて、

僕誠に天の靈によりて偶々良知の學を見るあり、以爲らく必ず此に由りて後天下得て治むべしと。是を以て斯民の陷溺を念ふごとに則ち之がために戚然として心を痛め、其身の不肖を忘れて此を以て之を救はむことを思ひて亦自ら其量を知らず。天下の人そのかくのごときを見て遂に相與に非笑して詆斥して以爲へらく此れ病狂喪心の人のみと。嗚呼是れ奚ぞ恤ふるに足らむや。

といひ、更に、

今誠に豪傑同志の士を得て扶持匡翼して共に良知の學を天下に明かにし、天下の人をして皆自ら其良知を致すことを知らしめ、相安んじ相養ひて其自私自利の蔽を去り、讒妬勝忿の習を一洗して大同に濟さしめば、則ち僕の狂病固より將に脱然として愈えて終に喪心の患を免るべし、豈快ならずや。

といつてこの致良知説によつて天下社會を匡救しようといふ抱負をのべてゐる。之によつて吾人は彼が致良知説に對する抱負と其唱説當時の社會の反抗との一斑を窺ひ得る。

次に第二信には最初に、當時「忘るゝ勿れ助くる勿れ」といふ孟子の語をもつて修養の法則と唱へるものがあることを記し、次に之に對する陽明自身の品隋をのべて自分の學問は「必ず事あり焉」といふ點に注意して「忘るゝ勿れ助くる勿れ」といふ點を重視しない。即ち何か事がある際その時々集義の工夫をこらすことが肝心で集義の工夫が間斷あるときは「忘るゝ」ことになり、又速に效を求めようとすれば「助くる」こととなる、畢竟「忘るゝ勿れ助くる勿れ」といふことは「必ず事の起つた場合集義をつとめて忘るゝ勿れ助くる勿れ」といふ意味で單に空裏に「忘るゝ勿れ助くる勿れ」といふのでは實行の手がかりがない、

例へば飯をたく際、水を入れずに米のみを入れて煮るやうなもので、火がもえれば鍋が破れて了ふ、だから自分は空裏に「忘るゝ勿れ助くる勿れ」とはとかずに「事ある際に集義を忘るゝな」と教へてゐるといつてゐるが、こゝに「忘るゝ勿れ助くる勿れ」を修養の極則と考へたのは湛甘泉であるから、此評は湛甘泉一派に對するものであらう。

かくて集義の工夫を説いた後筆をすゝめていふ。

集義は只是れ致良知、(然れども)集義と説かば則ち一時未だ頭腦を見ざるべきも、致良知と説かば即ち當下實地歩に工を用ふべきなり、故に區區専ら致良知を説き時に隨ひ事に就いて其良知を致さしむ、便ち是れ格物なり。著實に良知を致すは便ち是れ誠意、著實に其良知を致して一毫の意必固我なきは便ち是れ正心なり。著實に良知を致せば則ち自ら忘るゝの病なく、一毫の意必固我の病なければ則ち自ら助くるの病なし、故に格致誠正を説けば則ち必ずしも更に箇の忘助を説かざるべし。……若し時時刻刻自己心上について義を集むれば則ち良知の體洞然として明白にして自然に是を是とし非を非として纖毫も遁るゝ莫かるべし。

之によると致良知は孟子の集義と同じ工夫で、事あるごとに事件事件を吾心の判断に従つて實行することであるが、集義といへば漠然として把握する所がない感じを興へるから、陽明は特に致良知を提唱したものと見える。乃て彼は更に良知その物を説明して次の如くにいつてゐる。

蓋し良知は只是れ一箇の天理の自然に明覺發見する處、只是れ一箇の眞誠惻怛こそ便ち是れ他の本體なれ。故にこの良知の眞誠惻怛を致して以て親に事ふことは便ち是れ孝、この良知の眞誠惻怛を致して以て兄に従ふことは便ち是れ弟、この良知の眞誠惻怛を致して以て君に事ふことは便ち是れ忠、只是れ一箇の良知は一箇の眞誠惻怛なり。……良知は只是れ一箇にして、その發見流行の處に隨ひて當下具足すべきも、更に去來なく、假借すべからず、然れども其發見流行の處は却て自ら輕重厚薄ありて毫髮も増減すべからざる者あり、所謂天然自有の中也。輕重厚薄毫髮も増減すべからずといへども、原又只是れ一箇なり。只是れ一箇なりといへども其間輕重厚薄又毫髮も増減すべからず、若し増減すべく、若し假借すべければ即ち已に其眞誠惻怛の本體にあらず、此れ良知の妙用方體なく窮盡な

く、大を語れば天下も能く載するなく小を語れば天下も能く破るなき者なり（以上傳習錄中、答聶文蔚第二書）。

これによると良知の本體は一箇の眞誠惻怛の情で、此の情は時と場合によつて種々な形をとつてあらはれ孝となり忠となり弟となつて、孝の發見と忠の發見また弟の發見等各發見し方には一定した様式はもつてゐるが、本を正せば一箇の眞誠惻怛の情である。

聶文蔚に答へた第二書では良知を眞誠惻怛の情だとしてゐるが第一書には是非の心だと説明してゐる。心理學的にいへば前者は情の作用で後者は知の作用であるが、もとこれ吾心の天理の發見の二面にすぎない。さうして陽明が心を説明して「心は一のみ、其全體惻怛なるを以て言へば之を仁といひ、其宜を得るを以て言へば之を義といひ、其條理を以ていへば之を理といふ」（傳習錄中、答顧東橋書）といつてゐて惻怛は情であり、義と理とは知的分別であるから吾心の良知も亦知的方面に情的方面を兼ねてゐるものと見なければならぬ。要するに陽明の良知は知情意を分析した知でなくて知情意が渾然と一となつてゐる判断をいふのであつて、情の方面からいへば惻怛であり、知の方面からいへば是非分別の作用であると思ふべき

ではない。さうして知行合一を唱へた彼の立場から推測すれば意の作用も勿論その内に含まるべきであらう。従つて所謂良知は吾人が事件に遭遇してかくあるべきだと判断する作用を指すもので人間の道德的直覺を意味するのであらう。

以上陽明の道德説が最初知行合一説から中頃靜坐法に、而して晩年に致良知説に推移したことをのべて其概略を説明し終つた。この三説は必ずしも互に相排するものでなく竝存し得る性質の學説であるから、主として知行合一説を唱へて居た時期にも既に致良知説が芽生えて居り、致良知説が主張された時代にも時々知と行とが合一並進すべきことに説き及んで居ることもある。併し何といつても致良知説が陽明の最後の歸結で、陽明學は心即理の哲學の上に立つて良知を致さうとするものといつてよい。そこで其哲學と道德説とを混じへ説いて大學を解釋した大學問を抄譯してその結論に代へる。

第七章 大學の解釋

一 朱子の大學章句

陽明の大學問を紹介するに先だつて朱子の大學章句について一言しよう。

前にも述べた通り大學はもと禮記中の一篇で作者不明の文章であるが、朱子は特にこの一篇を摘出して論孟中庸に合せて四書と稱しその註釋をかけた。今四書集註の中に存する大學章句がそれである。朱子によると大學は古の大學に於ける教育の法を敍した書物で、孔子の門人曾子が其師の言を傳述したものを曾子の門人等が記録したものだとしてゐる。そこで朱子はまた禮記中の大學篇には頗る錯簡があつて意味の通じない點があると見て其順序を改易し、之を十一章に分け、最初の一章を經文とし、後の十章を傳文とし、經の一章は曾子が孔子の言を述べたもので傳の十章は曾子が孔子の言を敷衍したのを門人がかいたのだとしてゐる。説明の便宜のために經の一章と傳の章數とを左に記さう。

大學の道は明德を明かにするにあり、民を親にするにあり、至善に止るにあり（此三者は大學の綱領なり）。

止るを知りて后定るあり、定まりて后能く靜に、靜にして后能く安く、安くして后能く慮り、慮りて后能く得。物に本末あり、事に終始あり、先後する所を知らば則ち道に近し。古の明德を天下に明かにせむと欲するものは先づ其國を治む、其國を治めむと欲するものは先づ其家を齊ふ、其家を齊へむと欲するものは先づ其身を脩む、其身を脩めむと欲するものは先づ其心を正しくす、其心を正しくせむと欲するものは先づ其意を誠にす、其意を誠にせむと欲するものは先づ其知を致す、知を致すは物に格るにあり（此八者は大學の條目なり）。

物格りて后知至る、知至りて后意誠に、意誠にして后心正し、心正しくして后身脩まる、身脩まりて后家齊ふ、家齊ひて后國治まる、國治まりて后天下平なり。天子より庶人に至るまで登に是れ皆身を脩むるを以て本と爲す。其本亂れて末治まるものは否^{あら}ず、その厚かる所者薄くして、その薄かるべき者厚きは未だあらざるなり。

右經の一章は蓋し孔子の言にして曾子之を述ぶ、其傳の十章は則ち曾子の意にして門人之を記せるなり。舊本頗る錯簡あり、今程子の定めし所によりて更に經文を考へ別に序次を爲す左の如し。

- 傳の首章、明德を明かにするを釋す。
- 傳の二章、民を新たにするを釋す。
- 傳の三章、至善に止るを釋す。
- 傳の四章、本末を釋す。
- 傳の五章、蓋し格物致知の義を釋して今は亡びたり。
- 傳の六章、意を誠にするを釋す。
- 傳の七章、心を正しく身を脩むるを釋す。
- 傳の八章、身を脩め家を齊ふるを釋す。
- 傳の九章、家を齊へ國を治むるを釋す。
- 傳の十章、國を治め天下を平にするを釋す。

凡そ傳は十章、前の四章は綱領の指趣を統論し、後の六章は條目の工夫を細論す。其第五章は乃ち善を明かにするの要、第六章は乃ち身を誠にするの本、初學にありて、尤も當務の急となす。讀者其近きを以て之を忽にすべからざるなり。

以上は大學章句經文第一章と傳の章目をあげたのであるが之によつて朱子の改訂章次は頗る合理的に見えるが、その中注意を要することは傳の五章格物致知の義を釋する部分が大學本文に闕けてゐると考へて之を補つたことである。朱子の補傳は次の如くである。

傳の五章は蓋し格物致知の義を釋して今は亡びたり。間嘗て竊に程子の意を取りて之を補うて曰く、所謂「知を致すは物に格るにあり」とは、吾の知を致さむと欲すれば物に即いて其理を窮むるを言ふなり。蓋し人心の靈なる知あらざるなく、而して天下の物理あらざるなし。惟理に於いて未だ窮めざるあり、故に其知盡さざるなり。是を以て大學の始教は、必ず學者をして凡そ天下の物に即いて其已知の理によりて益々之を窮めて以て其極に至らむことを求めしめ、力を用ふること久しくして一旦豁然として貫通するに至らば則ち衆物の表裏精粗至らざるなくして吾心の全體大明かならざるなし。此を「物格る」といひ、

此を「知の至」といふなり。

右大學章句の分章と補傳とを綜合して考へると朱子の大學に對する見解はよく分明する。即ち朱子によると大學第一章に大學教育の目的は、(一)明德を明かにすること、(二)民を親あたらにすること、(三)至善に止ることの三綱領にあつて、この目的を達成するためには、(一)格物、(二)致知、(三)誠意、(四)正心、(五)脩身、(六)齊家、(七)治國、(八)平天下の八條目の順序により脩養すべきことを説いたものであると見、傳の十章の内初の四章はその三綱領と本末とを解釋し、後の六章は八條目を解釋したものと考へたのであるが、その修養の第一著手點ともいふべき格物致知の傳が闕けてゐると見た彼は右に引用したやうな補傳を作つた。この補傳は大學章句の眼目ともいふべきもので之が補はれたことによつて大學全體が朱子の道德説を基礎付けることに成つたのである。既にのべた通り朱子は太極の一理が動いて形而下の物になると、理氣の對立があらはれて、理が萬物の性を決定し、氣が形を賦與する、さうして萬物の性は皆理全體を完具するものであるが、萬物は形氣拘束をうけて理が暗まされて居る、そこで一々の物につき其理を窮めることによつて、我の知を擴充することが道德であり修養であると考へて格

物窮理を修養の第一歩と説いたのであるが、大學がかかる道德説をのべるものとされるのは全くこの補傳が加はつた結果である。補傳は朱子大學章句の大眼目であるが此外にも猶一二注意を要する點がある。その一は格物の格の字を至ると解して格物は物の理に窮め至ることだと説明したのがその二である。又三綱領の一親民の親の字を新の字の假借と見て民を新たにすると解したのがその二である。ところが陽明はこれら諸點に於いて朱子に服せず、大學は矢張り古本のまゝがよいと主張して古本大學を出版し、これによつて陽明の哲學道德説を裏書きするものとした。

二 古本大學の出版

年譜によると陽明は龍場にゐた頃から朱子の大學章句に疑を懷き、禮記の中から大學の古本を手寫して、之を熟讀精思した結果、(一)大學は本來一篇の文章で經傳の區別が存せないこと、(二)格物致知は誠意の工夫であつて別に傳を補ふ必要のないこと、(三)朱子の解釋に誤謬のあることに氣付き、遂に正徳十三年(一五一八)を以て古本大學を出版したと記してゐる。

現に文録卷四にのせられた「大學古本序」に、

舊本析たれて聖人の意亡ぶ、……之を補ふに傳を以てして益、離る、……分章を去りて舊本に復し、傍之が註をなして以て其義を引く、聖人の心を復見して之を求むる者その要あるに庶幾し。

といつてゐるのは正に之にあたるのである。これによると陽明の大學に對する見解は朱子の章句と甚しく相違してゐる。そこで古本大學が出版された翌々年羅整菴は書を陽明に遺つて「足下が朱子の章句を非として古本に復さうと主張される理由は朱子の格物説が理を外物に求めるのをきらつて、只主觀を省察することによつて格物を解しようとするにあるらしいが、これは反觀内省といふことだけを重視して講習討論を無視するものでないか」と詰問した。之に對し陽明は、

夫れ理には内外なく、性も内外なし、故に學も内外なし。講習討論も未だかつて内に非ずんばあらざるなり、反觀内省も未だかつて外を遺さざるなり、……理は一のみ、其理の凝聚を以て言へば則ち之を性といひ、其凝聚の主宰を以て言へば則ち之を心といひ、其主宰

の發動を以て言へば則ち之を意といひ、其發動の明覺を以て言へば則ち之を知といひ、其明覺の感應を以て言へば、則ち之を物といふ。故に物に就いていへば之を格といひ、知についていへば之を致といひ、意についていへば之を誠といひ、心についていへば之を正といふ。正とは此を正すなり、誠とは此を誠にするなり、致とは之を致すなり、格とは此を格すなり、皆所謂理を窮めて以て性を盡すものなり、天下性外の理なく性外の物なし。學の明かならざるは、皆世の儒者が理を認めて外となし物を認めて外となすに由るなり。と反駁して、且つ、

大學古本は乃ち孔門相傳の舊本のみ……舊本の傳はる數千載なり、今其文詞をよむに既に明白にして通ずべく、其工夫を論ずる又簡易にして入るべし。亦何の按據する所ありて、此段の必ず彼にあるべく、彼段の必ず此にあるべきと、此の如何にして缺け彼の如何にして誤るとなして遂に之を改正補輯せんや（傳習錄中、答羅整庵書）。

と主張してゐる。之を熟讀すると朱子と陽明との大學に對する見解の相違は、その哲學の相違に本づくもので、朱子が理氣の對立を認めて内外即ち主觀と客觀を分けて考へたのに對し、